

煙霞小景續

第二

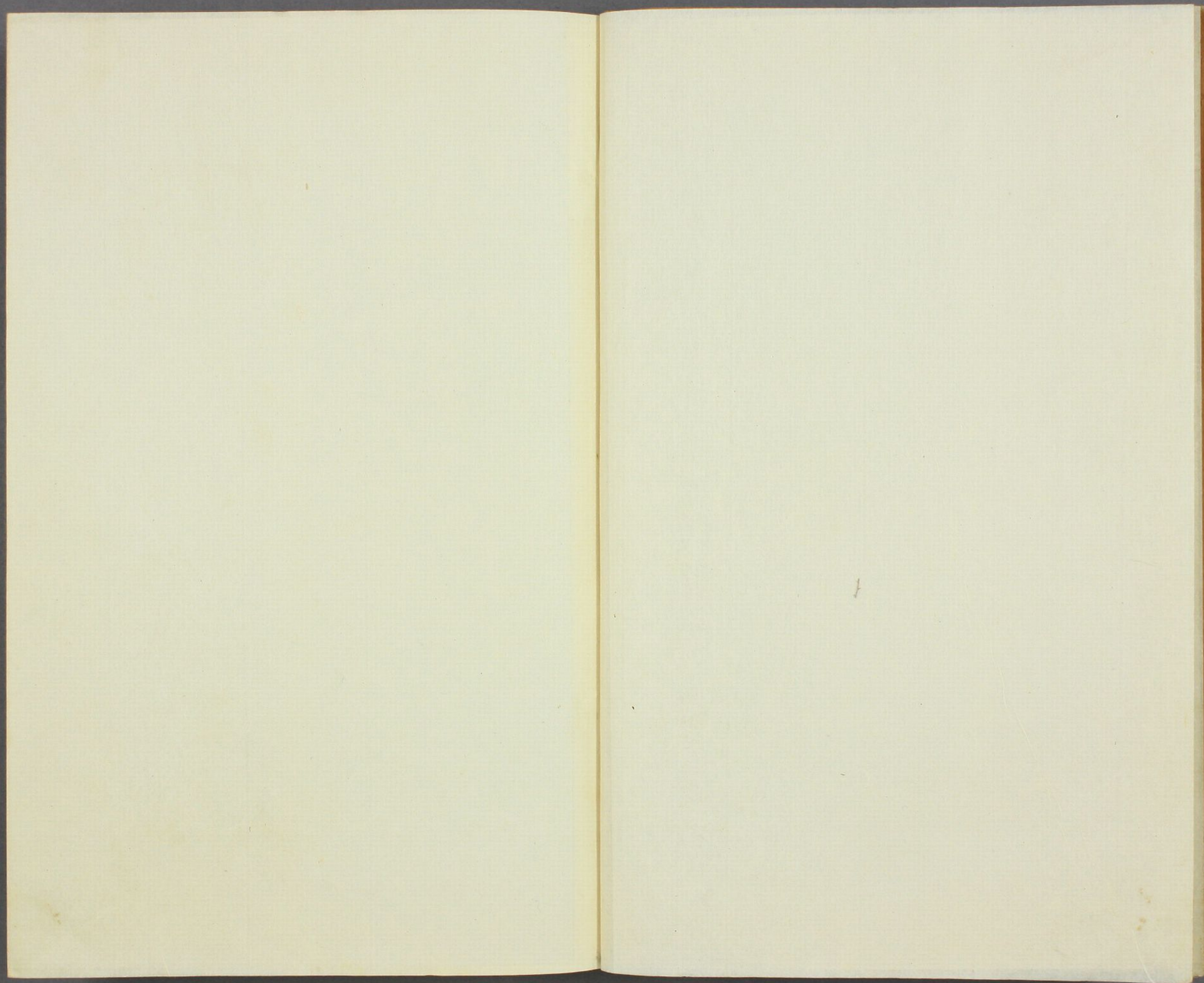
特別
イ 4
3152
48



14
3152
48



95-67





序

かく水にかが影追ふ精蛤がま紅かをる辰にあらん
 もぬ鼻紙宛て冷やかにはほふみたる加賀の子代と
 やらむ情顔の女菩薩やうにぬ奴がう本未凡妻の
 実相を利徳とすれど土が産ました山の草か煙めきさ
 名の神聖とかいふ感も情もいづれ徳の假想ならぬか
 はさへんぞ形ありて影をさのかみ実相ありて假想と
 遠かることなし御代の春俳の袴着たまふ宮女が
 ぼら夜の窓にとり金襴の袈裟めしたまふ禪師

しつ心なく散る花に慙む撞木にて叩き割らばや
這個煩惱の殻を喝 破れずとかうして見せう揚お
雀と身をましてあやむ 執着を解脱しほれの塵世た
いひ助文らぬ月宮殿に入り 嫦娥を音づれとむと撞木
坐せらぬ扇柄傘を手にして 頭取裳をぬ柳行李
をかたげ雨降らうが風吹うが膝栗毛に一鞭ふれて高
く颯々 遠く馳けり 靈息は白雲と凝りて木曾の御
嶽の木魅を驚かし舌は風焔を吐きて 阪東太郎托
水瀬に波とちり三百六十五日と今世界をまやうふ山
人いそぐ在はしけり

仙人の名を知らず生國もわかざらぬむ年齡も致へえず
清癯九霄の孤鶴の如く 冷瘦十年の古木に似たり
渠れ智がやかがつて 破れ笠を焼いて故をばせしとあ
り仁がやかがつて 山がづ杖斧の白ひに梅を哀れみたるこ
とあり 雲がやかがつて 鶯を聴き詩稿を抛ちて起ちし
ことあり 信がやかがつて 歸雁に故山を導むことい
夜がらしとて 無頼無能がやかがつて 紫石の硯を磨き
紅玉の笈を把り 一丈あまう杖藜翁を長へ興かけると
ほいて 錦繡の辭句は蛇の文字 揮灑一返さから宿禰
に出づるかしと傳へし 上人がやかも 一は草餅一重に重

相を傾け、時繪をうつしとたへ下戸かきかへて酒を斗
徳利を砕いて、本末堂へ掛まじはむ女分ありやとへど
獨身の膝を抱いてア、泣しと洒落たり。小供ありや
と聞へど、燒山の初蔵いつ生へるやらちやちやと嘯く
さらば高は世捨人が顔と賓頭盧尊者のごとく丸からず
俗人が錢勘定とんとおぼつかせし何が樂しうてこの世
に生れて来やつたぞと聞へば夢の浮世にたゞ狂へと
たちまち僧日傘をひろげたらむやうに彩雲のたぢひけ
る花の峰、ふがんけなりて見えすなりぬるれより燕
子春を銜ていくたびか回り来りしかど仙人の消息を

ふくものち、語るもたぢくずくもたぢし下界渴仰の
ともから行衛はいつ白木の山中、香かに訪ね行きたる
が猿木杪に手を組みて秋風の冷かざるをかち歎か
ししふ。
友なる久保青見、頃らまた烟霞の景の続稿教を
ものねぢも其の又その人とせりに似たり。魔ま行きて
建仁寺垣を編みたることも、瀟西はたしし。の葉をふ
みつじしたる柿の枝より、拗りて勁曲りて奇なるあり、
清掃した下女のおさん之を誂る、稜たる天骨いつこに之を
求むむ読みもろたか、つから俗に離るるれ俗に離る

がらふに人らしからず人らしからざるがらふに仙に迫りて
時をくちかき花の自在の仙人にまじりあひぬ呼ぶ
聲はし暝まはれと影あり断夢が知らず残魂が知らず
あらたましうらたは浮世やな

上臈も法師も踊り花くる

明治廿二年花残月

貧神 うすね

鳴る神遠く雲散りて

霧をきらめく天の原

むら山すまは森思く

大川野邊の浅みどり

田のともいでる毒にか

虹の七色あやうかた

ややうをいろぐ谷川に

なや河原はおのふと

月可げかきふくし園に
ちるやー夢はあきのしら
あ、お水のながりせむ
涙も歌もあらまーた

うばら花さく那々の海
萱をこくる朝風に
志らべふーと密書に
お音にさふる時のあめ
舞いたつらにわか涙も

あながれいつる心也ーて

行方やまきのつゆ山
あくやまきのつゆ山
風と潮の葉を破る
雪と嵐に中へ
誰かうせせの湯中へ
塔かむいふともあつた

扇といつらなつ月

一壺の酒の夢を
ほの枕にたかねて
さくは西風、ゆるり
たしよとほしおの格
胸の泉の流るるまかせ

豊川題

烟霞小景尔六卷

(其)的面日記

明治辛酉年七月至九月迄迄

一函根より乙女峠まで一引一國府津一山田原一塔澤

一函根古道一姥子一大地獄一乙女峠一御殿場

二、三、河北部北奇勝一新城一長篠一乳岩一石橋

一昭内宿賣一奥川東岸

三、京都一福岡まで一京都一神戸一瀬戸海一

一川司一箱崎一蒲岡

四、大門岬玄武洞一生石原一筑紫宿賣一花屋一

一玄武洞

五、康津より長崎まで—寺山渡—虹の松原—領中庵山
—神崎七釜—名護屋陣營壘—平戸海峡—
—長崎港

六、雲仙より島原まで—長崎の市況及風俗の一斑—茂木
—千皷洋—小濱—雲仙地獄—普賢窟—
—島原—長河—熊本

七、熊本より出水まで—水前寺—熊本城—法性山—
—松崎港—天草洋—米津—出水—愛宕山
—河内温泉

八、鹿兒島より櫻島—阿久根—西方—川内—新田
—仲社—湯田温泉—鹿兒島—城山—祇園祭—
—松浦村—櫻島伝説—櫻島登山—噴火口
—鹿兒島の風俗言語及薩人の将来

九、霧島より八代—加波水—うんの木—龍門瀑—
—國分八幡—日向山温泉—桂阪嶺—霧島祠
—湯野温泉—硫黄山温泉—栲川—吉松—
—お駒殿—人吉—球磨川—八代—征西將軍
—陵—熊本

十、阿蘇より日向神—大津街道—立野—教康流瀧
—湯谷温泉—阿蘇噴火口—阿蘇地形—

— 地獄谷 — 榎木温泉 — 新道 — 熊本 — 羽大
塚 — 黒木 — 靈巖寺 — 日向神四十八巖 — 良
成親王陵

十六 甘木より門司まで — 童男山 — 高良山 — 太刀洗村
— 某 — 環翠亭 — 日田 — 大分新道 — 別府 —
— 豊後温泉の概況 — 棚裁峠 — 宇佐神社 —
— 長門 — 川口 — 九十九物概評 — 徳山 — 廣島
十七 廣島より奥切 — 可部峠 — 新島渡遊覧の来由
— 新島渡概観 — 渡中風景の大観 — 野田の方言
— 廿坪 — 渡中世帯 — 因原

十三 三瓶より松江まで — 江川 — 志学温泉 — 三瓶登山
— 噴火馬院 — 絶頂 — 神西湖 — 出雲大社 —
— 神門郡の奇物 — 奥道湖の北岸 — 松江 —
出雲北岸の奇蹟 — 美保園
十四 美保より大山まで — 境 — 米子 — 大山村 — 大山登
山 — 絶頂晴眺の壮観 — 大山神社 — 船上山 —
— 宇島 — 泊 — 濱 — 湖山池 — 鳥取
十五 鳥取より生野まで — 榎峠 — 嵐嶺 — 大乗寺 —
— 洪水 — 城崎温泉 — 赤石玄武洞 — 豊岡 —
— 表父市場 — 生野

十六 姫路より東京まで
— 白鷺城 — 車窓外の遊地
— 神戸 — 醉殺神社の夜杖 — 楠舟 — 巨掃烟上
— 名古屋 — 熱田祠 — 鉄路破損 — 茅崎 —
— 総括 —

三 たりき地記 (明治三十四年四月)

佐倉 — 成田 — 滑川岩屋 — 小御門神社 — 香取
— 息栖 — 鹿島 — 潮来 — 霞浦 — 筑波 — 館

扇面日記

一 函根より乙女峠まで

門を出て十歩にて都北大路つらや
馬鹿影は夢地春をつねるはかき人地着かき
綺羅は目さむるはや見とれは赤く下地田舎者にて
鈍栗地目を圓らししあや外れ口塞ま得ず鎮守地
神の足白より賑かりたんと又も俗のをぬかすや
らぬことなるしにわれ一人美竹の世地うきこと
とこはあらぬ心に林の車かきしを文びかちに米價たかき故

つらそ長安まよふに及り易からずとふ人此際言まふとに
して生れはし心のいねんもあつたや詮なきは字未だ成
らず志未だ遂せず心に暖居することされどもこれ猶ほ思ふ
べしたる附甲更なる本世をぬわぬ内は薄乏此神を
表ひ外は冷酷此世と闘いつたおし得る迷豫の時や
自然を樂む可国境をわねど放懷道愛此快事かか
くすの同俗にいたさるること深として靈臺の光日に暮
へ沈まむやうもろくたてきえすまぢりまに大人が水壺
此跡者一り筆のふ残此地行地法せんどうりじろげ行く
間には幻境を眼前に現出せしめまどろむ枕の上には周公

を見を美人と誇らぬべりに魂飄忽として最善密さわり
から越えおき自在に香山白水の仙境に道途することむ
るん鳥羽を此夜半の夢にむれむはかたしされは酒よ
りも人を酔はしむる此も春の光にあふもこれからす年
ことに待たるはかの越盾か似たりきして人は畏る一夏の
日樂や宮の長暇あふかためたりけり
氣をうつし心をぬるか旅をよきんむたさるるささ
すればよかるべきをこにも怨はあり去來はるたけむ
く見のくらばやと思へは自ら規畫とやかむつかさるも出て
来るやうわれ觀光の遊をせしことこにいと年長暇

七向にわたって天下ひろくとも残少がた見ゆるつ今一
度の後に西海山陰のわづかを片付けたりせむる足跡すむに
海内に遍ねーといはれ新日本の版圖漸進を地をさかた
しむる幅ったまことちる（それとるむか）ニナ凡や古松
軒杖ともが踏み散らるる程のころはわれも遊
こむかふべくことに事む年はわか一身杖生活にたてさる
へす一大阪落れゆるむす折られむこ水が最近杖長旅
るがし知す待つは年ととにかはらねどことと一むまた一
しほりしよ

六月の末にいそいでまち集れくる長恨は本りぬ鞍の射
杖故湖に放たれ籠の鳥の舊林に翔るもかくやされぬ
市には魔の鳥き浮せ杖われも人さかにせむはかなはぬこと
杖をて車りて拂うて起たむ袂いよとめられ一かばかりに
葎程の白を七月十日頃とさたぬ

二に年ころむつまき友に会ふといへる男なむあけ
わがしたひの旅の杖書と回中大阪までは日多作ともたせ
むとあふと気車にてめれば廿時百とはかるま一をほどのこと
るよしや借にたればとてさうたること杖ある（す）にもあらす連
ものことあ根にあえびるの外に道の奇跡ニ三細所をもさしり
敷目を費すつもりならほとひきしむ杖もわねこより旅はれ

としげ〜道逢うし程の馬直に承儀ぬるを〜
れはぢす(と)福のこと書くらし畢り〜
こたいはれにさほることありて教目を延りし十日とはや過ぎたり
その間世郎乃すすことせければ荒余の土もひが家々むほむほ
あつた書は風も通らぬ家々の空にたれこりて朽木の梢か
へり餘裕もたぬ夜は紋の家に押しかゝりて君の罪もさすり
れはぢす(と)す(と)ま(と)ま(と)白(と)せ(と)きた(と)る(と)の(と)中(と)心(と)に(と)立ち(と)大(と)水(と)派
りか(と)り(と)し(と)か(と)橋(と)の(と)中(と)流(と)え(と)て(と)折(と)角(と)の(と)企(と)は(と)か(と)ち(と)水(と)の(と)泡(と)と(と)消(と)え(と)も(と)や
せ(と)は(と)れ(と)び(と)が(と)い(と)れ(と)を(と)く(と)し(と)や(と)時(と)には(と)面(と)白(と)か(と)ぬ(と)顔(と)を(と)見(と)し(と)紋(と)の(と)し(と)

七月十二日午後零時三十分新橋渡の汽船はあや〜
こたえ(と)我(と)男(と)を(と)載(と)せて(と)長(と)安(と)名(と)利(と)の(と)境(と)を(と)離(と)れ(と)ぬ(と)停(と)車(と)場
にて(と)大(と)半(と)男(と)川(と)と(と)思(と)ふ(と)さ(と)る(と)人(と)我(と)御(と)に(と)か(と)る(と)を(と)送(と)ら(と)せ(と)て(と)車
り(と)し(と)も(と)見(と)え(と)ず(と)既(と)に(と)着(と)した(と)り(と)と(と)思(と)ひ(と)し(と)君(と)を(と)送(と)る(と)こと(と)に(と)け(と)り(と)し
も(と)不(と)思(と)儀(と)なり(と)と(と)思(と)ふ(と)車(と)窓(と)より(と)首(と)さ(と)し(と)延(と)べ(と)し(と)ば(と)し(と)打(と)結(と)の
ひ(と)が(と)程(と)も(と)あ(と)ら(と)ず(と)汽(と)笛(と)一(と)列(と)車(と)轟(と)く(と)南(と)を(と)望(と)み(と)て(と)世
出て〜

車中見るところはけ〜
遠く都城は裡に書を讀みかすかや〜

大森宿頭杖白帆や六仰格下杖船畑やい道いところ
に見る青田までかへばしは飽かす眺められり車行丸
三時同國府津にて車を降す

こけり函根の方へ赴き今宵は塔澤に泊らむきたり
屋に二三里のところ旅の初日をぶらり行かむは興あ
ふしして初より馬車に乗るつもりもあらりり人家のた
ぶとろを通すこせば俗の松並木の政にやる朝より此
がちやりし空模様大にやろか子一面にかきくもりて法里を
流したるむやうにやろぬ今にと思ふ間もたろて大粒なる雨
草帽の相たまるぬるが酒とにいなりし次より蕭として降り出ぬ

破りたりとも一庫の傘あはれはこえおれ嵐の見たときさまのみ
はたきこりけれ棄つても惜しとてこもていっかけまらしむ
草履たかと杖方よりあへなくもちまわれはろく道は沈流
こけりにははぬ上る沈流舟先にも及じ中田原杖市を過
る時には着たる衣大方からず汚れこり良もあらぬ杖
たれば腹立つ苦もたらく心せられも人に眺めらるること何と
なく心あはしきかよたいつやむとも見えぬ雨に淋ぬせし
興も失せられば友がまかまづいい出せーまたこころより馬車
に乗るこころ決し一時同宿もろの来るを待ちつゝ休憩せし
後来るこの位がうは田村津よりすくに乗るべかりしものを

と今は後悔さすにたがす

湯床にて馬車を下りて七所のところをよすせばはやき湯に
りかつて滞雷せしとある藤尾へつた投すかたにとも見
覚えてありむねいふお心の考ありしにあらすたゞ空栗地
痛さにたつかきまさは盗するとはあらぬと家の中
に掃子をしりぬきて都合あるまじしと思ひたればのこと
ぢりぢり

はやし年共昔とはちぬ初めてこの地に遊むこの家に定まり
早川の清流に臨みてつられくるこゝ瀟洒静寂なる橋上
地一を借りて数日滞在しよみにせかれて因ふやうな涙

水の音を夢に聞かす世のうきはことごとく忘れぬことありた
りしよえの折のことしたるにたかむいして今にたかむ思ひ出とむな
りたりしその後とも親蹤投跡遊むた方なく南窓にたし
ことすむに数回この山山の概をすすいさか古にたえさ
こともありしが折ありてふねに車らでやみつ今や時たれり
車にに乘して消えかむやむむやうた夢をさますをた
るうれしからぬことかはことの時程ほ早くして伝安地未だす
れたあきはしほのことむかし

欄外には積雪の山あり橋下には砕玉の泉あり天然の流
趣の蕭々を改めずおつゝかたれて山をつみり名残地雪は

ちぎれ　て消えてかく山堂も心ちげなり　流終りて酒
を平ぶゆ塔の跡をらるまで風は自死に吹きぬくる世まから
ぬ定の真中にまもあへる友と對坐し大こつぶにつぎて飲
めるびるの味をうまかりし

十四日 雨はれ　空にさー上る朝日　とも花やかたにひるは
ほり　　地えかたかへしと見ゆる結構のたを氣なり　湯本
まてもどろーあやーげたる裏道此道をもとら早雲古妻
川よりブリクーありにて此條は遠境のまにぬがつく表門に
抜れば一條は大道これかむや　此東海道とあやかもふ

長槍大馬場道我聲い　かめー　肅と我として終縁ひき
もささすこ山間此嶮路を度りしと當年此大徳度はか
に勢猛のものなりとまたその折この街道一帶群舎我
ぶふ葉はいかぢりしがあはれ行所此流もとの水がらぬのた
は今は一坊の夢とこそばーめにさーかりし湯本茶屋とて
村人ど屋舎の敷さまで減せーとは見えぬが大方は軒破
れ柱傾き羊尼根の上には八たどにや草生いたりこ
は岩さる暇に轡轡細工をせし七湯湯治の浴室を相
手に賣り付しるればまたーもかは残れをさへー
玉の藤の澁を谷間に見る昔村の間にかけられたれば怒

下したるまふ練のはーを望むのみれより上の岨は石高
道して蹴鞠ほとれ回す不きしきつたり歩を極すに足
かりきといはすこれと表自後と岩並一と鞋を破り足
を刺す底のものに比すればはまきれーといはむかかて
石徑斜に登り行くと山はいふく深くお浪の嵐草流
れむとし世心の言れ岫を出てた録するたかくに越り
喬村の上には出禽の人をまちやにその夕を年ひつ鳥
音れおもーらふよれば琪花瑤草世間に香を追み蝶
のからりお雲山風にみちやもせず舞ふもきり深雪に梅の
たりとらことにすれらる畫中の景色と覚えーか

山名もまは松世にも身ねむには必ずや名はありむ
それをつ宛問ひてー山鳥の尾のたかーとかまーらね
むは初心の人のすることぞかしこの道にれは用ぢきこと
れはわれはせず凡そこの山流のけさ流ふに世の事なうす
行かふもれまかく淋れたる更に面白味をへるー
深雪のより畑宿にいゝるその中程と覚一と割石坂や
いしあたり道の右手なる高きところに一軒の破瓦あり
岨岨の聲るの中に高くびく朽ちて倒れし門にれな
けれいまさーく山流を杖と知りぬ美手かゝる深山の中は
深雪といはまたたかふきもまこととは天使とも見らまき

邪氣なる児童を相手にけしを講し俗を脱せし人は
つねに心ありゆに見する大自然を友と一つあるこれ果し
ていかかる人でも大に決するもならすんば罪ふかき浮世の
人の前にすら青天白日得つら出しせぬほやれあふふや
など地するかもひの末は大それたことにかりやまてかり
もち子人の身の上にてまける

ある坂を一つかりつめ—とこる長松数株枝ぶりのせが
しきを前に—激しいをむかひの崖上に見つ、山あらし
の風烈—時は次をも飛はされむかまた建てあすも道
ふちまてこせすむかひのす張れむ心枝あふり

われ等もはしとて世にわかれもれをての葉枝
花のみあつて夏のちりもれをを金くいはぬとにはあらぬ
と都人ほどにはなす賢朴なる老翁と語り合ひつ脚
下に連れし山と大塚の缺けたるところより相摸の海に
向きたるを眺むか—に遠白きは酒匂れ川の先なる
一堆れは高麗の山下はこゝろもれ残つまかしく
陸と離れて見むる岩れは島のみはかすみて今日は見
え候はずたど阿はぬまきよ—姫の持意にいひもてまかす
をうろさしと鬼ふはれれは俗士にあらされは松
風の音いも涼しく浪こゆる泉聲とわて奏する全

了急か東海道名所記にこの山はあまりに峻く行人は
しきりあがり 薫^はたる 故相根とは又つけぬるよしと
がさくみのるらじとしも覚えずもさきより旅には剛の妻
よと人も許せしわれ尋すの晝迄と翌日の光いともあつ
珠に高樹少くかりやきこすよき柳ふ山風も死したに
や、昔一さま感せしが腹のちみはいつもながら杖扱か
ればそのさま 露ばかりもあらはし たくなく同じ 宿
り友と先後一たる坂のつじしとこは今の人のあはれ
らぬ天蓋不出根山中街道此最高段こより次々に下
ぬに二ふしわれ等は右なるをとりて元相根に向

いぬ左すれば古閑の地を通るなり
いつ見ても心地よき 涵碧と頌蘆湖の水光を脚下に眺
めつぬ芙蓉が花の影のうつらぬには少く不平をもらし
元相根にかりてついに湖岸に出づ湖底に航する衆は
船もたつわたれも持すあきく 一般を仕立こむかと思ひ
たれども随ふ安からぬ様に見こもりしは村念しむ權
現世祠に詣で眺望よきところを見立て、巻を卸し
こふこは山上のことにあれば白雲の風たぎりに飛ぶ
と涼しく元相根村人家よりつきて 嶽影様のおたり
離宮花たつる塔島など見わたさる、一幅の風景大に

らねどすすかに出雅のところはありあたり近く森のげ
みに啼く鶯はまだ音をいれぬにやつねたけり聲いと
せやく都の人にかつてすくまじき杜鵑もこら多く晝
ながらの叫び時には新蟬もたけりも文れば旅せし
とありしれもたぬ等めは奇と思ふ(すまてかり)

こらより細徑一條湖岸に流し新宮山杜鵑をめぐり
末なきぬがから幸に流さず初は林音の中を穿ちた
りしか次には不規則なる田圃の開けしところにきて
はすま原とせりか湖岸に流しとせればさしたる跳な
く平天のあつきたたへかねたる湯を醫すすい溪流もた

折ふし湖中に浮いし舟たれと並行しすむに湖底
の方へ向ふにやありし中いとめて舟船たのまばやと友は
いひけふが餘りに遠ければ聲も届かず産を下りて汀に
坐すむにはぬなく氣のみいらたつるあはれさかれはし
ばらくらの船を見つみてあうけふかこあたりし田圃に肥
料も運ぶもたれ知りければ友にむかじもはや娘(は程
もあるまじとせり)湖岸たれに轉せむとするあたりより
かたり見すればわが思ひにたかほで舟は汀邊に止まりし
やうぢりり又たりばし林間を通りやがて破心二軒あ
る汀上に出づこれ湖底(すまてかり)

これより冠歳のむすめのはる一山すへておやすみなり
七八冊にして平かきとこありあたりには林樹一かく下
らへ見えざりしなり 浴余敷棟むかいは二軒あり号
きしが今は一軒ありなりされば彼れは選びごとす
るまでもやくるの家にかり草鞋の紐を解く迄すく
も煩はしとて少し廊下をはらばし浅かぬ湯壺の中に見
こし身を濯らす

湯壺は赭色なる天然花叢田をけりたるにてこれ
罍より酒を出る湯はとうとうとして瀧の如くなり深
さは乳の上にも及ぶくし少し冷温身に適し足の指は

すいて見ゆる清き水とて地ふくもあらずわつかに四五里花
い散がれと雨は新霽のあつきに衣物もにどみしほど花
汗流し畢り浴衣肩換われぬの快たとへむ方せし
導かれてお敷たいてる母屋とは離れてたてられ萬清の
かた壁間花字はいもまつよまふま方なり三間打ち
ついでかもし人かくころかきも起しむいらしむとよ
晝花御膳はまだにやちいふに勿論なりとてその外にまた
びいるを命りしばらして降は振出れ来りしむびいると
びの字の影も見えずいかにと向はむとするさまに紅頬
桃花に似る見ながらぬはためたこ山中にはさる酒

落たるも此御座候はすとふはるほどこらほ破れ遠くか
大敵たるも此御座候はすとふはるほどこらほ破れ遠くか
はきしを深く愧ちつさうばた酒にてもち奉れ命
すたにやかく一本此大層はかり腰此一隅に割れせり
の味やよからねとも酔ふはかぢし

念汝事なま、恥を曲けて華骨此遊をさす時ありう
るさきも此も此細き脚にわか寝敷此上を容赦もた
ふみにじり長か(す)女にて酒の餘港の涎と若にうまひ
は後若たるか知らぬど群をたして来りぬの教を知らけ

るほどちるは傍に茶受の菓子の一ニ片残りたるか黒く
りたるにも知らるへく夢はつめにさめりし憎くも此
めらいで打殺しつれむすとの筋を真向にやりかざし三
して専ら之を講ししば、か程に殺傷百餘足とは注さ
れぬ此軍一時は僻易しるに退くこと三千里ともいふやう
かりがいの間にやら再び講集して戦ひ奉ければ死に
とよと思ひながらも又た百餘足を殺しぬか、る子供ら一もこ
として小年に似たる長き日はられたり

一此函板は故なるも此はあつとこらぢりしんか
此離宮なるもか、こらあつり此御遊幸たえて折角

此御用邸より登る御石田邸の邊なりとかこのあたりはことに
牧場に曳ければ行方共ことなりて地の上を歩ぬやうに歩
は各の自浴室も登りて居られぬやうにせむ

夜にナリて友は按摩を賃す五十餘を見えし目しいる地
なりぬの筋骨の道もむかへ女達か原共運塚にこもりむ
鬼婆もかやとこえ見らるゝも共折れかむる
見ればもみ殺す悪意は甚くとも窮處に徹すればのことなる
べし友のか畢ればわれも此の種の種にしてこの鬼婆は乃共
手にかかる鬼婆とはまふと悪ににりて狂者共言聖人擇
ぶといひむる原次の前申しばしも口やすめしし 後記

まゝのれにえらさること教えられりその後によれんこ
の湯は眼病や創をよこに大効あるよしにて遠國より
さ〜来訪するむさしあうか

十五日 朝とく大地獄を見むとて出つこゝよりは凡そ半里
の末までには木下間の赤土すべり易き道をたどるの
上は草鞋の下に踏む土共いふあつく草はといひ〜に僅に
寸の青を残しあたりには枯木の林をたせり胡地共さい
きにも似たりその間を穿透する細流は大地獄より涌出
るものにして熱湯共川なり 硫黄製錬所も尋

がほるとは冠嶽つゝは一丈峰に絶頂につくことを所
許下れば地獄の茶屋ありその傍に小高きところには石
像地蔵尊いつもながら慈悲の御状いともうはしく
きたせむふこのあたりすくは所謂地獄にて地上の穴
は峰に地蔵のやうな白き煙風にたむきて数すちとせ
たちのほろまれの瀧にて池とせられははなくみぢやと
くろり流れ下るといふし執は凄いとよほどもあらず
追えて音たにせぬなり土質はみぢ赭色の粘土にて
穴きあつた穴のふちには硫黄の結晶附り肩て黄ばみて
をえぬるゆればぐらに陸奥恐山の地獄を見しとてや

奇異なる感を感じていれども繁橋上湯に大噴泉を見
てか上に層盛りの立山地獄谷を見たる故は今はこ
れほどは絶えて面白しとは覚えすさるゝかの鬼婆地
獄に折々粘土の軟き中にふみこみ足せ大傷するも地獄
とよは浮きたる言にもあらずしとてさつさぬ
地獄茶屋といふに世では自らいふまに打向いしはし
物語し善悪をとりてすつ娘子の箱にかゝまた一浴
し世聊のあまりには仙の端打をせし午飯を畢りしは
初に結束して立ち去りぬ
西に白い坂をたれば野子離れたる大牧場あり遠く

處には牛馬牝群をせし遊てまわれか見らる斗南牝
地にて見しと曰し様なりこのあたりに多か牝高低はあ
り大方平行にては高原と山子地なりこれを見たり
北に連りて水が眼をかき流る山脈をさままで高くは見えど
従つ山子にある心地ぬきまなり仙不系近とされは青
のき一開けたり牧場牝中細徑文のころらいつらもあれ
とみ大方の方向見窮めをきけるに幸に誤らず
やかに蘆湖の水あふれ出で末は瀧津瀬牝早川と名流
のこは僅に幅二間ばかりしや浅ければ徒渉すたあく
流より大聲あけてわめども牝あり顧みずいまもあそ

す一頭長遠馬夫の如く流をばね越え水が側流とかけ半
るに友と二人大手をひろげて誰もほめぬこれやと牝
行方一の功名首尾よくも通りとありしや息切地
せまし馬夫は歌を情氣まじく下け孔を連るると
しやまてがりしにこまかに函向らむ仙不の村に
かからず直にこ女峠にさかりぬ
峠は名もみやきとられど昔はたか嶺と板敷の
屏風が如く笠立せる峻嶺を坳曲せりて羊もた
るこがれを遠くより眺め推奥せしもの道の程長か
これ一里近と牝峠なり哉とて巖石懸とて灌莽

いまだ経て来し一草山とは似せけずいかにも峰ありて
や頂うは小丘あり茶をすらす餅を賣らむとする翁
片う(き)岩杖やうかれど今日は見えずこは(か)ゆきを
に願ふよろしく洋客はは函山一杖隊区とて
く来りたもありとかまよとに(か)るに(か)るに(か)るに
はたやかに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
その(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
昔を(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
を(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
八峰の(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに

すこし(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
あれども(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
むす(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
碧妙(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
す(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
凡そ(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
け(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
差(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
山(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに
光(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに(か)るに

山椒貞孫太郎の外は、五根の多物拂へも去りすおけぬや
ても止むく地地を背に毎に幸りしかはよりまやが心
後、あつたとき奴は許されすとてわれまゝ友の故にまや
その背にとまは地十餘尺を仰のお子にて這はつたとき
びばわい前にはち友さへてわが背のを打殺すむかひ代を
ること西三向ふた地を返りて一ひたすら笑ひ興する中に
眺之、さう村の山吹つつかすきて御殿場地停車場に向ぬ
娘さすりお里時は五時頃あり、汽車は夜十時のに赤いむら
りんは元根にたふおはは又た仰の世聊にさう一ひあま
の家は傾ふと見えさう小猶わが部だにまゝ入りしを幸ひ

ひささといへ催眠の術を施し試みたり
待つといはくさうえたれは時は自と過まはやく
限あつたりぬといふに傳車場へ押かけ汽車を乗
は乗りぬ

二三河北部地帯

車中はさまで雑沓せきりかおひかきせ一あたりは田
人一組地帯川橋河清地を地帯ありいたる酔いたるさま
ふるおは飲を造えすまはぬおにやめし聲一て歌う
たよ時とさうさまなり一ははまた一は事としの空をた

上り装束場より此女之ちりけをとり志は別嬪
と争ひしに杯をいしもうぬ流言いしもの若くも構
からぬ奴等サリ一車中此衆合人はねむり目をさまし
恨りしに見つめておのころゆれもその一人なりあ女をま
はよかえりしをれは酔狂の相手となり一人は二十餘代やす
此かもししをれは後太刀がし一連を見え一人は未
だ鬼も七七のあ女酔人のいふことをまにうけて飲とあめ
辨跡すまをまにうし直夜中静園をすましは流石の酔
奴等も大い波れしをれと見えとんと鳥を一つの車中漸静
月も夜の眺もゆれも動揺する車中にはかたし並を信ひぬ

十日日 わむりきや一は午前四時東方やう白みて空外
のけりしを見ゆる流し車けすむに瀆名の湖邊にあり
盛したる一盃の碧水さちから明鏡も拭いしあかしく湖解
林村軽霜たこの布帆早く旭日を受て楳沢十幅の紅
と染めし一此方に重疊せる山岳は秋葉山より鳳来山に
ついでたに一は今年秋春に政海一この所坂人と相見
の想ありし

豊格にて車半り換へ豊川一宮を過ぎて東上れ歸に
津留教聲一つけさまに次ききりや一か流車は老茶

新城北町中を歩きつて朝飯一たしめ畢りて郡長宇佐美
源吉氏を訪ふれには生面在人されとも友なりけり石かき
合息とちかしく二科大學に存り深く相えりといふ以て
たり 疾くそのわらし解き玉ぬ流是地水はこにあり固
弱はかちた泳衣はこにせといともぬんころるもせけいふり
水等在れより川谷石橋の奇を採むと尋るなりといはれ
こと傳ゆ許より通知ありとれボとらに承知せり 案内を
に命りちかぬがといはるれまではといがみこれともさきも
れ玉はをるの周旋はたけけりけりけり案内の来るまでと
こばらく物語すたかき 一客北門にこころあり 主人夜を

ぬめあて應接せられお馬に 一客は去りぬ故にて主人は
たるを回けむこれむ神保をお授かりける実地演習の爲め
大學地質学科地質徒を率して来られけるよし友は
われにいぬかの五城にて同じ学舎ありし人も定めこはあ
りにあることちかむか折るよふは邂逅することあるべしや
苗かきほむ悠然たる田舎人地帯とて案内の男とみれば来
りすややく来りしか日傘を忘れりて取て還し十時
ろに来りぬこに荷物を預けかり輕装して出づこ地男の飛
脚を業とするよしにて是の早きこと昔跡天に似たり
つとて捷ぬを取りつねに典川の左岸に流るはあたり地出

は林村者鬱として濃翠流れむとほる趣あるか久は那
猪を狩し得（まどろ）

有海の村にいはるこは長條合戦の折武田方陣營の
らひし地なりあやも道なきとて人家の庭を道板
けておはし黒板坪に三圍みたる半らの地といも古くは若
の墓碑あり一面には智海常道居士依久島兵衛左衛門
天正三亥年九月十日と記しその左側には掘りぬも
これ勇士の解世の吟

わか君はこれに代る玉の緒をたといせむ武吏の道

と、いふを鑑せり。まほ他は三面には誰か掘りけむやまどろ

り此欽辭を刻りしわれつねにちもらく強右衛門の圍城
の中より先、援兵を求めり。はかの南霧雲か加南進明に
使せしに似たりや。いはつめに使命を全しし身槍玉にか
りて死しぬは進め決せざるを怒りて浮屠の靴を射せ
つり城陥りては罵りて死ねぬを求援の涙のなりあまに控
は頗る同いからざるも此あももの志烈なる悍の程は果るこ
ろあらうか。もしからやまも人物の討にても知らむにはこれよ
き討たむべしと世は流李に下りつるもさすかにわか邦俗は
ほ幾人のむかひを存するにや。將た志烈に餘績人を感す
ることを深きためたや。此墳上に事り香を焼き花をすむ

又は絶えずと心鳥衣古明神など筆太にかきたる奉納の
幟哉本川迄く白く山より吹き下らす涼風に翻りては
手より懐古の念強然として世をせしはぬかすことと去
りし

こゝより坂を下り西北より流れ来る二川を渡れど名たる長篠
の村なり 城址はこゝれ川と豊川と合注するところなり矢の如き急
流を以て自然の壑液とて流には山あり郵便投入函を門に
かけし一村家などこの折も我と覺りたる壘をめぐらし壘上
に生る松の木もたけは高からぬが老幹蔽のごとくむかし
り顔なりこゝより程近く田圃の中に老樹数株林とせしむ

あり穀念のありし跡なるよ 今も雨の後はたゞあきかゝる道
米を拾ひ得べしなり 道の左には甲軍の勇将馬場美
濃守墓道と吹せる標本あり 往いて憑吊す間は茂
女墳へく墓草の中埋まれかゝる物好花もの詮議果
いよこれと市わたりかはしつらいつるなりとを大迫寺とい
には杯井あり守城の将士死を想ひし折酌み交せし水な
りとかゝるふは迂路なれば見ず
時は午に過ぎに酷熱耐え難きに是早き飛脚に先立れ
まけしを我とと急らにやゝらしく買えけるにいく程もなく
長篠村役場にすりよれば 休憩し 至るを乞ひて用意の午

飯をいたり業内尾の飛脚をかくし新しき舟を將
て又よこせしむ

いなり鳳来寺山の積石をたに仰きつ二里許に大
野北對岸なる富来の村をすく一村落を赤痢せりかど
こわやぬらる心地よきことせらぬど詮ぢしわ川はさまに思
はされもや、神經質たる友のいづく閉じの態さるは氣に
毒ぢりし

これあらは今年一月廿一日遊せしところなり秋葉の方
より来りて大野に出でこの村をすく月をあかりに行者我れ
絶嶺を攀ぢちつ今より向はむとする川念をば草鞋の下地

つまにそこのこゝらで打過さし谷に如し此の朝店また乳を
心橋を尋ねて昨夜来りしゆを二里こまを戻らるはとす
はしこき地圖持ちながらに載せぬ道はあらむかぢんど
人にも問はむ獨り合點し先は此次第を這りし不覚は谷
に落ちす床まか今は空を氣甚し故乳も氷りてあふ
見時にあふすよふにあふ見おとするは石橋ぢれしこれ
同敷りしややりの理を非に柱けて自ら感る人此道
つたに立ちまうて長篠を對岸に見て新城をすぶ豊川
より温泉に來りしりさ水は此の大方は生ぬり
路はつねに豊川北西岸にあり漸く潮に從て畫は

るは佳景ありけりあるは河底全く一連の石なり
に窪みありたきにて汲れる水池に瓶いけたる水は
あまろ清し水は快た其中と游泳する青魚の數明に
たは底に流れぬ深潭也藍也といふ濃かき水れば
崖上に飛泉也碧れもあり河岸に生いたる松の木
りいともやうな洞門のあるところなど耶馬溪に見る橋
大巖地兩岸にさしむかいて屹立するなり境地固より
小なれも峡谷巖窟更に一層其雅趣を添へり途上此
を涼風さわりににまればぬたむへき程なりた人
地銘は限りて清水あつたと思ひしのみ

柿手とて人家十軒ばかりあるところにいふ案内者は又た代
新城市川合まで六里とすましかあまいより時は時方り
肩ましは回時計なり直に石橋にむかひ一溪流に從上
峽勢やくく窮り方面には峻かき断峰を仰せり
七遠よりも見らる鍾乳石也雨霜にさらされやすけ
たるが巖骨をぬせりこは向はむより子乳岩に
こ石橋はえのたあは見えすといふ
溪流を遠渉すること數回一綫の細徑をたどりやかたか断峰
に登りかすへて林中にて晝がほろろく嵐氣衣を拂へ
りもぬせりて峻げれど汗さへにあたり案内の者は

勢よく先に立ちてすみかかたりけむ教宗却退していた
おろしたるさまなり何ぞと問はばやありいふ山に
らからぬことありにすむ我に似合からずとさか心
にさすみなりがれは極め毒ある奴にてと一連なり
は一日に死する故に名を日ばりといふよし見ればきたり
禍道にて二人許すが鎌首を擡げ縁の如き細き糸を
はきつ、向い来る増す奴なり友なりと二人て鳩臨年
此先づ石突にて腦天たかたからけられあけられや
ニ此小さき白帝のうちは深高がぬわが手にて死たりし
道す者はあそろいげにその残骸を護りてをすき傍に林中

に入り寄り更に峻嶺を石徑をたつその窮まるるころ即
ち乳岩にて川合より一里許ありとおぼし
乳岩は鐘乳石の大洞窟にて洞口高き数丈と見え際大
がれとも奥は割合に深からず中には石佛十数体安置す
頭杖たは鐘乳底鐘のト垂すも杖おれも長からずこ
れと鐘乳洞として見るとは殊又お流のたびて復に遊
とらありあふに洞は餘りに大故に風自在に吹き込み
長身結晶せぬぬきましきれともこの国有教の空
場とて冬寒者時ありこのあそりには石橋のみより好く
聞えりかゝれと同一標す洞穴数は五六軒産の中腹に

あり、砂がけの行方見おすしあーたごと、此かー西にある一
つは自由な方を後へし、但し前に比して小且つ浅強人といふは
之らぬも此なり

乳岩は石よりさまで、望む所をさきりおぼか、さきまにとも、石脈
せず、石橋はいかにと、さき上る二三冊にして、断峰、此後に
以て身は已に巨巖の下にあり、仰き見つ目算すれば、長さ
は、石間も、さう、細長、舟石の中、空にか、れる、折、導、者、が
えん、なり、といふ、た、こ、こ、を、通、り、抜、け、か、く、り、身、を、及、一、眺、む
空、空、隆、り、大、張、形、さ、る、は、と、橋、の、形、に、似、たり、高、き、は、四、五、間、と
覚、く、石、管、は、鮮、目、か、つ、た、凝、灰、巖、と、見、え、り、水、に、架、せ、

を、指、し、橋、とい、ふ、は、や、可、笑、く、矢、張、石、間、と、呼、は、む、方、然、る、へ、也
え、ん、を、か、た、め、多、なる、や、一、か、二、此、石、間、に、比、す、た、高、低、廣、狭、た
長、短、あ、れ、も、怪、特、峻、異、の、趣、略、は、相、當、る、た、之、へ、し、こ、れ、と
見、た、に、仰、角、あり、に、高、き、故、ゆ、え、に、撮、寫、を、し、は、不、便、な
り、む、か、か、び、と、聞、き、た、る、に、も、ま、り、て、見、察、あ、る、か、く、見、え、出、る、善
ね、く、人、に、知、ら、れ、さ、る、と、さ、ら、し、れ、れ、尋、は、ま、づ、祖、生、の、教、を、す
し、か、の、か、く、る、に、は、行、此、地、甚、あ、る、き、り、し、を、説、ひ、つ
し、ゆ、し、は、ま、り、難、く、覚、え、ん、と、時、す、に、避、け、れ、ば、つ、め、に、起、つ、下
る、こ、と、三、四、冊、に、一、こ、の、洞、窟、あり、洞、口、頗、る、狭、く、身、を、つ、ほ、め、匍、匐
して、僅、に、入、る、中、は、深、く、と、暗、黒、夜、の、か、く、こ、う、せ、た、ら、ぬ、冷、た、き、風

骨も透るやうなり 蝙蝠はか住家も驚かすこと ちもひが
救すお時に危いより 悲しき聲して叫ぶにたい何となく物
凄しかく 導者に危しとす みやうに元はつたりと思ひ
外通の杖がりの詞をよみぬ 道は前へは所あり 二丈ば
かりの草を杖へ飛び下りむはさまで難きにあらねど下は平地
らふ不徑の斜に下るところもさうか 強んとえすへつきてあり
に導者はわねて用意や たちけむ 杖を振りおろし まづわが帯
にくらいつけ 草をかりにせよといひつゝ と之を下す友は
次よりぬき 導者はかたすやと見ると 涙もに惜れくる者様
の如くに 杖を俵に下り奉るころ 杖をまたの杖に投し ころ

ところを過り 舊跡を取り 川念にせよ 四山の暮色ややく
暗く 暮烟薄く たちこの河原と知らず 佛法僧の杖一
聞えぬ
導者はゆい 導者を村中へといへる 旅に送りし 二
寺のぬきは 杖といへば 杖 飯田(杖) 街道といへば 杖
く 香魚の炙り 杖を肴に 清みこ水の如く 焼酎を傾け
杖は 酒袋も 杖を肴に 杖を肴に

十七日 川念をよち 杖を肴に 杖を肴に 杖を肴に 杖を肴に
日もあたらず 杖を肴に 杖を肴に 杖を肴に 杖を肴に

一と達すの目見一回地も今はは決を異にすれば山も水も
樹木の眼に折なき如く覺えり友はかねてより鳳来山
に登らむりといわふが暑き日杖躰舞す杖を口實にし
こ意氣地がくもやめぬ

小川にいはれば山轉一渡廻る見れば路した古洋服を有す草
履おきこる若者二人鐵杖を揮て炭石を打割りのあり友
早くもこれを知りけり杖聲を浪りに傳へて馬の身に風ほお杖
まゝめられとえん杖跡のところをゆく餘地ここの近すり
て戦に杖の先にて帽子打落せば初めて怒り顔みや、君か
かゝふんやむかや城の校舎に友たりし痛地信世といふも

杖や一かゝる今大学地質学科にありここの神保町校に控
てまやに奉りしやうふれと友も豫想せしと杖落らさし
をさむかんにいふとあられ小川に流る杖を午後すまは
先もつて午睡をめたる時はすむに三時なりといふ急いで立
ち出

日吉といふとえにこの川を渡り新城にたどりぬこの近に蜂巣
岩とて河中の奇跡ありとぞうししか時折杖を見ずこまて
杖改直目より近と直とろりも標に覺えりや
又た宇佐美氏杖宅にいり酒がすすめられれば打ち
くつろきてありしから時事ともなれば遂に辭りて出て傳

場におよび汽車に乗りかて豊橋につく三十分間も
やすみたる後夜十時の汽車に乗り西行を

三 京都より福岡まで

十八日 目きりーとよは車まで三草津にあり湖上北朝し
りかきーの眺む七時三十分京都につく電氣鐵道を信し油
碓とよにさし相見ゆる瘦れといふ男をいふかれは可なり
二午後には神にたかむといふこの刻限とせれと三人車を
らねて停車場にむかし又汽車にのりおるは大坂に下る築地
か瘦れの車にのせられ鐵道工場見むといふも神にさし味

すべて機械や工場など大の目に星さるやれ面白くも覚えきれ
どもかたはかりはつき念に我見物とせしむ一れよりこの地に
相見し人のあるを思ひ出て尋ねて見たれど住所番地を言
れさるに派出所北巡查に向ふすんや骨折損れきたれ
もうけりて止めぬ
おるは別れて大坂にかへしれと先づ旅費をきたぬるれり
又た瘦れとつれ出て一酒樓に上り名物とや大塊地牛肉と有
に傳けし美酒は茂本よりしあらかた酔いたる後ほつきぬ法
螺の吹きくぐりいかに減に切り上げしをさききりてはかて浸
みすすといふか澁川神はに來りぬ

境内のさまといつ見ても御盛なりとに——て東京にといふに
はまづ浅草雷門に相當す(き)も夜之賑は夏かに立ちまふ
り(赤)店花燈火(花)吹きまき(油)烟を天上に黒雲を流し物
賣の叫び聲は(か)み(花)前(古)しに似て行か(か)少(は)自(を)
摩(し)か(と)き(や)み(か)ぬ(け)は(ら)か(り)き(程)り(これ)も(鳴)呼(忠)
臣(其)餘(列)聖(ナル)も(た)ん(ゆ)れ(は)や(あ)さ(ま)——(や)ら(も)覚(え)く
あ(け)れ(こ)神社(の)境内(には)五(歩)に(燈)籠(十)歩(に)花(を)う(え)
松(杉)などの(森)を(た)し(夜)も(あ)ま(は)り(あ)に(浪)る(こと)せ(む)今
か(し)神(こ)く(拜)まれ(ま)つ(ら)む(か)ど(に)あ(ら)ぬ(か)る(誰)も
去(へ)及(は)ぬ(に)や

さまに(考)て(る)顔(が)友(の)後(に)つ(き)て(お)け(ば)い(つ)か(福)衣
花(街)に(ま)ら(れ)ぬ(久)間(混)濁(花)地(に)相(違)な(る)も(心)
觀(風)の(一)助(にも)と(い)ま(き)ら(却)走(す)る(こと)野(暮)春(は)ま(ね)と
せ(む)悠(こ)か(ど)し(こ)ま(は)す(み)る(く)夜(未)だ(深)から(ぬ)ゆ(に)や(珠)
紅(唱)花(聲)さ(ま)で(は)夕(え)ず(雕)欄(繡)幕(の)底(には)牡丹
芍(薬)も(比)す(け)ぬ(花)の(あ)り(福)去(ら)れ(さ)る(は)自(在)
の(心)評(に)ま(せ)り(浮)れ(ら)人(の)足(音)水(ま)ま(て)清(め)た(る)
政(にも)高(く)ひ(く)わ(れ)は(も)と(り)野(心)あ(ら)ぬ(花)ら(ぬ)は
故(ら)に(鬼)貫(花)名(向)を(も)ち(て)骸(骨)花(上)も(粧)ふ(花)叙
た(と)禪(僧)み(て)冷(か)る(快)欣(して)澄(ま)す(必)要(も)な(り)

れはズト高くともうてこは大店共樹けいとも早くわか
に賣残りし短夜のわむげも傾城を鶉格子につかまりて
からく覗きやうにかも眼を引け下して穴あきまで見つ
ゆゑ執事カに遠慮もなく低からぬ聲に先自の黙せり
たがふ似る非みやい男共阿房共ほども見物一つられも
あきたれば先を極しこかへ

友りゆれも旅館に送りこみま、辭しこかへる今日よりは
ひとり友共旅鴉憎れしこもから昨日とやけし讀せむに
も相手をたけれむさうかに淋しむ覚えし

十九日 午前十時ころ所共着者あつらひあしし來船切符も
あきしけや淋支度共いませとふ付あけし位共ころ
廿八日直に出る解船に送られし本船に乗り込む船は玄
海丸なり祝のすねあぢる身共や、ふにすきたることかれど
さうさふ助共五割引家ともあつれば中等と出がけり
船は十二時を以て錨を抜きぬ和田共岬角をめぐれば鐵松
峰共天を摩するを望みし頃慶明名を右に淡路共元の供
臺を左に眺めつやがで波ははらけり洋にさしから風靜
かに海一面共いかに大船にのりこむ心安くまゝや佳景共佳
極に邊あらしをこまぞいかに廿八日舟共いかに思ふ共

食卓につき、夜寝畢り、後甲板に安樂椅子にあり、
眺む船はすまに丸亀の近海にあり、潮さるる夜目海に
沈みて萬頃の潤色はた見えぬ、はを去威りか杖を
つけし象、浪屋島五剣の法山は暮色の中に雲に袖せ、
きしきし

此にいたつと、丸亀安樂人、杖をくわたり、打とけて、諸人
にわれも、ばしとも、にありかど、いも、わが大敵と、
資格に格して、缺ぬ肌、奴等のみ、いれ、は、せむと、面白からず、
ば、え、飾り、か、へり、して、船、中、に、有、頭、上、に、赫、灼、る、電、燈、丸、光、
ま、は、り、して、目、ふ、た、塞、か、む、に、は、か、ら、ぬ、迷、惑、を、も、覚、え、さ、し、

夏は、は、どう、でも、よ、い、な、を、軟、か、た、い、て、ち、か、ら、ぬ、し、と、ぬ、れ、
中、等、に、限、る、ま、た、し、船、腹、を、た、く、波、の、音、追、え、ず、え、で、今、宵、
は、海、上、丸、夢、い、ま、ま、か、り、

昔、起、て、舳、棹、に、倚、れ、ば、船、す、ま、に、普、賢、洋、に、さ、り、か、れ、
か、て、早、艇、の、瀬、を、過、り、硯、の、海、に、文、字、の、閑、に、つ、ま、し、は、書、
す、し、お、の、こ、と、さ、り、こ、に、上、陸、す、旅、店、丸、右、者、ひ、た、す、ら、ひ、
入、れ、む、す、れ、し、も、の、手、に、乗、り、れ、り、す、ま、つ、停、車、場、に、お、
投、車、時、間、表、を、檢、し、三、時、回、止、し、行、つ、へ、き、こ、と、知、り、た、れ、
中、を、め、し、あ、り、し、家、に、い、る、け、り、た、む、序、に、郵、便、向、に

いたりさる方へ此は暫敷敷を認むに一人の倭父ゆかも此の
くをばつてありしが従りしと見ゆこのはぢかきつるはよ
あかめたにえかぬをあげんとかほさばたといふ事ごとかり
と此よしかうもせよといは廣島縣此者たがたき東
かるる年は老いといれど妻子も身の危かしく此地奉
りしが折もよろさる事ありといひ日佳取とかりてもり
こみりしをばせりし依てそのこと知りせかた 暑中見
舞の状にやうに認め下るいふ注文通りに一やりに歌
あまたい地に下けて立ちありぬおもたこの地は炭坑の地
りたれの貨財輸送すところなりとよろづ此物價いやが

にもたかくさるゆりかは多し此給料もを得らるるべし
かくては九折すか 馬鹿にせらるる遊の折とはことかは
り安かきすれすしと旅を命の貧生早も 吾達此氣
つかいもたし初めしむわいしや

一時幸ふ者の流車に乗る所の行ゆゆ此車相乗客かまは
よけいど此日の暑はまたとたかくて之をえぬ車窓の外に
見ゆす程の暑はさやあかりし折しも車行ゆち松林
の裡にあり嵐草涼風にわく定に次々進む程なく寺推
入より海行みぢかか曾遊地とるなり
箱崎にて車を下る海邊に瀟洒と亭橋ありとらむせうに

お方せーれおは冒山止まらずに覚えにこの夏の旅は
一も先、二つは多々、と今更々感ありけ

お原をいそごふよりた折一芥尾におか筑城宿士をふ
たる可也山のあもともあり、新州岐志をいふ山村をすれど
此は覚束なくなりぬ青田に草をとる農夫に向い、
そきに張るす、一時頃そよ地に、村の入口の札を見、
知りし大門岬冬詣の舟を出す旅旅の志松尾とす、
投す

いれりす、舟を出し、よと頼むに、今も他に無念なれど、
お玉へといふれ、お玉は、今日の中へ来らぬと、お玉は、
た

い、お玉の朝も、お玉も御身一人に、お玉も必き舟を出せ、
た、お玉の冬、お玉、お玉は、お玉、お玉、お玉、お玉、
れ、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、
本、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、
た、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、
お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、
夜、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、
お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、お玉、

廿二日 朝五時を起すむよる途端に舟も出たに早く来玉いねと叫ぶに念皇元年と出づ村家の石を並べ通りに此町をけむ舟のちびてあると云り此のあたりすて俵のやうな圓石のみにて自然の石垣を築き潮のいよかりし故か云界の海いよ静かにて連波たに起す朝日はすまに脊振山の上を昇りかり水たうつれる雲は色いともうらはし舟はさやから演舟にて亭主自ら櫓を押し岸にかりて南にむかふすむいよ五ヶ所の斗後するところにいよとすサはち大門の岬なり

断岬峭絶高き百人舟は陸につま他の三面にはわだつみの

波打ち寄るこも岬執は湯籠海を吞まむす如く形を大亀の首さうのゆりこもかもしの亀の首にあたるこも即ち岬端を全部所謂玄武巖にして頂のこもみかしく土壌を肩けを破り松を生て下の方へ全う巖骨を露出せしを担み立つるは例の六角の石柱数子系條を四方九寸より二尺にさし長さは丈餘に及ぶ中にはまぐ四角八角形もありお行儀ひら来ぬみあけままに寸ん地斜もたかくすこの高きは甲餘間遠く望むば城廓北石壁にも覺りむかへ帝天上に在りこの東萬條の岩柱を大地に投下し自然に是を柱と成り成り玄海の

怒濤日夜やます奔馬の如く毒膏の如く袋い車り飛
瀉噴散雪花狼藉やうたいて最所の弱處を衝け
之を破りて窪をせし遊にこの壺窟をいらく大門の奇
この壺窟にありたり

舟は岬角をめぐりてすこにこの洞にありこは海水頗
おかく藍色黒けみえぬ下には何物の住むやらむ府
一と見るとにおろしからむ折の都合をけりて舟は
にて轉向せられ袖をえにて徐として洞中に不初む
洞のいろさ幅五間ばかりもあんな舟はたやすんことを得
べくすむにほて舟は狭くなりやう久人と五間ばかりも

入るや左にわたりたるころには舟をとむ

仰せ見れと頭上四五間のところまで舟はかりし角柱を長
短いとしかり隆ちむしてわつかに隆ちさるも柱、如く合
して畏懼の念を起さずも深き洞の奥のこころたれど幽暗
といふまでもなく陰毒の氣風とがりて吹き来り面を拂うて
いとまかにあはれせし聲の反響するにもおろかぬ洞の
奇は実にこにあり飽らまで眺めたりしもたはれまじり
をその十の一をだにうし難きをかこ
んれよりまきは洞中、吹やに狭く舟もすみかもしきれ
む尋常の見物はこを限りとすも一盪に乗りてなれば

―ばらばらと沙汀としたりは歩を拾ふすゝむ暗黒延命
辨せし鳩鳩飛翔して臉を撲つとぞんぬのサホをさすめとの
はむか―ある好奇の士が燭を照して教す歩すゝみ―に窟
中俄然の動―油波湧起―けれと心胸惶然念自正
歩しからうもまたよりこがし―とあるよしにて神靈の
いまをところ凡俗の人カを許し玉はぬか故りむとこ以後
を決して行かずとかられ等をすて亭まの流り

大門口の北部は天の御柱よりつゞきて風神の窟あり
これを窟状をせざるのみたてもとより比す(りものたしすゝん
より波戸とせり陸につく又た歩法には大祖神社といふ

あり大門口の洞は室にその奥殿とて崇めらるゝなり

つたいふこの地は伊弉諾尊伊弉夜の靈蹟にして天照太
神及び夜戸杵法神出現の地なりと云ふれとこえかの大祖神
社にはこれ等の神を祀りたるなり其の末社には綿津
見神社鹽屋神社老丸神社を列傳の如くにたせたまふ
又たこれより程遠からぬと云ふ崎引津の海を七歌に記さ
るゝと云ふなり杖桑國志に橋の丸の地筑が玄界津の
海邊をいふとあり或はいふ橋の立石は即ち立石の字
に―と小石は大石なりと云ふ必ず然りや否を詳かにせ
といへともこの地の橋の丸なること他にも考はれぬ

争ふべからず、れはかの病屋にて遊覧の家たる小の神楽園
畷記といふ一枚の摺物に、そもも我覚来きそのやうなれ
ど、こゝ古昔も多少ありありし地たることのみを真言が
島守奇霊の奇や実にかには述べしことくた、僻阪に
そと故を以てむかひのり、名所今に詣て観るもあはく勝
必籍をくらするのよく、これを傳へ人は誰ぞわれは自
らゑの人に推さるを愧つるのみ
ゆれかつて海國に在り、弟はとこの地に遊むことを整し
か果さすも、後弟いとり遊むるの景をくはしくし、し
てあられる消息ありは、この奇景は實にわか兄の仙筆を

付ておめ傳へ得ぬ、一ち、凡頼るは他年再び来り、む
日かを玄海名流の上、浮べ船を扱いてともに天風に
と清するを得むか、むかきさうけり、今やわれいそ来
遊し、弟や偕にするを得す、こゝむか、さあむい出で、
いさか情に吐えさるものありけ
から、かを漕ぎ戻す時に、曉烟やうやう晴れ、娘島の
青螺舟のとくところ、は浮い、壹岐の島は縹渺の海、
の見えぬ南の方には、汐か糸の峻峰、実元とて空を衝け
その光輝を旭光の中に、閃めか、涼し朝の海、面には白帆
の影をうつせり、むか見えす、て素手も友はぬけしむか

五、唐津より長崎

かへりて朝めしを畢るの二家よりさきにいぢあつこまや
かざる亭まの森にほい岐志新所よりまきは昨日の跡を
らる南にむかひて小山を越えやかく波場ありといふ寺山の村
にゆく

田間に暮さる高札せしむた波守の家にはさうしかあら
ず鏡はきぬとをいさよせ馬二足既に芻をのみつあり
しのみ去て村中をたつぬめりしも遂に見えす来りかじ
女に問へば妻も知り侍らずたゞ大超肩して啼ひあへといふ

おにほひ雨三はあてもちわめりこれとも出て来りず
詮方ぢれは孫傳が歩水の仙術を心得さるが故にまや
道とは知らつともをたたらむ外あるまじしと特に謹を
回らむとある折しも村家の間より出て来りたる一人の男肌
に単衣のいとせしむる者肩腰には布の細帯の垢みさを
しめたるか波船を束むは君にやとふい折るの舟に棹して
彼岸に人波すへきも舟の奥が程を急れしゆれを感は
し、腹三にさし女くやみせにほけすれたひたすら恐
れりてはやく乗り玉（舟をも急かむに）と説ふ罪なき
折れし退潮せるかたは風逆に吹きて帆を揚げむらなく

力を尽りに橋を推せしむつた半里はありの舟改岸外
にいまともぬさくと三重の陸路を歩むに比すれどもとより
早く立止み舟を右に眺めつけしきもあかす面を井ふ深風
にあつさ受えぬはいとよし舟を乗せしは松井といふとこるに
て半里歩すれど深江なり

福井吉井せいのふをすり神功皇后が釣し玉いしといふ玉
島川を渡れど濱崎といふにいとる丸丸の松をすべし海江に
して浮岳のふもとをある江邊に青松とち波間に白帆飛ぶ
崖下には赤石の水の流るあり風吹きぬる涼しと茶店に午
やしたためぬむりしてきりぬ

これより唐津にいとる三重の向をぬの松原といふとこるなりか
くもつけしとこもあたるの濱邊ことと美し朝風つ
れど沙地のす洒白く足え夕白きさみにうつれぬ紅の色を
さらし並木の松を青くほして三色鮮かに映さし唐
津ありとも眺むれど弧形の磯邊とせにねむりに
見わたること身ればなりとかるの松樹を分まで見しぬの
松原のよりも古くとも教もあやうなりこたもあ本か
ゆれをすながさししか豊大園の手つから拵して盤桓る
し老松の今なほ生残るかあるよし山の東威に法川
しや蟬の折にはたしとるやみぬより後とこあ松井

に這えて住まぬよしをばたすはしこをたふかたはあはれ
聲をささしやうり

松林の間より南に上るを一庄の山は後には手たてこそ
がからん鼻の汗も涙し心やすすもれを佐田が
あはれとらしまたり鎮中庵山がけのわが想夫の情は
凝りてせし法に坐敷の一塊の火石はるかに霧
の雲たに凝められあはれ目もわがりてわが寺にも
詣てす山もたす天守の雲と雲映するとも久し
く去る

満島をすけ松浦川を海川と唐津にむかひ城下

川を今ほさるれりこより長崎に航する舟の朝
早くもつへりあまをらにてさきゆくわが舟を定めり
へす旅店に宿を夜に川を流る舟は若者切符を
りつたとして来りぬ

三十一日 朝五時ころ出つへり舟の汽船はいかゞしや
朝飯がけり九時すぎると川もさきゆく舟は地を
と来り宿のあらし来り感むるにわが舟の物語り
し所に神崎七層のこをたす舟はこより三里はかり
北にあたりて七層の名に負なり洞窟七ありと舟に
比すれとささくして又らにさすまたわが舟

かゝるはく血を流しむ異邦を歴の山は一擲七の如く
また顔みます閑寂の戦はしし叶はぬ河川も
の情川の世に鎧國の策を実行せられ桃源河裡の春夢と
こゝへにさるす坤輿を吞むの氣を倭えぬ遠洋に暹
羅に可圖南の鵬翼をふいて一人の奇蹟を一部の外異
傳に必のみを止めおぼのそんがらねどこれむかし
の物産とたり了んぬわこの心を想やと一帳と鐵櫃を
たいては清すことあり
波ノ甲をめぐれえと海洋を潮熱の澎湃を浪舟を盪
す心やあしかりしに日行の人のちさけにて甲板

の上にあつとろにけつと救ひ着物を枕にして横臥す幸に酔ふと
いふほどのこともなく眠に落ちしとこれありけ
この日又室にわが地に落ちし波を三十三回の生日より憶い
起すは去年紀の南流事本にてこの日に遇ひしことあり
せつがけを祝の膝下に用がけ夜の宴に北に七年とえ
のたの—をさるす洋水流轉この孤身を以て天の一夜
鳴に吐すもわれが哀れなり
夜にまがらむより影は平川の海峡にあり兩岸の燈
火水に映し天上の星光と相つきそやうさるるれつ一棹
がめりり來念ふす流はれも夏を甲板の上にて一夜を

送ることもろしき風とつねにくしとあふて用ありけにき
せまわらばうい等に邪魔現せり水彼れ水か脚をふむを
そとぬをさりけり

廿四日 朝のち時船は佐世休になれ海軍道やら水は
みのみ知らぬと軍艦二隻淀泊し居り陸の上にはまた
漢車の地すまありやれはさしお心らしし鐵柵にかまうて
人々眺むれ時吹船を港し岸に泊らてお放す本年に送らす
島嶼地すあり島がすはれりといふは波つねにやうあらしや
な五島も波のまにうかきなり船は五年を長崎の港にたぬ

六、長崎より島原

長崎は三百年間唯一の開港場にして今もサハ五島の
一に数へらるるものからいたく衰微したり市街は不潔な
る上に屋敷もししと船を折に流ぬたる如くかつては
く悪夜の花畑地とせりたれり宜なるかきと茶せらるば
りサリ港のそまをいばまづくよき方にして藪の底の
かぢれむ風波を避くるの便もたしかりありされど山輝
水映のけしきに於てはいたく心奪りせられ山陽星叢
の詩に見えたる瓊浦の十波名の雅きもの似ずとも
函館には及はざるなり

内高の因備其息多きと申す 故濱の新開場にして
は之は諸道新なり 故より輸入する貨物の如き大方は神
戶故濱に來りてれよりまた送りかへしてこゝまで來ぬ
るなり 申すは其の運搬業者の往より考ふるも明かな
とす かりしれば外國高松の氣のきこたはこゝに
寄らず直に島根にかり 神戶にむかふよし全く貨
易のことたりしとはあらぬと云ふれども大抵は高の牛を運ぶ
はたし要するにこの地の民風はむら 保守主義なり自
轉車をも東京にこそ 大はやりたる 此地には馬車
もあれむ人の物笑し新開場のひやかされと云ふこと
と云ふ

と云ふも其地を推すに足るべし
和蘭や支那との交通によりて又其輸入したるこの地の産
物とて在るに於て支那や蘭も亦多し 蘭も亦多し 是は遂に日
本に及にあらざるなり 地には海防の固わらぬこと
と云ふ
吾輩の中にして神戶故濱由彼の三所は純然たる商業
の地なりともこと新開場とはむら 花柳の銷金高なり
市民の大部分は皆して徳意の來り來むるを待つのみ
の徳意は此れが方百里の間の徳意産家たるも其が法友徳意
舎に同務あり 其來るをいふなり 此れとも來るものあり

際目的を以て用務にあらず付者またあはし披等
飲宴の来り申すの終歲昔を以て貯へたる腰纏の十兩
錢は一朝にして煙消霧散し寺の市街の好お華もよが
方々を堪者城門の邊に市はして九辨の里をあたしむ希
民中の男兒は軍一くその軍九を扱出しこの前に次
羅維すきり

圓山は言にぞえし長崎狭斜の地花月橋は昔年秋
山陽の妓をせし由いつたる大店にて鶴の枕とやら
と一床しくかきりまるとさうか謝筆洲の言江河源
流れを地に佳話ありしと云れこと新河といれにあ

る通切りしやんは緑水七午の紅橋は彼にありこれ
にやんはこれ

君一丈に温泉仰裡地消息にいつてもこれやれに
望むやれ木浪浪此月の急るとこゝろと然れども人
聞きて身に存するもの試にかつて見むか

十二長崎の地は矢張り新河と云く娘子供をい
河竹のありしきつとせむるをな程の恥辱にも
思はずとせむるをむらその名譽とするをい
るがごとし殊に地國の人といへば馬の骨か牛の骨かたしは
新平氏がこれ等のことは一切何と云ふにあらす徳川時

果^る鹿^の公家の身縁と云ふ天^一坊まかしの法螺^の吹きたる
目こりく^く真に受けて兎の毛ばかりも疑はず一年^三年
はあ^二こべにみついでやうらめを珍^一からずわす^二官^一官標
とあけたらえには衣子にはがかり^二女^一にやりた^二も^一花^一帯
こ^二は^一子^一弁もえけ^二か^一る^二怪^一もあ^二る^一し^二や^一り^二の^一好^二む^一と^二る^一身
がりはあみの浪^一花^一茶^一合^一い^二甚^一のとい^二さ^一も^二通^一用^二サ^一がた
何^二でも^一故^二も^一つ^二も^一切^二て^一に^二や^一け^二て^一見^二せ^一る^二に^一あり^二と^一ぞ^二る^一下^二等^一
此^一會^一の^二花^一に^二い^一ら^二る^一と^二る^一丸^一山^一に^二三^一年^二や^一ら^二ぬ^一と^二る^一お^一き
れ^二ぬ^一と^二る^一お^一き^二末^一にて^二競^一う^二句^一欄^一に^二入^一る^二や^一う^二さ^一る^二が^一ら^二ひ^一故^二に^一
物^一拂^一底^一せ^二ら^一る^二は^一や^二め^一た^二か^一る^二や^一し^二や^一廊^一の^二あ^一り^二さ^一ま

は^二女^一住^一の^二家^一原^一を^二山^一の^二年^一に^二や^一ら^二べ^一し^二位^一の^二花^一が^二れ^一も^二相^一相
花^一録^一中^一の^二尤^一物^一を^二あ^一ら^二ず^一る^二旅^一の^二者^一遊^二び^一人^一を^二相^一手^二に^一
る^二刺^一合^一には^二す^一じ^二し^一ま^二す^一ず^二ホ^一カ^一イ^一節^一の^二思^一にも^二ふ^一ふ^二さ^一
長^一崎^一花^一丸^一山^一藝^一者^一を^二茶^一邊^一い^二一^一来^一と^二る^一ま^一お
雛^一標^一ホ^一カ^一イ^一の^二癖^一世^一間^一に^二こ^一ら^二び^一ます^二と^一味^一縁
枕^一の^二あ^一り^二さ^一ま^二に^一て^二一^一枚^二に^一押^二さ^一ま^二に^一て^二氣^一が^二あ^一ら^二く
金^一を^二は^一ら^二か^一ら^二ず^一の^二氣^一で^二秘^一切^二て^一あ^二ら^一ず^二さ^一は^二ら^一ず^二空
道^一を^二せ^一れ^二ら^一る^二あ^一い^二ふ^一す^二の^一と^二ふ^一術^一数^一も^二あ^一り^二傾^一城^一に^二成
ぢ^一と^二花^一い^二ひ^一さ^二る^一こ^二に^一は^二あ^一たら^二ず^一丁^一稚^一も^二番^一頭^一も^二是^一に^二成
も^二若^一旦那^一も^二さ^一て^二は^一籠^一の^二官^一員^一殿^一花^一歌^一舞^一の^二女^一喜^一隆^一の^二計^一か

には親同士の慈恩にあつかり得べしと語り、一紙に慈恩
の仙とこれはいふやれやれば、こゝに來るもの一代男の世に
かこども生れついで世を好みにあらず野暮のほろぬん
も得しやし、一夜妻六曲の年風駕着の夢を護
して江にてもぬ敵をこゝ長崎で討つ奴も多しとすく
かるありやまやれむ子萬の考金を定の方より、世人どお
りまかれ決して女の手管にて持たせよとあらずこれを
老子とやら支那の老いぼれの徳を借りといはゞ無為無欲
の徳却て有る有欲にもさるんはか
やこも哀れや音にすえし長崎もわかた狭斜の地ある

故を以て高島の餘息を余ち得るをもやれどほ地にも
を補助すもたぢり曰く高島の炭坑曰く、妻造所
曰く、浪山軍艦の入港、ふ二者ははずともわかたすこと
分最及りたについて聊か、ふ所あらむか
露國軍艦長崎港が長崎市一役の時雨なること、ふまへたれ
この殊に目につくもたを箱佐の区とす、こゝや十数ハ
り、支那と教十ハの茶心然たるもたあるのみ、あ素は入の來往
すもたさ、かく、大烟磯らす車好、すえず、蕭條は
けし、枯梗、竹、萱、こ、杜れ、る、行、林、の、野、ら、に、似、た、る、あ
から、祝、砲、轟、殺、彼、の、浪、山、軍、艦、相、衛、人、で、不、過、す、こと、は、

に陸奥山ヤウわど黄金の花は倭息地間に咲き油あぬ
そ此住氏は五人の童子たとい五霸の事さしふを看つるも
遠者に出張を精し 遠人はその外ニの故郷の事さし
ひもぢし 入港は早の上陸し泊り切り此洋の氷に這い
船杖の夢のさむしや忽ちふれむす鷹がらわぬもぬく
の島抱いてねさめて起すことと酒との流連をんそ金は七
く珠は磔といもむばりの勢れむるまを調はれか
りし 茶心も俄に慈眉を開き金も出来ぬ抱へすも
ふる 吳凌蜀錦ぬみのまに髪も洗へしとつけよといおわ
りこれにはまた老功の多撃子細要う大陸を収にかけ髪

毛にてはらうらわぬの大蛇をつまみ留むるはど此女将軍
四板類何のそのふけどの 一種の豪傑ありて 黒幕地中
に宋を揮りるをあかめの上の標蒲宇喝巧にその財囊
またき上げしおも別腹をせし又た脚出でといは仰地
が又来り 綱にかる魯國七官をばあらく 然かすす
たり 泣きと此女将軍果ての人ぞ小説からぬも此田を後
みえ知りわかしと行かむこにさきくいむに大浦の慶
さといふ面く 悪くいむ 臆脂の帛狼にこそ
長崎にてかみしらすは 風揚飯討の大糸、こに 飯討の御事
を見ればど長崎が流か出来すといふらぬ 任氏の氣風も性

其法此音調種異前にして且つ支那人是れよりあるは
一書にいりて以上の短文句之をよすこと能はず各これ音
調なり而してつたに死文字の能す寫す処にあらざるなり
なり一法之に限らず其書について支那是れ其書
必し注意を要するところ是れを畢竟故百年の昔より
被たへ珠は酸漿砂糖は玉の如くなりといふもるこし能か
能を能し故にして常に通商貿易の上のたにあらずかの
僧侶なり學者なり一に地に居住して骨を埋め旅人等歸
他の安にてありしをたさかからぬを自然にたはれ其書感
他を受けしなり故にたはに種も支那人を尊重しアチヤス

とるへて骨を輕侮するの極なり其書妻たるを婦はた
ゆきても其間には其書感の相存するに因て出るたはた
へば會席料理にたはれいけれとせぬたはたはるなり且つ
た豚肉や乾海菜を珍重し室天や山豆こま豆等肉を貴
美する等も他の於會に稀なりとる支那人の好方を極
束しに故に推すし何ぞ珠に中流以上の市民に毎に月
銀を彈し法苗を吹きすすむる如し若しは所謂
流行強が概ね支那人の樂調に合するは其書感なり或は又
酷だ表舞の礼を重し死者を哭する風習の如し各之を推
言し極言せしむ一切保守の氣風を帯し後述に規

律に、時間共借値を知らず期限の必行を守らざる如し
何れも支那他の勢力を見よに違つ鳴呼支那他款支那他款
亦是れは地の特趣あり一異境たる所以の一大原因に非ず
—ここぞ

中れは長崎に上陸して故一見して清遊の地にあらざるを悟
り川に兒物と芽先づ野田祝園長の宅を討ひぬりて
一面の識あり且其合息鶴甲氏と山城の校舎に在り深々
相会するを以てなり 鶴甲氏はまた帰り来らぬ語すこと
要す—と辭—と考

これより直に茂木にむかふ路 鍋冠山を越り坦たる新道
行禁して上る洋人をも多し散歩する地ナルを車馬を過せ
むたりに用通せしむる—と—と 嶺頂の風景や佳、護浦の大
河脚下にあり嶺上に清泉あり 行人みな一梧桐を飲く是
—長崎の地たるや良水なり井の水も灰色にして水道の水
は生ぬるくこれほどの水遂に木の樽をれむなりやれむと
耳共人の如く散歩がしらやむ 水飲みに来らむとある
—と—とあもけし

凡そ重きに—と茂木に—と海濱の山村のみ如く潮
見崎、甌志、など、ふ名勝もありかつは月にあらしく海水
浴にあらし—と 又た小濱、島原、天草、など、へ航する最便地

たろを以て此にいりけ松柏橋をいふかめし料理水
さ(出来たりとか油心といふに投す時すむしん時
小濱へ舟は自來とふ午に出るよしきれを快より朝寝
もせらるべしと氣まのじくと酒長傷のまし夜故帳
用いずす宵蘭のうあ聲を夢心にきこつ船の波れを
休めりりぬ

二十五日 舟のあつても待の間の近居たとふたれれはし
此相争に小船をもたらばとかいふはとたり十時吹雪
飯をたぬ舟に來る利根川通ひの流船に比してわづかに大

きさるらるれもあにりて肺丸といふかゝ舟にてさる若
十車れ海を越るはちと心細けれとも風自晴美なる折れを
観あゝ身とも躊躇するに及はず乗客數十人暑き日午
のみに甲板の上へ偃臥す而して舟を動かさず
たしむ世人いたるふか〜二ぼういに河をこの舟室のとこを
今日西洋人の買ひやりて外の人を載せさるる客が乗客
多し横櫓をれを特に乗せ申しに河をにても洋人等は
今松柏橋にあり酒飲み飯くらひれをるれがすみて乗
り込みぬ中を錨を抜く譯にやがずといふに不平な流の
舟を抑へて皆黙しぬ

やがて一時車をもつて洋人ども漸くはしけに乗り来る
その数千人とも注せられ、船長も椅子を御座
て海へく日のあたらしきところへ坐をとり、むこちらは小
さくちりてござの上につつまうたに、かたも傲然として腰か
けたる黄金の力もか、こころにもありて是れもたす、心や
いの一組の中にて支那婦人もあり、洋妾もありとも、何に美
容を操るよしや、かれ等鮮衣をきらびかすも、その擧止の格の
ハ等たると、遂に帝女(からざる)に、こゝに萬緑書中一の
一匹の紅とえしひも、此西洋婦人年、次を千とせと見え、
あり、俗地がね色の髪、髪脂たけて雪の肌、さめこも、如たう

うはしく芳歌白くして、すう通るむかりに、ちくちくも微紅
を帯び環状する人多きを、面はやくや、将た又たむすや、た
あつと耐え、たうこや、香汗粟を、熱し、桐に流りて、沖の浪
を胸元にあけむ、すう、いひくあり、ま、い、りや、華微の紅一
糸、華微の破れ、噴、噴、帯ひ、輕風の幸、り、拵、を、結、つ
風、枯、あり、われと、破、帽、教、移、こと、き、う、た、魚、服、せ、し、白、龍、の
豫、具、の、る、に、く、す、め、ら、く、を、つ、ね、た、る、に、こ、の、少、女、の、慧、眼、果
して、何と見、ける、に、や、英、語、を、以、て、われに、話、し、け、し、も、不、思、儀
ぢ、われも、学、宮、の、暇、日、天、下、の、奇、景、を、探、り、盡、す、む、す、る
者、なり、と、名、の、り、つ、し、ば、し、と、打、ち、話、ら、ひ、こ、り、し、が、衆、人、の、祝、線

こゝへく注を来けるに僻易しおもはずよに歌打ち赤
めつ言いつがむよしのちりしむ惜しや
みはちをに海流の字を疎えて正面には雲仙の山高き見右
には天草北諸島等、空染むが如し、かゝる小滝の如し
も四町のころなり

こゝにも温泉あり、諸病に効験ありしにて浴客つねに絶
えず宿をたもたざるもあり、食料も他多事不自由を免
れ人情撲滅にこの氣業やと云はるよし、これに入り込みた
浴客の混雑見たばりにて魂を銷し、何も病氣のたるとに
もあらず日もたは高きにあり、かゝる宿屋やと云ふに

泊らむと難ししとおもひきたりしれど直に雲仙の温泉場
に赴く

村の故より直に山路に、さきれど険し程の者にあらず見
ると云由陸開け廬舎多し、こゝに道連れとなりし男二人もに
五十餘杖田舎者を見えたがわれと同じ舟にて来り同じ方
へ赴くよしにて同行を約し、道すがら語らひつゝ山を漸く
登るとは、眺観ややくひろく、舟を来し方の波取れども
はるかた海を夕望せ、空の色をみたりて波は入目の錦を洗
ひかたへ、此林には旅人の足いかにすやうなる目くらし、此聲
かしましきまですや道つれの男、これをすきていともけ、んた歌

色をたしむる鳥が音の聲にこぼくいで正体見せぬ
といひまあはたしく林中に地をり木も夕ふり丸の志
びつを見鳥にこもあきりし上蟬り蟬り音の聲も
あまれおかしやめしたゆれをかかしも地えかたく僅に
笑をこらへても目くらしといふ蟬れ一種にこそども
もれたるとあきぬともかかしもこもあきいへて裏面日た款
にてゆれ等も馬関在れもれたるとかかす蟬一皮も見た
ことかしこたぬ

新道を坦夷なる代りに迂曲なりつめて篤路を西り林を穿
ち坂を躡り凡そ一里まはりにて峠の頂めたるころに
たる茶店ありいこふ菓子も團子も作りして梨子あり麦酒
の鼓本らむねとよに桶に冷してあまを見る遊宴に洋人
多きをトすへしこに望みて西南北方に一湖を見る名
をいひて源河況といひ長崎の源河神地たまたふところな
りたを源河況といひしにかせられゆれと流を伝父等に
りぬ
るれり行るところもあまりたる事布にて絶えて林叢を
見ず牧馬十数つ群を伴し地々にゆけまわらあり東
の方に断崖の絶絶立するを見ゆれと聞ふ人たゆれと名も
聞かてゆけまた一里にして茶店めたるみ心二三軒あるところ

にひびきし西のふたより思子の聲いといきほしくゆき
来りてあり安楽椅子の如き者を解ゆるやうにし金載
廿九の丸もこの所前にかるきれを乗りたるぬしをか
洋婦たりけり嬌瞳ゆれを認め取て物いさすたゞ微笑し
て相迎ふる

日も漸く暮れぬとして暝色溪邊に下り弦月高く天に
あり半里にこの地獄谷にいたるむかしのこに大蘭若あり
衆院といひ文武聖武の朝に歸依所にして繁盛地ときほ
一山三の坊ありしとや然るに元龜年中に及び南嶽の異僧
来り邪法衆を感て一山皆を宗に化せしかば天草の乱

は幕命の心を毀ち妖法を攻めざる僧救百人を血池に投
し一衆院のみ淋しく残されしかんはまた尋ねべきやうせし
地獄もこの大山質に巖窟に間あり熱泉に噴出し濟蓄
せらる地焦熱地獄、河昆地獄、叫喚地獄、監厄地獄、鍛冶心
地獄、酒厄地獄などありおもひにむかひもこの地獄を神聖視
し一個の霊場とし心を中心として寺院を建立しつゝお花
懸山なるかたじけなく決して草草湯治場にとおもはるしは
こし
今も金金の裏にさすも地志て三所、この地獄もその一にて
也に新湯と古香仙とありこも高山中腹の平地に地獄の宮

氣流爽にして氣候涼快。夏一歩の場所といひ、晩今に
たんに及ては上海香港より遙し来遊者を送くる洋金
かやぶきもれをすべし西洋人向をまじし洋風の大旅館
に南ふ解文字の看板を見るまづ函根宮の下もいふべきほ
のところにして切め来り人地一帯を映すること定合なり
地獄谷を見送り、追道を西り、おさき坂一つ越えて新湯と
いふところとあると山中にはテカルあり、椅子あり、浸湯あり、
あつちあつちの中にかへそたる窟屋いもむ方おれど一夜泊り
のゆれ、退けらともいへぬ、陰かし一浴して眠につく

二十七日 普賢嶽にのぼらむとして夜半業者たうみかきたるに
支度して来り付りしとや、名も立ち出づ、徳父二人、れと島
原の方に卦かむとしてかやぶき、越ち嶽の東此方に西り、林樹の間
を穿つて、板一坂をのぼる、右方脚下、枕小壑、これ熱泉の涌
く地獄谷、左方に北とゆる古舌仙の村をゆむ

坂を下れむ、青草流したる一平野に出づ、ここをから北池といふ、右手
に近く、峻嶒相連りて、風をわらさず、正面は妙見嶽にして
温泉山、暈中、や二此最高峰なり、普賢嶽をみれば、方に
見えざらんにつゝ、北とよ、岳権次嶽、矢岳、鍛冶子嶽、
り、島系に下る道も、鍛冶子嶽のみもとをわらさず、こに二つに

日からしるらぬ男等と別るらんから池を横り妙見峯のふ
まをいひて野草や流るた藪おす秋花咲きみだれて花の聲
いとあけられし

妙見峯の腰をめぐりてとまふ峯の下なる河原か平にまづこもて
て牛馬の通をころかれともう先を林叢甚た深く登り下
上我回せしをいりて石鞋を踏み草草人を扱む身も今
妙見峯北東北腹にありその支峰なる岡見峯を頂上に仰
ぎつ、嶺の深處に下るべしを阿難目谷といふ處中樹
拗曲して枝條紛密日光を掩蔽し陰寒の氣の間に石礫
し苔石記毒を孕んで惡毒怪禽を常かむこの處より

せむ又たよるとれを昔の妙見峯とてし巖石峻及、峻嶒峻立
は巖南を隔み手杖を攀ち徑にせり長艱強人と極るや
かて絶壁にゆる測量標あり衣を天風に拂ひ坐して煙を吹
き起て叫び首を放て回望すこの山高を四十餘人強人の九か
北西半部を脚下に瞰ふべし北には流谷を隔て、流谷の帯
の平野脊振山と名山と北河にひらけその右につくも北西池
の重嶺復嶽甚く雙峰の中に入り奉り東は九か、脊髓た
る阿蘇諸島西大山東の蛇地杖走し聯旦拵合するを見
る徳本はあつたり八代はかこんのさまを薩摩の山におそ懸
南七一碧瑠璃を磨きたる青海布より天草の群島大

冬錯し青蒼の儘光粧點塗抹す。河に西には長崎法
甲角をへだて、深砂の間はるかた五島の峯巒をせらぶるを
認む眼界の閑然して觀光の世浪なる旅人へ他に匹俣を
す呼吸すれむ天より神仙を告げし指點すれむ人界の山
を盡すすべし。その神氣浩として胸中の塵滓を洗ひて
し恍然として吾自ら吾を忘れし。汝城に以てりては年
何をよくりうす又けむや

測量標を組み立つる材木の面には冬躰表か名を刻みたる
杖角しし。その千中八九は洋人なるは皆し中には洋婦
の名もありわれをここに一葉の名刺を貼して去りぬ

これより下りて川流を取り東樹原にむかふ。凡そ一里にして
一叢陰の下に出る石倉あり。かき神がらねも祀あり
たり。その傍には中庭あり。冬詣者の花とてさるを見せり
洞窟に一拜してしばし。こゝは暖湯をてひえぬ。水は氷む
るに從てせし。導者かより十町ばかりのところに氷のある穴
あり。よふに又たよち出つ
お寛政と申すに據者なり。大いなる洞下。板町のところに
あり。今は子生ひたる窪地に過ぎりし。て毫も見え
へまにあらず。これを脚下に見からし。つ。草原めりたるこ
ろをわけて遂にかの穴に。い。冬詣者の花とてさるを見せり

来たものを受し、か深きは知るべからず、あたりは赤樹
深く、なみ日光を通せぬほど、やんと陰森、高寒の氣骨に
沁むやうなり、虎のいゝまゝ氷塊のうつつたかく、残れども、理と
覺へ、かほ、若者は、さき下りて、窟中にかり、小きもの一つを持ち
来り、碎いて、すゝぬ、これにて、湯は、やうやく、瘡を、こゝこを
去り、十町は、かり、わけ、る、や、だ、あ、こゝには、氷をつゝる、ため、わざ
く、堰、ち、穿、ち、し、之、に、三、あり、今、も、切、り、出、し、馬、に、載、せ
て、島、原、に、運、り、出、さ、む、と、て、田、を、す、ま、に、畢、り、て、若、者、は、
小、舟、の、あ、は、し、と、む、か、ひ、て、飯、を、ら、ひ、つ、つ、あり、若、者、は、こゝの、若、者、に、お、
栗、田、を、た、の、せ、し、け、辭、し、て、き、り、ぬ

い、や、と、も、われ、も、と、ち、ま、き、が、路、の、嶮、ま、に、馬、は、重、荷、の
廿、た、れ、も、人、も、ま、は、る、か、に、進、く、われ、は、す、ま、に、林、藪、を、穿
ち、つ、し、た、り、に、か、の、馬、と、若、者、は、は、な、は、な、木、中、に、あ、り、と、ま、も
あ、た、ら、く、し、て、一、所、に、は、行、け、ず、下、り、路、を、い、は、ば、さ、ま、ま、て、し、つ、が、
か、ら、ぬ、ま、の、が、れ、む、と、われ、は、ひ、た、す、ら、に、ま、ま、ぬ、右、の、方、に、は、た、を、
た、て、一、山、を、右、に、積、堆、車、の、間、に、お、ね、を、い、く、に、生、ひ、た
り、牙、面、白、け、と、こ、ら、サ、リ、し、が、何、と、名、つ、く、る、こ、や、知、ら、ず、
これ、より、牧、場、の、た、た、る、廣、野、に、出、で、細、徑、の、文、又、す、ま、に、向、
ふ、た、く、楊、朱、の、歌、を、た、せ、し、か、別、に、は、方、サ、り、大、方、の、方、角、を、
考、へ、て、す、み、に、路、は、此、方、に、ま、た、卦、き、て、島、原、と、は、反

對の方までもいふ付しが今更いひかす譯にもあらずなほ首
進へしは幸にも人家雨に散在する畑に出たりこ
にて同じく谷一つ間違へたりなりけりやれ
こにも道あれど昔までの程にはあらずといふにや、然る
つ年老いては自らいたるおやぢの道の分るころまで案内
せむといふにかたけなしと謝し伴はれりとも四五町
四なり杉谷の村の脚下に足をとるにふりて別れぬ
杉谷より島原まで僅に廿里、疎早に通する国道と並行
してこれより坦たる大道なり、去年に古城の址を眺めつ
ついに町に入る天童四郎村の自のよりしはこにあらずし

南の方にかつて海に迫るところなりとを折ら温仙山の上に
黒雲蔽ひかり見ると向に盆を覆すやう大お降り初
めぬあまの御言きとある家の軒の下にかけこみぬと我
隣を流石の御言きとある家の軒の下にかけこみぬと我
の舟ありやと尋ねに長河の方卦とも、外には定期の
舟なく、我も今日はずむに出たれど、自の朝まで待
たさずとて、これを決し、勧めらるゝまに本店の泊
ること、せぬ

本店の舟われも今より本店にかゝるが、毎を拵
来らず、是は君のをかし玉はれぬの、代り車を御すぬ

申さむいふに敢ていさかひもせずたゞ命を捉ひて故が
申ひとめたる車に乗りつ凡そ七に所にして本店にいたる港
口にゆきとらなり

時をわたりし時すまじ位のことにて日のぬきをいかむし
く又一とも晝寐を會ひぬこの家頗る淋隘なるかたに極
上を并ひく西にむきたる窓に夕白のかやうに旅人と暮
さる、かく昔もいふこといふばかりに夜にされむかしく餘計
に酒をあまると世勢にてまふたす夕にともをぬくは
は枝接ぎもよく風は淫靡なる上にたまけに殺猪なりか

二十七日 七時ころ流氷に來るこに石思儀にもまたかの日
くらし知らぬ方に逢ひつすすて昨日午すこゝかに地
に履しめたくも流氷に乗りはれそれ面白かぬま
日の滯留をたしり御身はいつた卦かるにやせに能本
とせられわかれ等をかたし順席するに日行ぬるや
せむたせれもたまは熱の奴等よりかろぶぶの田舎者の
方もほど面白かると見てけれぬ承張りの

港には細長く洲のやうなる島ありたは亂松がうらむ
嵐翠と岩波と相映すこれ日はかの雪山噴火の天石のあり
たれりなりと

舟は東北を指して汎は洋を横きくより日海色濁黄
波あらして飛沫時に甲板に蹴る雪仙の山は昔は悟雲
の中にありけしき何ぞや速きやうなり凡そ一時回ばかに
して舟は長河につまぬ地遠淺にして舟を泊するに便
らず海中に人力車をひき入れしものすくに舟のきはたきり
客は乗移りしり然るものは自ら氷を凍るを要すはけ
ねども来る様子は見えず中には銭情みの自ら凍るもあり
ゆ火は水中の車の火の種とさるるに便値を認めれを彼
の目くらし知らぬにともしめて乗車し停車場まで走らぬ

七、池田より出水

ここに待つこと一時間ばかり流車来れを待つ車行又一時
可ばらにして熊本の停車場につまぬこの市には二の停車場
りここを池田とせり池田より法住山にいたる程に数軒車中よ
り法住山の殿に朽らしくともられたるか見えしり池田
にてりし程が都合なりしかともおもへど今は強し
停車場の一角にかりて書けりたむ車夫来りて乗車を
すめりまが未は水が青より一帯法住山までとしこの市を
巡覽して債残いふはく同は八十歳とふを氷をこり
上げてお徳の四子成にいたるわれにはちかゝの骨折指く

はへてあんなけりかんとして此方からうまうまとしたるは日くら
いぬぬたちたいておぼしらたんばいれも車に乗り三
輛相つらりて車聲辨こまづ水前寺にむかひぬ
すきやく街衢のまよひよりはまたたく日くら知らぬ
男等はいたく感服の体やししがこの土地の里にもいひて自慢す
る白河定まなもさまでのものとも見えきりしは中里餘市の
東北に地せて甲舎からし所はつれとかりつゝに水前寺に
いひり門前にて車を介す

水前寺はこに見るさまもの一なりむかへ寛永年中此が
羅漢寺の前住言花初者さもれははは藩主忠利公の忍に
應へて来住一字の菴をたて今もいふや水前寺の久々に
て御寺よりその及寺を替地を賜ひて藩侯の別墅とせし
たじかひ洛十年の次新に藩祖の祠をきて遂に七民浴水
の所たよき公園とせしぬ庭のつら敷音をたししとといふほ
むにはありぬど一富士の形に擬して作りし芝山ありそのふもと
に一泓の池水あり地中より真に吹き出て、溜りたる水も
むかへ醒井の大さきものと見えし夏日こに來るも花は手
に抱してその甘美の味に飽き多しある茶店にても氷賣り
ぬ旨なりこの水のみは岡山金澤の公園にもたすも花又
たいて傲まにこるる公園に成趣園と稱す

池の流の事は川とせり川尻に落ち又た瀦して江津の池とも
雅称を畫湖とふむがし幕府に献せし水おさ海濱は
三川の流にまぎる海濱なりし年によりてお少ありし
しもおよ枝は年と甚しよしおほ下流の人民を採りて
大阪あそりに常り申渡覺せしを得すゆけにゆか
おとあのためおせしし年ありしゆせり

こもきり又所にかつし西に地せて能本城地といふ
日の本には徳を學ぶのみとすらすは姓名を記し志が
しと異域の見帝とまよしし鬼將軍の築く城
こ一見をすかに感深しし石垣は流るるけりか蘇

流と衛後田南兵衛と宅前右衛門といふ武官の士人而し
人夫にまゝりて石を搬ひ築きといふ分におおみまゝ
のちにそのまはるゑいと高くすて金城湯池の固め海濱
雙のみに負かると見えし小川ありはあし丁丑の役薩
賊の攻圍にも耐えりしとあはれやみるるに大方地
す超破してむがしは十餘もありし建換令はるのを刺す
今も領意をせりて教角の降ひきて朝夕の堂に高き
流上の松樹を種を着けてさしけりしと流上
の地に地をらむをいかにたじ鬼上官の雄圖は永く
後代に傳へて流るるし

車は城中を走りて地す城の北隅に錦山神社ありが森
公をまつり冬臨すれと眺観を市に尋る人よりまたさ
し西所は入りてさすり鐵道線路を越えて十町ばかりにて
去れば山にいでる

山は公の侠骨を埋めしところ金峰山の支峰なる荒尾山の
東麓にありかの法華宗と他宗の抱合をがしる所沼津
の公の冢家はここかしけり寒者日に絶えず雪中に相集
りて脚踏目をもあやもた哉或十人夏の日にはわきの見
目もあつらひしきまをせり公の陰澤も受けて生れし者危
せいのせらふところをすきて冬より石段の西側には見ゆると

し似る非豫謀賽豚五郎、鷹保一やと諱名つけぬ(す)
しりしにたしきまをせり公の頭にて地をたす手
の中の御奉持をたすもの世故しりぬけあり中におよもの
近早きは追ひけり数町も控へ来たに構置の怪し
る登してふ感念しやまし来ぬ人び錢投けあたむ心も起す
こもあらたこわき旅して眺みけりからくも重圍の中を脱
しぬ
社殿のまははせりて見るとにあらすつまりあまうた石他
して神こからぬが足懸とこを見奉れまたこに一人壺
方とある大青爐の湯者の灰をたむむと木片をぬき

らこむもあり日らし知らぬ男もこれにはいさくあはれ
はてたる体にては魔所なり一刻も永住す可きこと
あらすといひたるも理なり

これにてあらかたの見物帯りた人むつらにもよき故に
ゆ旅所に導きしとふに車夫は唐人町とやいふところの一店
いと入水の暖念の膳及も托も者有もすてわかぬひらあ
かえりたに別としてわつかに玉子ういして飯をすます夜散歩
して折時ころがる日くら知らぬ男も九河に名高き二本樹
の游廊見て来りたりとてまたもいたく感服の体にてつ
まらぬこと休しすかすを憂心にくらきつ一眠る

二十八日 朝回時より此の武支支なりて停車場に赴き其何
分差を流車に乗り前行松橋に登る日らし知らぬ男も
同時に此行する流車にて帰るむといひつたに手別つ二奇
停車場をすきこやか松崎なりこより米の津まで海へ航
するもりやんを直に海岸に赴くもの同本里に乗り
こは名たる不知火の好観地なりとや毎年陰曆七月晦夕夜
まあるころより二三里の沖に燃えて二點をあらはす燃火を
祝火と名せぬなり増かして曉ゆなりこは海中面に
りたり恰も生羅めごとくはる奇観なりし但し今は其節

に及ばざることを小人と詮なし

この肥後國は又勝少と云ふなり。源仲子かまき筆日記
に「はしたる言ふ事をも」迄て河漢の言にはあらざりし使の
大江朝綱かあめかれとあたまはとちぬたほれ島よはし波
をぬれ夜に來てもあま風流島は緑川の末にあつ小島也
しし清原元輔やとほの守となりたるには、等秋枕のふ所
大國の割合には三々一音に少く鼓か籠も秋ま山の文に及
たつ此盟潭も形にて、隣摩に波らむとすも、此昔此の郡
を徑よしとらま、見ると及ばず八代池もよりかく守とのふ
島は身ぬも一守あまた、此師坂の浦に舟ありてみまに

わかむ波とつちやめのと長田の玉の流一むいし、師坂の浦もさ
へくもあらぬにわれもはむに來りから名所つとも見す一とす
るやうなり。たじ球摩川の河野山は是れ見こつたり、此
薩陽の巡覽畢りて及て人吉の狭國にたつかり川をり
れより又た熊本に出で、かの山にも登り、是後の方へ出せむ、この時
みに心を法一たりし

肥前は肥つきのところ、小人とも、港らへり入江もたつ潮原沢
む舟由海目木更津と、案あまりの海のことし、十時頃舟に來
る通りやく方は天草の灘二十五里右に遠く島出の琉球と
るを望み見渡すかぎり、右の方は水烟しんとして物もたし

この日宮授振かしく怪しかりしが海上すこむる憶り飛つと
まうしころ共ハ代佐敷水保やどりうが改せといふ必ず
哉えぬす三太郎の積累も望みつゝ丹米の津につしは二
時ころなり

こは薩摩の中肥後境を去る一里半ばかり名たる船の邊
なりこころ程遠かぬころ矢先獲つぬもやたに一部はあ
言法凡俗哉他と異にして自ら事氏の子孫を称するよし但
しきこ見ふすころにあらざるよしすき所いざりぬ見ぬ
せす遊を東南に取リ一里半ばかりて出水にさるるの同田陸
目離上には仁まの不像をとつを見る出水は所謂百二都城

の一カ一寨の地を見まき小山に祀の生ひくる遠くよりいとい
ふれよ下に人家措累して市をさせり天正年中赤松の末は
こより改め入りしなりか

出水郡長谷田藤太氏を父執にして幼時より少あぬ世
にりる人なり先づ行て訪ふ相見きこと十二年にわたして
は覺へるも彼方にては忘られりやくやくた思ひあき
れりやくなり氏は家春を庶見島にとめひとりこの佐地に未
りある家に寄宮さるるなり氏はいさか心かかぬともあ
らうしが河井もあし草鞋をとりてより津の方に酒も出
つゝいとまり込みのまの故日を滞りすたにさうし水は

人のいけまに 敢て御辭多とせきり 乃かれはこえ
初めわが父世高知に古遊すや 氏と今の喜津未監督友
たる菊池氏とほかぢりくこ地に来りしつねたか家にまをせら
れりれに學の道を教へたは 遊の道具を贈りしつねたか師
にて且つ友なりし 横濱に物ふた及び三氏また相輝いこ来り
わが九歳の頃より氏は一部の外史を專與せり 凡そ素読を
教へり 凡そわが考を文學に決しつねたかからも言は今日
の運にまかりしもの氏に負ふところ固より少にあらず 道徳
感にましては師友にすぎり わが年十三及を京都に負
ふに及て長く面晤を得すつねにまた今日此遺念を得るは

リリ 感懷果して 乃かれ自ら三遊すははす
日暮林木忽ち風也 大おれかかし 炎燈沈て 爽涼をす 酒深
また美をかふ 酣飲談笑往々を懐ひ 今を強し 笑えず 存まに
こりとも 醉倒して臥す

二十九日 念田氏その寄寓する家の一か年を従り 凡そ等
いて 愛宕山に於りて 其所の志北ま里河の對岸にあり 然道
頗りて 荆棘深し 徑に十祠あり 切取巖嘴突出 巖に臨
み眺観 既佳 米津沙脚下にあり 遠く天竺の島を認む
長風海より来り 吹て 走松を撼り 浩韻笙の如く 涼氣

ち杖をさす石歌に倚りて世取し覚えず涼眠を伴うに
一醒めてかへる時ふに年日行の如年や水に詩をもとの他日
記念をかきむとふに早達にいやりおしよんはたじ侍の飛せ
るも世を見候へとふしあふ

盤宮所通拙躰舞放眼江山圖書同興去石頭高枕處
天風吹夢上山閑

念田氏の地自身の大学生を招き余と相見せしむ池田貞雄と
ひ國文を供むもの校中にきりて面を知りし遠方の地に来
りて笑を話ふ又と一奇なり許すことわ時彼に尋ねられてその
家にして大に飲む宴歌むし夜するに二更又た相控て散步

一市北の河邊にいらるこの山岨日も涼り今日も涼り、かまはま
た知らず何とよむと問はば廣瀬川とて橋を問ふなりといふに
に廣瀬川ありかに愛宕山あり名称のみならず形勢も
河とせし似通ひとれむむかへし一住みりしと城橋よ
地をかもひきて低徊すもや久し
橋欄に障らあかけ涼みありしが酔すをにきり風お水衣に
りてつめたくかもしりれむとる時春に三文門のみは同か水
たれど家の人みなわむりて誰れむものたしこの夜池田氏
と約して明日は河内の温泉に遊ぶこととせしむ

三日 清川から来るべき岩の池田氏十村に及てサは来り
きりれとれより彼の家を去り今ややく支度も来し
ところなりとふ何ほとの支度か仰山事とをいふよしをた
心にいひてしを敢てはず袂をつらねてともに出づ

池田の東南にあり小山をまうらうして 徹前の洞をすく
凡そ半里にして観音堂ありいふ先をほとよりわれ等の
池にほいまりし物に其子女またもたにいひ錫製のわさを
吸壺を出してすむこにて赤し将りいれと池田の婢に
て用をたしりい 手教のかりしものたるを吸壺の中なる
はいとも強き境耐の水より治さたりけり十杯ばかり飲ん

とみにもか 酔ひ又さすいれより上はすて坂路にして白
いは七曲とやいふ産めきたるをを見たり 脚に瑠璃とて
水の音をすまつかかり見すいれ雲仙の山萬峰の上たをちて
髪を捲けり 米津汗の白帆鷺つかくすべのけしけか
くたせか

浴衣敷棟むきし言ふに地えす 陽やなとよいといふほい
り尤も浴衣かきし地百姓たあらればのことさへししか 勢
あるよしにて肥があらうとて 来浴するも地もあつた
槽は長方形にして疊二枚のいろさうみるの中に二十人ほどの
人敷もみあが押し合ひつかりたせにいふ草洗なりとれもよ

川がすく見えろわきの方に便所ありてい氣持をわかせ
しむるよしよまをもちし

浴場より離れてつくられし亭子ありたるをくらにいり
二人對面してむ池田は過日仙臺の男とみ兼ふもれ来り
しが松島よりもよきとてるとほめしうかといぬしよをのこに
もつとくひいよの体なり 全体松島と比較せしは何のこと
やら操かんらずやれはあの倭者をたらしむものなりやれは
て腹藏をいはめばこの作りとりの温泉場は又とたか
じたし山深からねと溪谷村木蔭をたし 蟬語泣く俗塵
飛いしよあきはせめてもの百とくらかりけらし

まかりきてし池田の友人や高尋学校の生徒にてり林法料
大學に入るといふ女にやといへる男にてこ人とされて辨生し
折角持来りし一樽の酒もつせれば温泉宿のあまじに快
判しこの秘藏せしふ京の大屋一本徹某してあまたし
まとなす入も程なりしときこに河内温泉場の酒のみどし
うとわめつて笑いつ
時正に午膳の傍にとちし赤首令死に島に化ぬと大
きく思ひのともししななめつ 枕を枕にして臥し湯
かもち来りし雜言をよむる中にうらとじてしはしは又
華胥の國に魂をばしめぬ

さあて又一浴しゆつかに残りし焼酎を酌みてさめおし酔
を恢復し扱てさちまつと禁も其は仙の女かたりは荷物から
と作り言ふ罪も甚し奴鬼も千七と家に嫁むの口方かきしを
こころも酔ひまはれにからむつと里山路いつともしりす
りつして又た観音堂にいふかてお水につけしは五時ころ
り

昨日は早くおつし那兒島の方へ赴きしは今日氏た
く別を借し池田氏を招き又酌みぬわは卯の規畫に於て
南行して鳴門に似る黒く瀬戸の奔潮を見揚子江の流の
沙の押よせて甚しいふ上流を巨坊津林月洞の奇を採

海門岳に於て池田湖の風光を賞して那兒島へついで
りしが七日もあつかりてきしに於て大なる長支を牛
此中よあつ池田氏の目は阿久根に付ありて赴かむを
ちうとたの行を約し之文字をやめて止す

八、那兒島——さくら島

二十日 朝のつら池田氏来り清く遊に辭してあつこより
も馬車あつて阿久根に赴きしより二十餘里、那兒島まで
も行くはつらがるか今日は何れもよし米の津より必ず
遊するからさくら島を越へて大ついに人力車をやとふ田

全の車夫ののりさをも敢て人をすむることせず却て客
方より辭を早くしてたみ漸く成儀を得て來るといふは
一里の賃錢七に或より十錢まで二里はあつとも往復す
八が優に一日をすらすしむ

路、亂れ銭との間をすぎてどこにも、ちがひ、田舎の風景
を眺めつ、餅といふにつぎぬ丸を二里半ばかり、新舊の
二道はここにて合すゆ、かまひし出水を經るは舊道にて
今は米津に直に通する新道もあるなり、ここにて阿久根
へのかつ馬車ありぬ、は幸りつ着すしは午のころなり
一時ころもヤルむ、舟見島の方にむかふ馬車をあつて、よに

し、ば、程、あ、こと、い、で、が、人、の、家、に、あ、り、て、休、む、馬、車、出、て、六
く、つ、り、と、ら、む、と、は、早、速、來、て、一、と、女、と、馬、車、一、と、休、茶、店
の、主、に、余、し、か、り、池、田、氏、は、その、人、に、か、の、家、に、ゆ、い、と、守
と、ぬ、小、学、校、の、教、師、も、に、や、か、一、は、流、の、出、來、る、男、が、り、や、か、杯
酒、を、す、ゆ、い、人、愛、え、す、時、を、梅、一、二、時、止、り、吹、も、ち、ぬ
馬、車、出、つ、り、知、り、せ、の、來、ら、る、を、あ、や、み、遂、に、辭、し、て、出、て、街
て、た、つ、ぬ、い、と、な、り、も、ち、て、くる、流、ヤ、リ、と、い、ふ、人、の、た、み、一、と、を、庇
と、い、か、も、は、さ、る、田、舎、人、は、こ、ろ、の、あ、い、と、に、あ、ら、る、を、ヤ、ル、い、た、い
吞、氣、な、り、の、故、か、る、こ、と、に、も、と、ち、な、る、が、い、し、之、を、見、た、ら
す、こ、も、道、徳、上、る、善、惡、の、標、準、は、結、果、を、以、て、せ、り、し、て、動、機

を捉えて判定すること肝要なりと心にうさつ
扱てこたる長浪兼も涌して也田氏及びかの法師の尻に捉
ひまた大カ車にて四里のまき西方のいそをこらまでおかけが馬
車に追ひつゝこたやしこにこ氏別る

車に酔をりせし地せ出す所を出て、数町路新磯の中腹に道
し脚下に大海の沸涌するを瞰る海中若礁極めてるく盆
の上二豆をよりやうなるに沖より打よする波碎けて散り白
く見ゆるけしきあからず頼がが鶺鴒低連帆影没天連水
更是甚波とせせれりともこやりと心たうちつきてす
西方の所につきて車をとり馬車をもとむ又一とも失敗今少

一やまにあらうとてこ人ひと氣ぬけせむはかりや見
び一輛の馬車すてに用意をとり一合に煮せむするが
こ人を河原へいゝると同(ば)川内にこらとふりかば何故に水
を乗せぬにやとかりは怒氣を合てせむ同(ば)御客二人にて買切
りて他の人もせぬやとて言つおむことばをしき川内まで
四里とすりて歩行と決一つにこち出づ

この町にははるかにらり来りて雨は蕭々としてやうぬ
用意の鳩あきしかむするに木の柄のいかたしていつの間に
あられにやまきは同(ば)風きかはりてお脚飛ぶかむを
防がむうしや、お物もすにぬれぬれきけこそお湯は

いと今は破れかぶりやうと盲達すわれながら情なく人
見はこのまゝ何といふやむとまゝいつけん力車にもあらば
骨をいはず乗ふと決まればこのあまうすへて狭間の僻
村をたつのにまゝめ將ず思たに一とほのかより刺はつたりき
ましく馬車乗りしわが傷をすゝたにわれは何の氣もたらず
いとめしが心やき御者は先に見ゆる人にてあふかへは置切
やうとわらうつ百頓着せし鞍を下すことおよりげく板壁
かへよりぬ

われににぞうて旅人と旅隣りてわらう西方まむれかへて
泊むかともなむしたしがかの馬車の二三所先にとまうて御衣
がわらを呼いまわらせし心につくまゝと地せあして御事
と何ふ車中の客は二人その君子方には同じくいへるやうあま
りに憚はしく見事れば来せまのらするやうにまたまへといふ
に恭しくまの辱を馳一つに來車す

かくてい内につしは夜やうきにむ若き男と泊らぬまひ
は酒を用のず仮すましてすぐ蚊帳にこもりぬむりつおぬまに
かゝりて決まはせし見れば存外つらぬ奴大陰あまの者
にこそ天理をねの代者吹ら大木の木元せる夜合に訪きて今
はかう道やうとふんは事はすべしなりかれの帽子の絹
まんにて蔽ひまに神江の赤鳥居を畫き拙き蟹文字をか

さうね天理辨士の向字を大きくかきこむの故よしも能
かりしは飛んたものと曰ふれりといひたる快がすといひ
たしがよし〜これを利用して亦見島にいさるまでの間外
國徳をすくより困難なる法の通辨としてははむとかは
勝太く心にうたつて

八月一日 朝起天理辨士の没に後し車をやとひて新田神代に
詣つ所西十兩はかりの止きとこりしれともおやまねたり 瓊と杵
尊う御陵もや〜その收瑞離をひり〜したる一弓の田地敷
株の老村みぢ十圍荒者地に湧き水のかしまた山陵といひ

わきと神代のとあるがたには十人の社監居たり 修理もあるが
ふん宮内省の掲示たに見えぬは不思議のことなり 然れども
亦見御鑑と版の統計報告のこの中にも吾平山陵として明か
にかげらば由縁の甚きも世にもあらきふし
こほふの頃より 老樹陰森として吾平くらきすやに河原
にぬかつて石をとり かつ見つ、仰はば金銀亦微のみに
かやせて河なく尊しとこる覚え、かすてに旅館にかる
こいの地は島津氏が太閤と戦ひしころも敗れ降せぬ
とるるに降参塚あり 仙代河畔の春平寺またその遺蹟
たり 興亡一憂しかも河上の漢の白路に對してねむるあり

九時ころ馬車にのりて救護口々に着すをて見よ風景もかく
鞭のいたみを受けしむ地せぬ馬の車のすくみことにかえくす
べて面白からず一町ころ湯田といふ温泉のある村につき旅所に
いこひてギザギザたむ

又た馬車もゆといて来りつとめていぞや御者は皮にて馬を
とめたま玉子殺もともたに押しこみやりつと人は馬に杖
力をつけ地せぬのめむなぬをいふいけぬかまたらきと
らやいかして地見島につまじは午後は時天理辨士はえぬ
が佛の口初つともうたりしがわいそ尋ねる家ありて行くやれむん
にて御前中すといふ首尾よりやりますつ平野馬場といふを

たつねて念田氏の宅を訪ふ

何はともあれ十二年よりたつねて家せぬはわがまだ見ぬ
ぬ幼子などもぬはるゝ花の共妻の都より来りし人なり
とすさこみたゝゝゝ盛にはせししかるゝんもみたぬ
の薩摩ことばにて解かぬるや川御返市のさまきしは
らに氣の毒のことやりしやわがえれしは二人よりボリに相
見よはひおたすへき言のききりげらて何を先にせむやせぬぬ
まで

濱子の君御孫の中にかはせしとよは一ねに抱きまわらせわ
がもとの妹としもいつくしみたりしかの君は盛くくる十五の春

も過へてねまげに見ゆる若草のし女姿ちよやかに花やかに
玉鬘羅袖窈窕として花款玉にちやみ玉眸秋水とほえ
て人を見し目のいさか愧ちるふかごとく坐邊に侍りて言の敷
もどかづ愛故なきまほす叔母君の清り玉いしにふれむ學
の道にふかりてさずつねに人にほめらるゝほのさかき来
む春はまたが女学校へ入りまほむ笑ちりとかあはれたまふま
れも才貌兼備の淑女どもなりまほむいとも愛たーやかた
浮世のはがれしものもこの美しき女に清き心をなしてつらむた
ばていはせむことと幸はすくいと望月のかろことと君か
すむ意にはつねに死笑き蝶飛じて春風のやかに吹き通はせむ

いれはかる願を神にかけては陸から君か將来を見つあはせ
せむにても行くまは誰か肌やれむ紅の花の君はわ眼に星
こゝは見らる

清子の女史はやし年波のよきを見えまふ和歌の浦の磯邊に
ありとちて落しほくせよせむふとさきしかかたぐち男のわれに
もふくやうほど世やさしき氣れを清りすか女史といはほと
打ち笑まふては又の日にてもよかきまにこよひはくつるきて酒
快くのまらかきまはる今日のまどひのたしさをたとへていほむ
かせし
やがこくげも終りつは子の女史もと氣がたに今宵は紙圍

の夜の夜宮とこゝろ夕ヶ市の賑かきも見せまるるそとく必所
櫻島のけしきもやかかぶつ海は心も涼しき
けいさるに幼き子たちわれぬといはるる心も母君たひきと
められて大人しく待ちたむむとけい水濱子の君と島子のま
とみはなれてくれともに出づ

那兒島街衛は決へず不潔せいの病をうらむとあず家
やとも家ぢぢとひて見えするやが海江に出で當面に夜の櫻
島思ふ大きくとてるを思ふこは海風いとも涼しく城中の人
は困て晝のめたる炎熱を消し熱ともいふほどけい濱
子のまみ磯濱の河とけいさるるが舟なりとて袖にて鼻を掩は

るにぞいたまへく逐に心をとり低園の詞にいける詞内の
賑は肩摩鼓撃ともいふや人聲喧譁面白くもあら
ぬばかすかてつゆけを残して涼しき夜のこゝろあす紙に
つづしは夜すするころあすは

二日 朝九時らあて、市中を散歩すむかかかへく五城の
校舎にありし先聖静庵山内晋君のこの地にあつたをいふ
一處を問ひあててやちその名をさかあつすは夏
暖を以て甘御甲さる不祥にかへんめし遠懐宮りぬし
こいより車を賃して城山にさへり高野の首をたぬかかへ

古墳早し世数百にやあまハリ
廿七當年戦役の北七
リ業内セ一車丈ハハもが戦のときには人夫とせりてかは
リかしの如き光もすもほそくとしてすねをかぎて一めすこほ
よの頃眺やよしおあおかこもりなごりし磐崎とよは
この少出山脈の段にあま西の方まが今は野草徑を埋
めておのよまほしおをすまこはつ

車をたし路を向て長田町とよにさうて川と係ら立即
と、少男をたぬ数年あか父かこに友遊せらハ折出入
せ一もれその娘は之一うわ家に住はれぬさうしはして
勸付すこと大方かりずすは職業は大工のよしお下の大工

事といふを笑負いて今は一かどのものなりと酒をすめられい
たも酔ひぬ一わむりして起き業内セむとさかハにむか
こ又低園の初に詣で幾といふ方にいさる

こ南漕の邊地とはいさすつた都の淑手もあう行ゆか入
のすかえらる経緯は目をむるばやうみ香の如錦江のほ
とりにみちとて横道より大勢の人有りてひき出れ来
りしにわ賀の舞臺をのきたるもれハハむ女山サリけるこ
こ人のうら美子十二このか女袂をうらねて舞ふこは地に
美多しとささしがつれも所承の娘ハハむたに愛らしきみ
ここ言にも悔まぬ白梅枝の露とて望趣にましハハ

と當其壞妖をまきしとかや十音より離群別度したる故
かみらぬかいとふく世後の系統を傳ふもの十中の九に
も及ぶと云ふは浮世のほとはみせし所の心にもまほして後
馬の骨もいふかたかたかあけり山花をさるやと
かりもあらむかたかたかあけり山花をさるやと
する女はまきし世の豪家毎十年交代して年ころ花娘ある友
にし行おし祝戚縁者のすえ〜まて美服を了るなり
且つ山や山を設けしにして貴姓は教百の園に
も過るを名にこそとぬと花娘手は觀光の定名の縁想の
外にあるとせ

磯といは市の東端より酒樓西を海に臨み〜米の折り
こと火心こに醉を思ふも花もろく行厨を携へて山江の上
に圍居するものからず一筆の水をたててさくらしまひと
ゆくこの村家まきし見らるるやいし社ありとこに〜
たつた跡して者執事をとることかた
やかか〜て園に〜の山の山下所と、あをこはむか
ししわが父の友連せし折乃性一玉し家や〜人を見ん
はきすかに分かはすれ陵の室もやかつ見え入つ園
と云に山岳の頂にあり平地なく傾斜の地はばせして
林泉出雲の跡はたいたいきかた眺観あまのみ

時すまに暮るにちがへたり五郎史にみちびかしの
涙にいとる日はわれをいらしめもせむとにるの母は
河に流するが我方にて向ひ念せむせ申さむとにるつ
すめらるま酒のみとく酔ひ言はれに扶けのせれ
て念田氏の光にかゝる今宵はねままで物陰一つ

三日 濱守のきみと母君はわかたために布衣の破れを纏ひ
ぢせられつ流すの世はなからしまの有村に滞在せらるゝ
錦田判事にわれを証介の状をしたためたりとむふれも流
しは流し北の空たよりつ、昔名一椀を喫し敷島道

につきて世史とらの名見なのへておきもあかしくつ年が終
りて一時すいころとせりしもら五郎史のつよりゑらせのもの
来らねばわが方より封じとせりぬやららまに波ふら
けてこの家の人心もたせられは一つの際一歌の酒及
い雙眼鏡とせり

う五郎史の方につまこころのよしをたづぬれむ櫻島山には
ふしは思神の方よしとにらまけ地は島の東岸にありて温泉
もあり今朝埠頭に人々を走らして思神も来りし舟人を流
らせつ今宵泊らるる旅店も明日は舟に乗りて舟者のこころ
とあけの約定するに決せり舟は二時ころ帆を揚げて帰航

世にきりよの信銭三十五とついにいかに来すはや
ふやくお紋目おはりさうとふゆき款てかりきぬ
舟は追風に帆を張りて執蹄して海に奔るも舟
中載すも世はみぢかの村の令りこに一人の若者年は
わい程にして黒色の丸き大眼鏡をかけた村舎農會を
にきせせばいさかおれくもすぢの男ありしれにいさの
こといぢけついに美瑛の世話するも約すれは一分はる物
教諭にふはれれを専敷のさうあてさうと定し
海にわたりに一里有す程なく松浦にゆく海出たる石の礫し
く浮ふを見たるはかしく多飲とちすにさうやかと上陸し

かの男に送すれりて村中一の豪家に投す豪家とは、
（高のしんさるも我りこにてさき将りこの家の昔は
松元休助といふ眼鏡の男は西村柳松といふことと
櫻島は煙草の産地とや今は時印と見えしれかとまりし
家をもては世系を繩にとほして空中にいくすぢとなくら
り釣りあさすていふせしんやあるに繩のあきに地す
西村はわれを送りこみ辭して去りしが又程なく大梨子教員
を懐にこま法に皮を剥きて食したれち友なる鳥水が
かつてめつけし砥石梨子の類にしてうましとは世辭にもい
へずすけは暖地と上り地味高せねむなり

西村はわれを誘ひ村中を見物せしむこの家の後よりついで
すらに山麓斜面の地こぼく果樹園あり 密柑をまじ
枇杷之に次くわつたにひるまじ畑は名物の大根甘藷栗
煙草を植ゆしかも植栽亂雑に作こを田ひきふかじ島
中すへて溪流がく秧田を用くも持はず飲水また乏しくこの
村には海岸ちがるところに井あり 数十戸の家こはれは
て洗く

果樹の見物畢れむとある一村家に入る西村大聲にわめいて
いふかほく焼酎をあせとん所謂芋焼酎ももれ甘藷
の液を搾りて製す芳洲人を酔はしむるたけれはつたに

一倍の水を混しかく暖めて小さき杯にて酌む酒の廉
る人その此を見ずや薩摩のや富家官吏にあきる派
りはみぢ之を常用しあらは家にて製す初めは他國より来
ものは中に閉するものもあるよしとれはわはれはこの酒を以てま
づきもれとはなきず破椽に睡りぬかちて西村と飲酌せ
て村を極して去る

海江に望みれば夕陽に落ち西天の彩を眩きまむる
日は快晴いよまでもなきことたりつとめてはやく出てたまへと
いふにわれも一か思ふやうと答へつさ小は案内せむすめの家
にも赴きて時難を可らさるる来るる一とこまた彼川に伴はれ

てこの家に掛きしはらりしこがへる

見たらし来りし豚を煮させて夕の膳にむかふすめらし
は例の芋焼酎なりやれを上席に振え家のもれに西村も
帝末に逢りて大に飲む坐しつゝ淡い淡い酒は
ありしが互に忘義を解せず通辯役は西村なりこの男は
ふかの教育ありて然るもれと見えしすべし酒は
漸く酣りあはし御馳走なりにやれを慰めむとにや誰か
歌へと促す中に聲自慢の若者自ら来り出て仔細ら
しく話をし婦に余して三味線を弾せし歌ありて数
十番一坐ち興に入るやれは是れはししく午帳取り出し

日のたきやら記念やうにと書きしこののが紙に落せば
烟のこくする酔浪の名筆跡から見れば何が何やら傳
はんらう一字千金に人々を驚かすも読み解されぬ
人もあましく九死一生のからくも自ら解し得るは是れに
左の教育

せくらしま見てまむかの人は一たれ柳でもかへる
さく雅島には蛇かきりまわしし煙子は一寸しまた
島にかしやる時や草鞋はいてかやれ島は石原石原
しまにあは波はたやちぬ植え木もある標もある
島の権現むすぶの神よと及るれをつまこもる

又いかしやんせいの松浦村に波はつと名はるぬ
時とともハルがみせ散して各限すこの島まで細流は
一と故をまずこれ一奇なりけ夜暑熱むしく追えて深
淵の吹き入るたけハ困憊しては夢を法はず一時こらわつ
かにわむりつぼしにまたさめぬ家の中に物争ひひきかむ
る聲のいとも高かりしためなり何ぞ争ひはるにやこの地の
法に通せぬわれも想縁もつかずたじろ夫婦の間の衝突
より起り老婆がれも個停すものとおほしく人々皆は
知らぬ御家もあることたゞに静らすやといふを解し将にみ

三日朝立時いかに起き支度して行ち導者来ればともい
づ佐の歌酒と雙眼鏡とはるれすに導者に枕より歌を
村のしろに可く直に坂路にかゝる一甲之らすの向は傾斜
をまで急劇からず水たに注いで眼界ひろくなりをまでい
らちまはてよりがその上にハルは止るに嶮しく樹の拗曲せ
る杖杖幹又ハ網の如く人をかりみ石の塊元と我妻南
後として劍の如く人を刺す呼吸次第に通及し後乾きて地
えが導者に清水の涌くところをみかといは無一といふ何は
あれあまの地えかたきにかゝり想ひつ法に歌酒の口を切り
飲むにをまでいまからずけ度までわかほに見えからハに送

と来りし三人の草刈童の長き竹筒を携へ来りを見付て
何者かと問ふに水やりといふ是れ一口筒とて漸くに渴れ
一半をやりつ扱等は程共かへれ谷中に下らぬ

ふらふら亂望密林にて行歩頗る艱險は無きにあらぬ
人の死すは林の彼岸の吹りといふに今は夏のやかりれ
草木いやかた生ひけりてかはる難きまでに埋没
一たもやきり導者は腰より刃をの鋭を可うあし
二切り倒しつゝ水やいらく時や早しして木の葉の上にか
けし露の乾きもれば午かうとして樹枝につかまる夜毎
に冷滴ばらくとしてあつし衣衣思たては汗濡ぬ若

艱此かたければ汗汗流り如くや類り流るは眼後
の縁をつたひてはちもつらきももう言法に流
へしやなりそんきへあるに或時は全く荆棘の叢にて
その刺にかゝるとは衣衣もいささか小からずばりの痕は
程に手足にみち血にどみあで剣に汗みていりする
なごいまであつきの山にみしかどまた汗汗せき所
幾方の困難と名楚とに打ち克ちて山路凡そと里漸くに
登りつゝ灌莽つきて既のゆるぎの生ひるところに出る
り之を北峰の頂とす頂やいらし近き高きところに
測量標あり断崖めきたる所に立ちて眺望せむとす

ふに一陣の疾風流雲を吹いて回顧たち漁寒す付つこと
十分ばかり也か 晴るゝ気色たまにとち去る

これよりかの測量標のあるあそりの高きところにて計りむか
い高嶺を望みみかへが南岳の頂にして社もあり噴火
口もあるところとて心に伸心大に志越す又もや然然とる大腔
に下りてそのふもとにいでしりて扱てけりかゝるこもまた林
敷のふかきところにして且つ年に過さずともたりけりむか
信せし者艱をなめつ漸くに最高嶺を極むるを得し
身は火の障壁の一部馬背の如く狭き危き岩脊あり右
は無ほ針産の形をけしはるか下になさく松浦の都村に在る

藤野松村あそりの金全田勝を望む畑は山に倚りて段々
と下り果樹叢在すここに川の跡とも見ゆる一溪谷あり左
の方は凹地に一生の草青くむかへは現にたいとらひか
こに埋れぬるなるべし今の火はこの岩脊の西にいまも
にあり

頂にはやしらすさるはたはちく平句なる巖石の面にとてか
けて銅製の鉾三つばかりありここにとちて眺観す
折しも雲はみだりし長天清澄とせりぬ雙眼鏡を把
りてが誠を直一つ眼下には常見島の市街金全措巖基
の如きを見る本願寺別院、常見島を瞻せどいかしき建物は

明かに見えぬと認められつ西高には薩摩かた歌姫郡せり
うね島えんや流氷の海まといふらむ（和歌集）海門嶽の青美
を眺む西北には南郡九町の脊髄たる渡島の山東を仰ぎ右
に高き穂峰あり左には韓國嶽ありこれよりついで日隅
の清山竹の鞭を逞ふ如し南天低く海と合し鷹蓮の如
くうられる三十の島かりたに沈みてあらむと弁せらるるは
り豪懐窮りせし

やがて大いほやりにいさる燃鉢といふ内位は削絶せし赭色の
岩崖ありとらるる岩石のかきかきする間より白煙噴き
出つせんど細きこと緑青の煙の如くとも4方にせらぬ程に

浅間去妻の清山にて目観せし大山の壮快はここにせしけ山
淡路社帝の室守八年を以て燃え出し（續日本記）その枝は
の大爆発あり地す百餘平方安永八年亥九月朔日ほ全
島の民家数人埋没しるをありこれより引つづき今
はかく衰へたるやべし但し幽冥の威靈測らぬす凄まじ
は大山のつねなりしやま心にちかひのくる折しも刮鬚の聲
乾中震轟せむばかりのひびきしてわれも屍居に似れつ
やうやく隙玉を拵へ心を沈みつとちより見れば大いの内陸
のある一部分のところ崩潰して砂石滾下したるがけり
んよりかみ鉾あるところにもより拵飯をたため煎酒を飲

ウサギ

世に南側より来り居る人又ここにいふその申の言葉
者に向いていつくも来りしかと同は有村よりいふに水
は鎌田判事への証分状を尋出し水川に教言を認め
して御ウサギをいふことなり

扱て下るこゝには他路を下るがりは遠く川も下るに易し
ふところ阿かきて舟にしていふ人は旅人と天淵の差あり刻
も早く村に舟清水をいひのたけ飲まむとあもば心大にい
やめて時間はずにも及ばすしてついに村にいく井のあもこら
にあき一釣籠の水汁れば二三升もあもむを息にいひ飲まほし

ケ

いふより真に鹿見島にあらむ舟の西村は祝切にもみつか
ら自に海江に地せて舟を載せてかこに掛く舟を見子
賃を定めんもいかに彼を舟を別ちわれは舟に乗し時
回ばかりにして昨日の埠頭にいまぬ

倉田氏の宅にかつしは午後五時のころ一浴して寝静にむか
ふ昨日はら五印史の方に泊る茶丸む今宵が別れむ
しらこをいふこめさるもてたしなり清子の女史は二十位の方
し舟をわれにいませぬ昨日は御力お務島の方へむと
そこの人も暑暇の中に一はかたに遊ぶむの志あり喜のこ

昔川田の行へ業ぬくもらむむはるるはいと辱せ
都へよりことなりとて直にそれと定めつ杯酒の間にはわが
坊頭の失策や於山のそ艱をも語りてはとも賑かたはし
く談笑して時の移るを知らずぬむらに時はは又も一時のこ
ろなりけの少年は姓をか藤もを故とふこの夜にたゆま

吾朝が藤氏と共に市中を散歩しかい物なをすましつ子
は湯にやる石たみにて別にむー風呂を設けりて時
ころ辭しこちむとすこまたいさとめらぬ酒すのれか
し酔こたついに辭してら五仰父の方に赴く流すの女

史と濱ナ島ナのみらはゆれを送りてかの家もを来れん
にふぶるか藤氏は朝朝の時ころ来らむといて又から
月夜のちかのみやはせらしま浪の花よるぬあへあかつい
われをか茂島の子を忘れししも又も来見えむと
知らず濱ナ君に對してはゆれは五に切たるものあり
今は別れのあつ時にわかちぬのあまうに君か手を振りし
その心を君はあはれとしもあまひむじかたゆれはるの時君
かうるはしけあもわに笑の波を伝えしを見ければはこ心を忘
れじわれは今にこあもふ冷酔がせと聞いつ小ききこのあ
ぬまむとす一たいこの折を止憶せば竹取のふかかぐや姫見

つ、たゞき丹しと子の如くならむををるにこそもわかれいつまで
高嶺の花として君を見つゝ、いあるべきアモルの神よ願はば
併せこの君の胸をも射れ

ら五郎は驩待しつかずまた酒を酌み大に酔ふ今
宵は西御人の六月堂なるに見物せられよとふ飯を置りて
彼に控せられよとつ陰曆六月の終日には冬の社夜焚きもあ
らざるか地の風俗なり西御堂の言書とへは又一角の
賑やりの暮方に寒すも花いまでもさらず祇園の外と
相着けりすてにかへり

われは是るに五日間ここに滞在しぬ薩人の風俗人情は

觀察するところありいざ試にかきつけて見むか
男女の服装は一体はむなむなり男はむね短く袖窄け
衣被てへ二帯を腰にまとい女は大概陋くして身衣も
の、娘妻の外は細帯ばかりにして帯へるはなしこの地石ぬ
かのせめては代弁すなり一種の粧あり多しの家は石堂を以
て坪とせりその板塀よりもやすきよし豚は土人みな好む衣
小僧はと廉なりや薩摩芋は有名な産物中以下のも地
下婢などは一日に一回飯の代りに食し糶に充つ
以上は衣食にけりとも扱へるなり言法のこといはむにも他
國との交通を遮断せしむる一禮の方言を成さしたるを見

わがたゞ鳥の轉るごとくすさふは難きこと一方ならず陸奥
の果の女の言葉は從ほ解ふべしは地の女の言葉は遂に解
しかたしと人をして誤せむこと無理ならずう行の音を去
くいはずして生はア行に生は夕の音濁音に弛るるれを
へ心しきもさういかりかろきをほして徳氣の緩急本来の
法形をもわれ等が用ゆるも托と大層あればかくは全く解
し得ぬともさういふるなりけり 長崎の時の份に違ひに
もその徳の短文句をくめすればまだ一も易きものなり
いづべ、こつべ、さふ、とら、しつかり、だれもかいた、
(あちり、こちり、まいたら、すつかり、二軍隊ありた)

こは邊境のことやれむ封建時代の長俗の残れどもさし
主従礼儀の厳格さ、士農工商の階級的觀念、健兒結社の
組織などその例なり ことにいふべきは癩病系統の伝染、
肺病者の多け、象皮病の風土病たることなり。

こまで述べ来りしはみな土着の薩人に就くこと外東洋
留は固より願はずし、かもみな瑣細のことのみいで事を轉
して維新前後に大に権力をふえ、惹いて今にいたる
薩人は今後の社會に於て果して活動し得ずや否や
二十世紀の新日本に於て如何に彼れ薩人を待つべきや否やに
就て論せむるは興味あり且つは重大なる問題なり

嘗て法に論じていはく、九折の風物すむに見ゆ例なり
その地に産する人しも亦た見やせ倒したるを将を披尋は
外剛にて内柔なり健快活なりとへとも実は淫柔輕佻
なり外貌をあらへ厚儀をも是れ事なり故に浮華なり思
索力のなきが故に短見なり。力少の野心はあつても確然と
操守なきなり。使骨なく節操なし故を以て侍人なくは
去少しその最るべきは尻からくして膝と動らたあるのみの特
點として見るとは人の頭使の下に用ひらるべき小才子の多
きにあるなり」と

薩摩の地たるや九折の最なる端にあり。その人土を他と

毛色を異にするかと思はれ、薩摩人は常に以上の弱點を具
へて更に下らぬところあるなり。しか論定はこれのみならず、また
輕く一時の暴言をなすも、ならむや

安永年間七松軒史に薩摩の風俗を記していはく、薩摩の
の風俗を見るに、鎌倉の遺風ありてありからず、東都（西渡り）
と動して上方筋の風俗を見し、七は中國すちの七風とさ
て替りし事はあらず、外城に在りて薩摩の塔離
れぬ七は、その容貌七佐繪に寫せし七の如く、長さ力には、
見ゆるや、短き袴にて、法も國がまうにて、解りかた
と古一の武士も、かゝる風俗なりと、和母も、休なり、考古に

こそ手もたかき責破られしをいふ何國の戦にこそ薩摩軍
けねばり強ししてまたかき負せし七着の制尤も其ことわ
りあるべし百廿餘外城にて七格三系五不取十不取も七着して
自ら耕して仰りぬにすもそのには馬も衣はれ人も走も田
にくらえん身体も大丈夫となりて守自者も鹿食もいとはぬや
に成るものなり……と

薩摩は十來別境の者あり他と交通せず天正以後程は略
く國を鎖しその國を蔽にして内外の遮断を力めし其の
結果は族血の凝敗となりて悪疾系統の凶變するところ人の
過すに及ぶを見るも明なりから他と交らず防りて華を看れ

眩惑を繼ぎ以て勇武の氣風を若成せしむす故に此の如く也
田類似の制を破り力役に耐えしめ飢寒に抗せしめ以てその天
性の弱點を矯正せむことを期しぬいふはまた實際に効果あり
りて世は死の都の大江に流れ涸れすと見えし徳川氏の泰
平と百年天下懶眠を貪りし時た方りて潜執力を甚く積す
るを得しむる然れども深柔の本性は全く改りたるには非ず
あらぬ悪習を醸成せしはみぢ人の知る所なりして七松軒地
初めに喝破したるころは大地は好なり御意はよしの状態
を見よとく山陽の西游宿中一の浪共見諺に蕉衫如雪
不受塵長袖緩帶學都人……以馬換妾醜生肉眉

斧解割七七腹といふ如き明に於て流とせよ（さなり）さ山
陽の六兒二諺はくもに成りしはこの後者のみなりしが高に薩
人の怒に觸れて危険の獨料りかたすものありむを思て吾を
を逃がたさなりと流石に山陽の柱石眼はよる薩兒の弱態
を親破しころなり然れどもわは男惟すこの時薩兒の風俗
はきまであしく類廢せきしを勿論あかのことありしは
らむ然かも當時大に腐敗せし天下に於ては從は終く鐵中
の錦と腐中の伎したるを將りしなりむ

維新亦故邦家多難の際かれ等薩兒が手に懸しこゑを
を博したるは其の潜執力かるを亦に外りず蓋しかれ等は

この時にあつて初めてこの世界をいらくし因て活動せしなりとれ
を鮮やれと放生會の魚の如く相性の使とこもり也のひる
きに出たなりけり始つて之を余つや圍く鳥より才すれ
を洋く鳥より悠然として逃ぐるの悠然として逃る魚群
泳ぐまわりの時なり然れども想いかなやかれ等は短見を
けたい活動を知りたるの踏すまわりしをきこふに名に於
芋焼酎の芋元氣に外りず一定確固の主義操守あり
にあらず見よ薩人は勤王とよ然かも初は實に佐幕に
して蛤川の戦ひには幕府の味方なり其の去就進退は
陸に於ては曖昧の痕跡ありしをこゝに魚群には必ず先

道者あり、南河甲東の二老は、全く薩見の先導者なり。之に
頼りて、つづつ、その方向を従はず、まほほに飛龍天にあ
り、めでたく、明法の盛せと、かりは、つ、今や、衰と、愚者の上にあ
り、朱紫を、けり、友誼を、卸して、晏子の御者の、爪から、たに
揚、く、頗る、自得する、も、た、ま、お、こ、に、その、本性、見たり、む、こ、え、口、惜
か、つ、つ、爪、中、駿馬、使、す、人、と、蒼蠅、も、甲、里、を、行、け、老、龍、躍
れ、と、魚、鱉、も、九天、に、上、る、ま、と、さ、る、口、悪、ふ、甲、の、申、さ、ん、と、言
い、さ、や、直、電、も、その、言、を、河、漢、に、す、ま、た、れ、に、あ、ら、ま、さ、り、

北薩の中、維新の、臨、に、志、を、得、る、も、た、ま、ん、や、大、方、東、系、に
帰、り、と、老、い、朽、ち、つ、ら、も、後、に、続、い、と、起、る、も、北、薩、の、北、年、老、を

昔、時、の、氣、風、を、受、け、つ、ま、あ、か、の、ま、元、氣、あ、り、し、お、か、り、に、い
も、鬼、角、踏、い、て、見、た、ら、な、り、譯、も、な、ま、た、に、あ、は、れ、り、り、惜
し、や、曠、世、の、英雄、を、し、て、逆、賊、の、汚、名、を、被、ら、ぬ、城、山、秋
草、・涙、と、消、え、し、め、つ、大、方、を、み、つ、か、ら、も、命、を、鋒、鏑、に、預、ぬ
つ、ら、按、す、ら、に、丁、丑、の、亂、何、も、い、れ、名、が、し、の、暴、舉、を、た、や
い、れ、を、竹、槍、席、旗、の、百、姓、控、に、比、し、て、亦、ま、こと、萬、の、亂、後、精
英、す、ら、に、盡、す、薩、人、また、振、は、ず、北、薩、人、繁、昌、の、時代、は、す、で、に
す、ま、い、れ、元、氣、も、怪、む、に、さ、す、根、が、は、か、な、り、な、り、元、氣、に、て
承、續、す、い、ま、も、の、に、推、さ、れ、を、な、り、鳴、守、を、看、れ、る、者、は、冬、一、から、ず
春、の、夜、の、夢、の、ごと、し、狂、ま、る、も、の、終、には、七、い、ぬ、風、の、お、の、た、

おぢしこみ

薩人の精力と英氣と共につゝ是に於てか尙魚の外貌の
みは鮮なり如く朽木の儘にとつたやみ表は一應強くして
裏は却て柔弱なり人みなすむに薩兒を恐れずるべ
し櫻に薩摩下駄さ都にははやらすなり誰か料らむ今
日集人の舊地磯の海樓月明にして白髪者満つる夜床
と音を以てせる途隈なる弦歌の聲をすくあらむことを而して
肅殺悲壯の音ある琵琶を弾するも世に少きにせむぬか世
底園外の女山の泣子なりまよふに糸にても見を待はしよ
程のものなりか小等淫柔の本性は終に蔽ふべからずかた

―して彌子の美をあきり世に―して麗華の麗を追ふ世に
海嶺としてわらぬものありか―く歯じたあれど世は骨な
り奴なり―薩人を以て海嶺となす申らすといへども遠く
さか鳴呼燕市の杜風いたつらに凄涼を―而してついに人
物蕭條として市井の喧しさをいかに

かれ等はちほ排外的思想を有し外來寄留者を指して
よるものと呼び之を藐看淺視―はり―
輸入る魚
魚をよるもの、魚として食はるるほとんどもよる魚よ
りはちほりなり―いかにむむ

如薩人の現状をいかに如し藥、瞑眩せずは厥病魔癒えず

人を同輩し指導せむには鞭撻的非常硬手段を要す
豪傑の士文王を付たすして起り、ここに息を蓄めて細心に
弊害を觀破し改善を計るに推しおはついに再びこの
執力を揮霍するを得せり

わが論はここにさぬりて全九州人物の狀態及その東北
との比較の如きは別に深く考ふることもあり他日洋述するの
期あらむ今假りたるは論の断定のみをいはむに九州は遂
に日本に於ける西班牙たるべく東北は亦法國となるの期が
りやとはいふにあらざり

九、櫻島より八代

一日ら五印駛いたる別をかく巨艦を出して酒をすむす
に、この藤氏来り相控へて埠頭に赴き午前十時か洛木への
汽船にのりわが望みを討つる家の方へむかひきすかに名残
のあしきれては然るも時舟中乗客填充してあつし
さいはむ方なし海路五里をさしたる風景もあらずか洛木につま
櫻島山頂にたがりて夜島のなを漸く遠く見ゆ

税務署長にたが氏はか藤氏の知れる人なりとてその家には
昔年ゆし鑑せられやかと立ちあつ路を冊の止せたり秩田の
間をぬくともま里ついに小舟の向ふをきたるところに以てるに

うんの木瀧といふあり、雌瀑は見るとさうな雄瀑は大に
清りにてはるほいともたなり、四邊巖壁の形勢は書画にて見
哉、此の七釜にも似通ひ、溪邊緑樹蒼鬱として、青翠、
水に清く涼と氣骨にも必む

これより東七町ばかりにて龍門のたまあり、むかへて唐人が治木
に東航せしものいたく之を賞し、彼土の龍門飛泉を見る心地
せりといひしと、かたてかたつげよしいつたふも、然る西游記には圖
表をいれてほめたへ日本有教のもたし、頗る見事なりとせし
はし、これよりわが見るところには左にあらず、函根山中の玉の庫
瀑にも及ばぬ位のもたなり、波水やきまきり、似る亦旅行及

にはあらず、この時にかゝることもありけり

龍門瀑のや、南に絶巖として、赭色にして、圓柱状を成せり、丈
山岩の特起するを見る、北勢南して、海に下り、黒川甲とが
る、此山脈と相並ひて、西には五老峰あり、まて山河浩爽
にして、俗塵をつげず、吟士の寄傲に臨するを、覚ゆる所
なり、捷路を取り、國分に出かふ、世間飛鳥の三甲、酷執、
人と地ふ、からず、國分の町西に宮内、幡の社あり、行て、暮す
宮内、のさまはこのあより、まへに見る所、法橋、頗る、岩柱、
境内には老樹森と、枝に、通ふ風は太古の響きをつたへ
て、草の葉は地を、踏み、て、聲なく、何となく、物きひて、か、し、こ

しやえ枕上の涼氣林のやし

七日 朝七時差新道を可りて程かく桂阪谷にかゝる夜
頂の眺望頗る宏潤歎前には霧島の群山長揖して泉
をゆるりあり高き楳の噴烟道上一て天を衝き韓國嶺
の尖頂剣やかく霄漢を摩するを仰ぐ左には薩摩の
連山桜島より海門につきて奔馬の如くお走り去るを
むとぞ氣とち豪爽大吟快と極す
おほすみやとんいつか馬道にまくれのみ浅草となり
るや徑に東西を失ひ迷惑せしを救回多かの旅換して

漸く新道にまきり一丸を四里にして大窪といふ村にて
天色もち曇り四面峰嶂を失ひ飛ぶ視然として次
々来たにか藤氏お具をもたずきとは大寺とかまじぬと
程々つ川を流るる川なり

おほ一里ばかりにしてたに向ふ大坂ありかいはあかこち
いぢから別にいぢませで行きすすつ林深く水清き溪谷花
風景を喜ばしつ又一里ばかりありとある一店にいつい午後
もの一ぢからたすたは宮崎への路にして霧島地は
(はあ)の岐路よりなりといふ川をすきとるもれやせ
馬座) しきたふるにまぢくまに心には他の向はざ

しとて思ひつゝきて許さければ又とちもとりつ
かの岐路と云ふに違つて曲れどお務島神社は五つ町の
とほむにありやれ等は往復二重のむだ路をしたるなり
神社のさまはあつた國人の幡と相若みて結構見ふく境
地當すべしこは海拔十五百尺の地太氣清浄にして絶
えて三伏の暑者執を知らず社側にいこひて南方鹿島沙
の風色も晴しす神遊き魂飛ぶはやりなり
お務島の山は数年前噴火崩缺以來旅人々全くいつか
とはかねてすきとらしかその詳細を知らずこに初めに面
接したつねけるに實際その通にして崩缺のみに路は通へ

登り賽者の跡を看け得ず迂曲して日向の國にかり東北
側より小はみり得ざるもなごりけれどみか人懐れり
や又案内者の意するも杖もなきしやう杖もなきに又
いさゝかも神友なりむさうし召上りて御坐せしがあや
ちをいさゝかといはるは貴人達はたゞの遊山の旅をたすも
杖にては心のたゞを賽をたすも杖にあやきとるゝかゝる人は
人ば改め同けてみり得ざるにも神得を受けて本志を
逐げぬるべしはまか心もわれか何か非常の罪を犯して
この身は浄ならぬかのこといひやらしけるに少くも腹を
しく論破して笑れむかともおもひた人といまひそりの神友

が代りてわびやうに心をけてか藤氏と共に一笑こと去
りぬ

こゝより湯野温泉に向ふ河側にいんば石標あり高
き穂峰を沿道と朱にて鐫りつゝ一人の行くもたけ
此は其の細道信へた荆棘の繁り合ひて全く埋没し尋ぬ
によしなままでとさりたれり一れと反対の岐路を取り
つた林敷をはずちけにおや路に出て行くと一里半にて
達すお蔭島山はあつとろは全くかや路にて一樹木も見
ず又あるとろは斧斤入らざる大森林なりかまふにかや
路はもやも森林を切り倒して植継もせず草をたしして

たし

途中又飛雨の襲来にあひしかきしことなく着くや
や早速衣を解いて身を汗槽中に躍らす湯の色は矢張白
濁せしも略も透明あり一浴頗る快適なりこの温泉場
旅たたい一庄主の外に米味曾持老の田舎人の泊るす二
棟あり石槽の数は六七個あり温泉の夜涼地はまろの湯
所ばかりの山の樹影もたるとろにあり此石窟中にあち地
の腫脹せる向より噴きあつた然る一箇の穴地獄なり
夜食の膳に供するも枕邊からなる山肴味生じかお荷
の腥草に比してまよることいふまへもたし酒を余するに純

粹のはなく又一つも俗の手境耐くも水を混かせやうも我を
見えてすき腹にみわさう大に酔ふしおれも味のこぼに
うまくおもはれんむ又年し合行里を傾けり通帯
の酒にすれは廿くらおのや目は確かにありと覚えり
か藤氏はこたえ人に邂逅して女人より雑舌を借り来り
われにも見せり何の書かともは俗の演義三國志を
ぶりの封面はいと興ありて赤壁の大合戦の一段を讀み狂
進んでより舟もわく中いつかうととたり本は年より廣
ちて魂は無何有の御に地せぬ

九日 七時半を凌ぐや野のお路に衣をぬらして坂路を上る之
をりは硫黄山の温泉ありその道の道一里有餘こは俗に
いふ赤島温泉にして山麓は温泉中最も有名也地藩
主の浴場などもあり屋敷敷十川を夾み柳比すが藤氏に
又その知人と邂逅しかゞ惣か一浴して去るんも才た
は明礬の湯といふもありと

やがてこを立ち出づわれの赤島に赴くはたごみみ其
子穂の峰すむにをるを得ずんは神代の遺物とて名あり
天の逆鉾の如き者なりやと知らぬこの一大大山景を
めりて奇しし湖沢、嶺、峰、峰のいくさばりあるが如き

といふにその一つたに見ずまゝとて遺憾のことなりとも実は道
途の不明なるもの日敷を費すもの二原因ありたりておれ
素志を翻しつゝ又おれは日向の方に赴かむの規畫
もありしが宇治の叡洞の外は見るとさうもたゞしとすまは
ば止めつゝえより一日も早く人吉に出て球摩川の舟に上らむ
すべし

硫黄山より中津川まで白く三甲と韓國嶽につまむる山脈
哉れ見るとろみぢかや路にして單調の風物にあまはこ
嶺頂にてさくらしま見るとこれか名残らしくかも一はさま
にかゝる思はれつゝ出づれば岐路わかたに後戻すつらに
達するを得ずりまが藤氏といふ一佛見島の方たむまゝか
へり今日のはか木にとまらむとやにけむとむりやけにも行
かむとやをふちつや年また再會の期をあらやとはとやを
互のことばにして彼はおにやれは北にむかひぬ

この村にも温泉あり田畝のほとり溪河の上に屋を設け中
に浴槽をたえりたゞ村民の浴すべかりにして遠来の人ほと
ます浴もあるまじしところなり十歳前後の少女ニ三人衣を
解きて浴槽の中に水に戯れたりかどしき岩が根に
花を散らさる風枯れ火に丹青の筆あるは一幅の水彩畫
にてもうつして見るとやとむもふばかりなり

溪洞を渡りて木しんとしてくら子峠を越え窪田と
いふに去て又峠を越え事は國府の海に流る新川の上流の
一派を得河岸について湖りすべし四里にして橋といふに
出づこは薩日肥の二國を貫通する國道の一驛なりこ
こまで來ぬる同路の感ふことろ幾何所ありが救ふにさら
ぬ位寺にもつねに木橋ありワハバ人に同はずも自ら分り
めてたくこの國道にまゝなるなり

これより先は目くらもを將(す)一本道も來る丈すまむとい
ふし日のやんれかりて雨やらむずけしとあるを物ともせず
ひたすらに名も五里の道三時間やばかりの中に駆け通し
栗野をゆくや吉松に泊る夜九時に止まらなり家は橋が
りまを狭くむきとらしく舟を伴ひて旅稼する長崎あり
り此崎崎年迄と相宿とせし夜熱甚すかや帳外に蚊
雷の如し

十日人吉(此)國道は加久藤とたかからして迂曲するに
捷路あるをたか出し當にさし山内川の上流なる真幸川
を渡りこは日向の西北隅にして四面には峰巒の圍繞す
るあり地頗る凶僻なり路窄りて當面には峻坂を仰ぐ
べきが駒越といふ登は半里にすぎざらんとも大傾斜を仰ぎ

及ちち高に折りも暗雲廢中より湧き出て大雨斜に
来り白羽の銀箭雪中に終るす始皇が大夫の辭を與へし
松樹はあんなたちあんなを梢頭地滴下に抽ぬれたるむむ
とあがず松風浪々水は年々ゆるゆると流るるまかせ
急きつ夜にすししこる漸くたやみなり

この山は日向肥後との境界を劃する大山嶽の一部にして次は
平潤に宛然とす鳥居の觀あり度々林藪あへども大方
蕪蕪の草原にして牧馬の群れ遊ぶも見えたり 行教
里の向一廬舎なくゆめく人には絶えて居はず残雪山を四圍
てけに杜鵑の聲啼鳥のかたききとて旅思覚へか松樹

小徑分岐してこれをもとを分るどた此へとすみよとに幸
に誤らざるすて五里にして大道に出たり

八より西に向て行くと五里ついに人吉の所に万思ひ上
り在外に時を費しすてに三時するころなり 此は萬山
の底にあり方教里の向平行にして狭國をばし出中の太市
としてここに賑なり 疎聲のを挟て人屋柳此し松樹
たたり相長侯のたまりし城壁は河の兩岸にあり奔流
を以て自然の輕淺なり 此岸は向所ともいふ所家のあり
ところ家がみえろひて中にはいかりしりかあり 純粹地旅
店はたゞるゝは他の職業を兼ぬわが泊りし家は焼物屋なり

リタケの膳音奥をすむ未傾る美酒味土にあり

十日 一番北に午お八時に着するに來る同時に着する
も此教般出か舟最もはれははきか快かすかふに二里ば
かり波といふとこにひるままでの間はきいたる風景も口く
水は楳にいて舟行緩かり

こをすこいむ西山漸く通りて巖峽こに狭かり舟水
勢忽ち激越し石に觸れ巖を撞み舟を噴き珠を飛ば
し餘勢旋りて渦をり巖側に向轉し急に渦で深かり
この渦は深し舟聲は西山を震し林頼と中意して旅人ど

徒を難せず舟に隨てふる飛舟舟懸持し心驚き舟
する能はず舟は浪波にあり左右に舟を振り巖を交へ
石を撞し怪れしとはいから思たの間に處して一着を
保す舟は然して餘格ある舟は頗る感賞するに堪り
なほすくめば河中の石はよくあかり舟を怒りてとるき
まを還然れ躍かかく馬牛の奔るかかく虎豹の何れかかく
屹然とて舟人の指かかく踏然とて群山の會するかか
しこの水面に出てきく舟を龜罟の群るかかく蚊虻舟
集るかかく魚舟念思するかかく獺の追逐るかかく或は深
く沈み或は浅く浮ぶ或は稜角ある牙の如く或は突起して角

の如し水流にこぼりて大に盛り激るとち跳は浪と
り碎きは沫をり涌ては泉とせり 回ては濁りなり 奔るは
瀬とせり 穴を穿ち巖罅を縫やて去るや溪に随て轉
折し山と共にな曲す舟の世間を行と舟底石に觸れ揺盪
を跳は濁り上りて走るの波を矢の如く瞬を定めて敵
ふからず仕快にこぼりて窮る

元・まゝの因にせしは波濤聲舟中にはわて大方の久き夜を
ぬらせしことなり 又たこに風物に趣をえしは或は石に撞し
或は巖に上り或は舟を流し或は岸にとちつ長竿をのぼし
青魚を釣る人のかかぬことなり 蓋し青魚はここの名物に

にして味美なりかたに價頗る廉なり 都にては一尾七錢より
十錢位なり 此にては十五尾十錢位のものなり 且

舟神瀬に上りしは午すじすころなり 此にてはまるこい
舟神瀬に上りしは午すじすころなり 此にてはまるこい
たし 兩岸の山高くしかも相通り 魏我峻峻 怪峰 飛ぶ
く 射崖 側れむす 仰て之を望めば 削とて 屏の如く 巖に
綫の天を通過するのみ 名たる 神瀬の若しは 此の如く ありし
ひしか 上陸して 探らねど 知らず 舟が 最後 其 激湍と 舟を
り 踏ん 水浪 舟行と 共に 緩なり 舟れ 一ねにかか しく 巖
峽の舟と 下る 是は 特に 巖石の 音あり 舟に ありし 此の

川長一に九原に暇せよ

午後六時を以て汽車に乗る車中の雑沓殊に去し過るところの驛より降りる人はなく乗るもあがりこの九原鐵道にはかつて見しことを多し大混雑すは今日は清正公其旨にしてみせんに差宿するなりと

八時迄本に宿りかゝる宿を擇ぶいとまもあらず宿のいふがまに停車場の二旅店に投すゆゑ二十四日目にこの所にかゝる来りなり宿にいは阿蘇の方に赴かむとて是は大に心勇みつしおもてまたさくらしまの方にも飛びし

十. 阿蘇より日向神

十一日 七時表路を布り此に取大津街道といふかゝる所はこれには卯五高等学校ありその後の山を越ゆ田山といふ大津街道は清正奉行して造られし後にも細川藩度産動の折つたに之を更り豊後鶴前に出られしと道の幅す町ばかりなむに七半らしきも此あり並木みぢ大樹にして松杉をまじし雑樹もまじり彼の大道坦々砥石如熊城去総平蕪老杉夾樹無他樹缺度す見阿蘇といふむ山陽の詩句はこのあころ此風景を述べて此にて今われ向中の人となり菊に白河の流を暇み東に阿蘇の烟を仰きつ微かなる打すぬ

大津より二里にわたる野を過ぐ白河に北折す数
流の瀑對岸にあり絶壁の上より泻下する状數人の氷
窟を穿つたに似たり 其より遙く壁上に松葉せる林木は風
に動り白霧杖に凝りて梢頭に雪を噴く此川の瀑に比
べ違にすく川を眺む

此より本城より小川を渡り細道をとると取るにはす
に河原のあもしやう山遠くより眺めてたゞ七佐濱
に見ると少くかくして平凡なるがなり 此より前にまは腹
に白烟のたもとを認め温泉にもやとちかひるしが實際は
遠く湯谷といふところあり 終り一里半ばかりに達ぬ

湯谷石温泉初たの江戸温泉類ふきやうなり 湯槽四
つありあついで清波類眉を鑑すや 温泉鉢にかま
つまはとすく次り日丸をとして白雲溪壑に涌
く林木汎然何ぞ物すく 晴日天氣如何や心配の氣
味あり

十日 空山雀鴉を方ずるて天は晴けり 夜來のおは
ほやまず濃雲低連して時に空中に吹き入り 人と生を常ふ
と氣林のやく衣の薄さをかたはかり 一法朝飯に秋を終
りて暮すこの天氣にはかく前とわれもさりとて一日を空

——くまがらきるを以て故か——とくにや旅もずいぶんやまも
たぢり

宿の者案内を住ひまひちやまといふれど賣大いまでわが
に一里又半のひきは遠方にて方角れ大方は旅を後らきむ
といふもたあらければ儼然と宿をまつれむ旅りく細くなり
木の叢をせむとこももどり抜く人に宿のたまつらぬ
とめれば散りかりて衣裳しぼるばかりにぬれしよ宿に
川を渉るの想もあけり——凡そ五里に——して宿めを——とくに
つく折——と剛風蓬として天より吹き下りしよ雲霧時腕に
ち身邊に颼颼の聲あり天風白晝して衣袂河を渡る

ふかき夏漢の中 溪壑の形勢を窺ふを得ず佇とせは然るに
と多時風聲漸く静をむしりち遠雷のむらもあらず
——と夕——漸く大向はむしりち熾火孔と思へるの那邊に
あるなげすすけはすく程餘程はくはては敷所の処かとも
けいかに此壑中か若くは是の——先か壑^やはねばかる所に
てあかの跡を損すること致し方なきことしまつ行き見ふべしと
心を決し嶺^嶺の支路を右に取るとあるに旅は漸く細らなりつ
いに草むらの中に消えつたれむらも又漸くに遠くなるも
か——このあうらは草がらきるあともあり人の来りまよとるなり
この舟中には一人の影を見ず旅を問はむはしむなく心にまよふ

良久し。

ついにまたまのところに降りつゝ我道真直にわが何處に出
つゝしる事をもくろみ扱て下り身はいつか懸中にたぬ田舎は
まててまた一しわかたなる一線の徑路はるの間を造いつゝなり
かてたに折れたに申し行を一里ばかりも漸く低くなり
忽ちまた雷聲の段々たるまをうくる我道しきことおこまを
降りさつは噴火の境ありとくさししてこの路の後せらるる
ことおこりたりとて心にありみつゝしたすらに急く仰せ見れど雲
に下に潰れてきり日光一道を我道より遠くし四望を眺め
りした見ると一面の山火を横に成り降りしして黒雲を土
をその湯つゝつゝとわとてかゝるまは何にかたとへむたいたすやま
といふおこりなり

行くことか許路遂にこの山の南邊をゆるる茶店あり破廟あり
まつ噴火にのぞみ壯觀をてして後こに惣はむとしらすして
すぐ仰せは山や險脚底ふむところみか進を燧ゆとみざく
くとして進を看るべからず力を脚にこむこと返るれを滾下す
と田舎を極む此のやまもた八町、賽河原をすきて遂に絶壁に
いづる此の山の石像あり傍には測量標を建てその下に窪地
あり積原隙地を知らず人々を抜きりて破れせる石像のところに
いづるが下に噴火を眺む

噴火孔をみかどとふ中のみかど此のみかどありまじに表約す
今盛むるを法性寺といふをたばふいびのりやく烟を
旋上して柱をまきせむ耳を舞せむかりにてふ
今こよ山軸と共に微塵に碎けらむ地をさす時雨又を
り風之にかふ類雪怪霧道として聲をきし飛塵輕沙塵
せて孔中に吹せ墜つ窓中の白烟と混し紅紫藍極色に
して又奇勝旋上して来り洋池の色たゞ濃くして暗し幽
杖中に此黒の氣あり一道借をきし空貫して高く外天風
之を吹き倒し烟柱横に倒れ此黒の氣涵浸して急に孔中
を掩ふ又た白烟の下より推すあり相聞ふ徳史たりて又合し

再び烟柱を立つと此景連なりて此魂奪き心持き先邊に
蒲伏して之を窺ふ心になりてやれ自ら昔を忘れ長き
大守す之自らすみ地せて孔の縁邊に坐る危難の刹那
自ら自ら覺りあはて教を返く縁邊の土砂ふむことに驚
下は定めて空洞崩壊することなしも浪を回帰して之に到れば
冷汗背を浹す

しばらして風力いよ暴雲霧洋く重りて眼を放つと見
るところはふか底のいさよあり甚しく荒ら山雲水が秘
奥を窺ひしを怒ふかし是に於てか下る還て破廟に著す
此廟中には持安鎮國山の類ありと南溪の西遊記に曰くこ

此はもろこしに地帝よりむかひの山の靈異なることを傳へりけり
云ひては五字をもて山を討しむじしなりと云は事あるを
いはずと世山と阿蘇の神とは元より關係あり而してこの廟
をたしめ用担は元々大師といふよしにてむかしはこれ下あり
に寺院ありしといふ

南嶺またこの山の形執を記すはく、この阿蘇の山は日分山
四方をかみして堤を築きさく連りゆく其真中にこの阿蘇
のみを別にして一峰ありて、その地形なり、この山の四
方此ふもとを阿蘇をいふ幅二百里ほつたにて平田あり
西の方み少しはかり四方の圍の堤のこも山まゝに川流れり

つたといふ上古の世にはこの地湖沼にて阿蘇山はみづみの中
の島なりしか阿蘇の神むかひは宮守なりしと云西の方の山を切
り通して水を流し湖を平して田地となせりと城にと地標
子をとりて見ると湖なりしを塵泥にはあらしと云ふ、南
嶺の地形を叙すや中流に流れももる地理因を記すはこれ
り、その所謂湖沼は跡ももた昔時舊大い煙なるみ抑
も舊大い外輪は此長倉嶺帯の山嶽を以て東嶽は境上
の連山を以て南大岳山冠嶽を以て西は俵山二重嶽を以て限劃
し黒川の氷輪は此より西をやり、白川の上流輪の東より南を
やり、輪の缺處を銜て平野に流下す、此外輪の直徑七里に

及び中に一所十四村あり世に慮回系有餘此生靈にして元世
一むけの字火口此絶大なるも此世界にらしといへるも此世傳を見
てもや今此大は最新成の火口とせらるるて曰嶽なり一即ち内輪
なり右にはわか越えし梓島嶽と烏帽子嶽とあり左には高嶽根
子嶽あり火のある所を中嶽といふて阿蘇の五嶽と梓島

茶店に休憩するを時此を西南方にありて烏帽子嶽にほ
るる向細徑縦横連感せしをわか越えついに絶頂にのぼりて
雨をくぐりて日を生つ眼界如く岩洞絶岸地方一帶の平野仰
下にいそ青蕪天に連る西方はまた吉仙共山を望む地此方
け山に入たりしりて望眼遠く及ばば人をもれ地獄谷に

いそ温泉あり一屋舎十数軒自村を築く此地獄は山にて
さして見えきにあらず

地獄谷より南行一坂路を下ると半里ついに大道を得り此
は白河に沿うて豊後に出る一川路なり西向てすむこと半
椽の木温泉にいそるる間巖峽の景を望み見えく霞を飛
瀑をかく椽の木温泉部取にたふるとして懸底にありきた
ら仙境の如し浴槽はす句いに見たれが清浄なりし如し眼
をもみ以て浴せり又た数里流のたきをさかめてと路にいそ
たはは大津にからず舊道をとりて陣内をすぎと路より
四里ばかり歩くと森とたはさる雨天にありけりが時早流

よも泊る家のふるまひにとまりし客はかれ一人寂實村女は夜
燈耐をあきり一酔一臥す。

十三日 早差四里に上り越本にいそむる向山田路浦望井
然うちも杖又木森菜芋、注目も春微風をたぐりて水花
漣をせすも如く隘路として暑氣をたぐり松邊杖老楊緑道
ふて人の時時をたぐりす時は十時なり直に池田停車場にむかい
るに竹ちしこを二時五分なり十二時未にいそむる湯車南より来
れば来り

短坂長亭敷十里鐵車道を地せて地身は汎泛國に入
りお大塚にて車をとりて廿二時なり歩一こ福島にむかふ今
日はあつきは國道に人影の絶えしほかにして道は小砂利から
めて眼を射りかもしるも眺はたかくて興三も路は老ききま
り九折の杖を代表すともむ權の本はこのあきりにともかく
脈呼に地を八目にあきるもほかに紅い赤い花はたうはし
からむもの幹にまきつきたる書意の花は唐をあひて中は
ほろりかきはいたまはるもあはれける。

福島にいそむる馬車に來るは一めはれいとりたけしが路
にて來客は人ばかり増かし馬車杖動揺するにこれ推し
もあきるこころしきたをむ言の義も一守路は矢部川の岸に

山に赴いたすのみならず、何となく眺めあり、山頂は
は、この川の上流を穿ちて世の人のあはれ、一日白神四十、山麓
奇勝を探らむとす、心に懸いてつばき、

かくて思木に止しはたえかれのころなり、舟をまわ、ちよひにま
て、ろしく宿屋も不成のあり、飯をらむとて生来、
七の女年のころは二十ばかりなり、いたく肥へたりて、膝も見
ぬ位なり、ついに抽せしの橋畔に着たる見もあつた、は
さまには一軒を築き、まをまわす酒を爲して、日向神代
此頃をのけしきの板敷を穿き、波かれま、につれはねむらぬ

十四日 黒木の所をあらば、河川二派に分く、左方は中サリ、こ
れに流れて細い道をたどり、笠原の方にむかふす、わく路すから
寒村破屋板敷山崖に倚る、中にて大端山雲叢叢す
に、筑後小戸三十二番地霊場として名高し
石段數十級をとりて、山の裡の古寺殿の結構むか、思
はるほど、サレ、今は、たぐりて、朽ちる、寺後は岩
窟にして、石筋、柱、礎として、甍、漢を、衝かむ、寺上には
青き松の生ひて、札紙の飛躍する、妙あり、都立、翠竹、伸
して、附着し、曉、霜、また、乾かむ、山風の、一吹に、はらりと
降り、高き、帽も、交り、ぬれて、懸、翠、を、暈、ぬ、奇、倉、の、所

自ら浮世に遠く岫を去つる因雲にかりして老翁す不
箭の最も高きを半彈をいふ樹枝を折ちて衣角を疏
うはやがむる後隙にいつしかも高僧に彈坐し青
と境いて寒星に憐れし羊蹄天岸最鶴法也金鈴に
心て杖の影雲に響徹せしをあらむを

寺僧と決することありやがて辭へて出づ又た石階を降り
おの大道を東にすむこと五折して橋を渡り傍に
碑ありこの橋架設の本末を詳にす名は大年といふこれ
を以てこれ直に落路にかるこの山脈は矢部川の二深の間に
碑一たるもたせり路は漸く狭く草むらの中に

東にかりやりに山崎人たして河はむはしむなく舟の如くこ
れを越えれば何處か出づべしと盲道すがて一里半はが
にいて矢部川の北岸なる大湖といふ村にあてり
川を渡りて南岸に上れば大道ありこは馬車の通ふ所として
坦として砥の如しといふたげなり東にすむこと半里
忽ち見ると兩岸の山みや巖骨を流はし頗る怪異の状を
對峙して相迫合するをりてその奇は重に北岸にあり教
峰高下を競いし情をしのみ下谷潭漚然として深を知ら
れ山は楮にしていは緑く巖壁の上は松は緑の枝を垂
れて水をさぐるらん草山につきて申かへ新え又教

峰 ぢり高はかに比してまたすれ 峻嶒壁立の勢仰を
お方に倒れかじやくにも覚えて 雄偉といふ外なし 汎
こに斗折して南岸にまた巖峰を抜き 此岸のと相對し
て 巖の形をすこにたひ合して 兩岸の山とち離れ 瓊底に
似たる地をひらきこに 一茶亭を築む 然して 憇む風景を眺
観しつゝ 午ざりたる

茶亭を出て 數十歩 河沿また二に介るる 衣を脱ぎては
杯形をせして 椀に長く延り 巨靈斧鑿のあと 明かすまで
赤峰たる山腹を削出したる 此端に於て 山腹に研然た
る 洞窟を打ち抜きぬ之を 蹴はき岩といふ 雲氣綿の如

く 溪底より 颯れむ 洞や之を 去み又はく 鬼窟 神の 廿奇 状
其からん

溪源の左よりすまを 杖を 鳩鶴溪といふ 蹴返岩と對して
正苗岩あり 之れより ついて 真正面 岩 徳 馬 蹄 徳
貝矢櫃ら 樹の 諸 叢 たり 其地には 釣鐘 土 急 鋒 と
辨天 破布 月の 表 夫婦 土 置敷 等 あり 其の 久 あり 杖
すて 四十八 仍て 之れを 日向 神 早 年 叢 といふ

茶店前より 川に下り 丸木を束ねたる 覚束 杖を 流
絶壁の下に 導て められむ 鳩鶴溪に 在る 岩は ず ぬば 尻 壁 下 上
其の 絶壁の 中 腹 位 の 処 を 登り つゝ 下に 下り 真正面 叢 の 下 に 出

づははこに迂曲して巖峰の背にひらきそままで通す道
はあれども今は身丈よりも高き草叢荊棘の間に埋没し
たやすく行かばず

四十人叢の夕称はかにもかり舉げたがたかくに意味あるが
かゝるもの俗なるは情こぼし風景に看慣れぬは地
を来と見たらむには多少驚くこともあらむかかれたまは
も覚えず石は火山岩管状大積巖にして面白けれとも
置か物さぬなり——これを耶馬溪と比較してむらまは
といふ人あるをすはしがわれも全く反對なり——周室東遷す
るとはほれ舊邦なり——文武の典と軍はは日守難きに非

遂に楚王をして鼎を輕重を知らしめさるるなり

溪山を跋渉せしこと多し觀するにすて天色亦たや可笑く
なりわれも帰途につくぬれより三里ばかり矢部の村のや
た御社といふに長成親王の御陵ありとすましが時多れは指
てすこの親王弘和元中の際にして懐良親王に嗣統して西
下しむい肥流勤王は法士有池河蘇五條守を指揮し皇
威を挽回せむことを期しむいしかば當時賊勢猖獗にして竟
に征伐を東する能はず恨を吞てこの深山の雲に失せむし
かり近年に及て是れを御墓所を考見しければ官を
を考證していよ——それとまた陵守を置かる陵墓

のきまを承れた本柵の柵を以て二匝し其周圍は若木
陰森として天日を蔽ひ前は河原に枕して泉聲潺湲
ほ鳴咽の音を尋ふが

かて河の此岸をたどり木尾とふまぎと里にこり木に
かす時をいししより早く田村おさむは空よりとれむか
は時を返りしなりし日甘木を友の方まで赴くついで
れば今宵はとこ泊るもあはしことなれもとこのみまゝ又とまぬ
さまで心に感服せむしかど何はともあれ何の事な境を見
味しんむ伸心飛越し醉中の快いふがなり

十一 甘木より門司

十五日 朝来微曇雨をむけしはかりしが出逢せし一軒に
にはゆれし一室を来し旅を一甲をたどり居りて此
田形とたゞし右折し東ら小舟の腰に通ふれり上
くのとこに山内村ありとは太古の遺墟やむといふ室二
つあり又た音男山あり傳いふ秦時の徐福祖也といふ音男
をすし薬をたつねかつてたゞ此地にとまりしが室中に不
抜二つあり古より用ひねど何れか中にあるやらとる智恵
院也微定お高かつて来遊して訪あり

徐福及何處尚遺音男村欲問長生藥不人默不言

忠見古田の山をすすむ凡そ四里に一一府中峰に上り高尾
山道方ありのほろ十餘町にして深き洞極は國幣中社
なれども由緒あるものなりを廟貌未だ嚴整に古風を存す
これ西流の境界を劃する錦屏山のついで西に上るとこに
あり眺望曠洞西は脊振より志保に至り南は飯沼の平
野を隔ち此は彦山宮流の流山を隔りて前流の土壌海
につらむを望む久留米の市又脚下にあり屋瓦鱗のこぼく
横田谷を差として白雪の日に映するを瞰みりし跡は本流
がり堀に止むところに池あり池に活水関あり泉石のた
すまい又た愛着すべし

久留米の市をこれより西に一里本元の水天宮は十歳の東岸
にありて繁華見えく人集り知らねど高山伸縄の墓
は古所遍照院にありて荒廢牙也しとすまじかど今日また
は重皇朝とも甘木まで漕ぎつむりてあむおきくの
迂路ありて見が

府中峰をでて一里ばかりにして飯沼を渡るとは神代の
波とふじ傍一帶の地は正平年間菊池正親公懐長次を
奉しかつ武友氏の軍と戦ひ大捷を得たるところ大乃洗村と
いふは同ふまむもたぐり歸來河水笑洗刀血並奔流土紅雪のこと
ありしやう命せし名せむむ姓を憶ひて古を感せば時はた

とねの路風凄しく 蟬の聲も悲む如くにもすえぬ
今山とよきすうの大道を分れ東北に白く小徑を可く 本仰とよ
をすけてたむかひのとも甘木につまぬ身ぬる友は 大空にて日
級する飯田御世印とふ人なり 其家は市此にあり 田面敵
にて青蕪地味風吹き方りて空を染む此には飛越の山あり
り南には錦屏の嶺あり 望眼豁開い山秀空の氣合氣
宇を杜した亭は又つらに環翠の二字を以て子久実相別い
てをかき夜酒を置く紗帷風に揺らぐ花邊文章を論じ山
水を評し其興心に過して夜のゆくを知らず

十日 淹留陰霖定ず 清山皆暝す 雨一停 到り時に
遠雷の来くをすく 夫人雜書を去してふりて 困を消すむ
永の獨傭 菴のものをし 迂遊雜記のわたりをすはしよの花
む先つ後む上巻はかゝるの旅中に得し 経緯及び竹葉をふし
醫學上のことお面白からぬも花から下巻は時人の言行を記し
るも花からまゝ人をして 敬懐し典起せむとて 是も花あり
讀み終りて 予志を釋して 君をいさむる かなしみあり 漢文を
以てし 文字運動苑として 人の思想は 一むるに 花む他に
も 夫人花見りり人花詩文 稿にして 漢字か 朱筆 添削せ
しと花また 同に見らば 是も花あり

午下遊歩こより此敷所はかゝれと云にある金毘羅の刻
寢ぬ眺望はほし彦山寶造の山をみかかつて杖杖を
しとる太宰府は弟と遊むしとるさすかに昔年のこと
もあまひ生、懐に振觸す所なきにあらず

帰れば早や晩暮のときなり 昨日は生きたむといふに杯酒飲
酌してまじげま人が記念のたの何半一待を飲してよむ
いふに毫も甜り白を曳くこと少時七律一首を賦ぬ酒造
市南を渡歩し河がふやふの音も龍泉池として清流満
ついつとらに遊む一浴一かうぬと枕草社を帯び
蘇子の子能聲あゝかし

十七日 朝夜にれり豆田に望む約七里を回したる眺り錦
屏山の翠色眉睫之間にゆるを望みつゝ流石川のや、遠白練
を曳く如きを見、天氣は昨日の如く雨めに来りぬおめは鳩
帰年きしおしがたま 枕風の吹せゝあつた骨みおけた
めもせがきしもえがきしけれむ誰方たつてや、惜一かぬに
はあらきりしか、枕草の寝骨を路傍松樹のトにすゝぬ誰
やらの詩に故物も葉をかたむけの悲むと云われとといひしを
あまひ生でや心に忍ばれりかゝる年たしとかりけれぬるか
まゝにぬれむと覚悟はまわぬしものから天もさすか心にあり

また午後二時豆田に下りて吹より晴れて雲を破りて出て
して天つ日花影を拜まれり

豆田はや終華を所なり流石川の河舟はこまでよりなる山
水深く冷潭相つゆ絶へて委波の波趣はも代りか居水運の
便はありきなり山陽の流花水流矢の萬雷流道人使人望を疑
とここの誇張のたしきは偽のことから言徒道新花況なり
これより豊後街道を走る新踏の雲路花すややすと眺の
り山峽の草洞なる風物にあけあつ又五里を歩して夜
烟といふにつきて泡ぬ今昔は所の花礼とたして喧嘩たふさたも
花なし

十八日 平松をきりて一嶺を越ぬ水石相関へる奔流に近
る道に出づんを折りやうとすて五里又嶺越にかる嶺路の小
丘にたりて午後五時を越むに年はらちあまり花いたく
嬉して里光のかやく老母のかたちには似ず物切らうとすば
つきにて歩にはあまーり花なきとて花麦飯あつとて
すむ傍の里の花見せぬぬ花もるし食ふて見れば竹の
皮なり筍花皮とへとか外にあま存すも花にはあらす内のみを
白く軟かすを葉とすしてあつあつ日にほして貯蔵したる女
り部地の民をかゝる花をも珍重してくらあつあつ(は)は古かく

覚えぬ

阪すから見るとは大方光山にしてすきの波を打つみ道楽の
五垣の向うに咲きたる撫子の花をよほ女郎花たむとるはよく
したる安のいづもからにあはれとて眺めし、わかつてきたすに
急行する中、腹痛みて耐えかねしがわか一家独特の治療法を
這用し、一如此急行法にて大方癒えをれむ二期のころは
断食法を試みるに及ぶまじとして大に心を安んじたりと
又、里はわり歩したふは路甲といふ高岡の村にとりては
あこすへて寒村にして疎せ宿屋なくわかとまりし家も木破
宿せり相箱は長町の貧乏七族と車力三人の法はちかくに

をかゝる絶へて旅夜之感のをいしは言なりと

昨日 別府に赴かむに大分に出てあらた非常の道路と
ゆきしれど嶺越を越え四里にしてつらぬ日田よりこゝまでのと
る測量部ニテ美介の地圖にては大分とよ二枚の中に入りこの一枚
も表せし法なきがせしも品切れにて見立宿舎を以て実
地通行の慮大に困難し、乃に山河風物を記述する上は極大に
難むするところあり、今更は方々のことによえ然れどもつらく
案するまでもなくさして見立とこゝろなりしを自措みにあ
らで事實なり、さるごとく此省筆は直しくあるべき所と信す

別府は九州に有教の温泉場なり。但しこれ程を急げば故
を以てわが国に一浴して去らば然れども此處に没在して今
多きは知らざる地のことなり。諸書を参考して得る所を附記
以て地界をなすべし。

試に地圖を開きて九州の東北方を見よ。奥の地一角海中に突
出して四國と相連する地あり。此の地に浴してあつせは茲に那
鄭海(一)に函館に作ると云ふ。一内海ありを見む。其の奥底に
常として坐れ大山あり。燐の火烟を見ることなし。一へ山は
つねに蒸氣を擧ぐ山腹より海面に及びて温泉を吐す。此十
数、濱脇別府朝見觀海寺鐵輪並石明鑿塚原湯平相

距りて遠きは七里也。是は教町に近き一地方に於て斯の如
き教の温泉を吐す。此の國又他に其比たふべし。是等此
温泉も少くは泉質を異にし。其状況各異あり。今その中を
るは此濱脇別府及び鐵輪に就いてその特況を記す。
濱脇は浴堂を輻濟する最も多き地。人家海岸に列して
一帯をなす。教子餘高寺の紅葉盛たるにあり。四時浴堂は
充溢せむばかり。もを以て旅人の構造整備下段供給。便
利なる實に他に冠なり。浴場二にも。一は浴堂にあり。二は海
と相通し。人家を周圍にせし。浴槽は平地より下る。教に於
て海面を抜くも高からざる。故に浴潮に際して潮水が

に場を充つ規模宏大場内廣闊にして區劃數十に分れ深
あり淺きあり熱きあり温きありと深きも此を脚を浸し
その底布くに石を以てするも通常此浴場の如し淺きも此
を深しめた敷寸仰臥してゆるやかに体を浸すし布くに沙を
以て飾りて沙湯といふも沙湯とは室に瀆脇か他に熱
する要素に乏しむるも人々に浴するも快適なり効あること
通常此湯此にあらざるも法先づこれに通常の温度を有す
る區劃を掘り砂を堆し通常深きし砂上布くに石當蒲
を以て區劃を仰れる横木を以て枕とし頭と足を空中に
出して鉢のみを湯中に浸す此は温湯徐として砂中

より浴せし来り軟かに体を蒸してその感最も佳妙三にか
ぶらんと種々態々浴客數場の内に集りて笑あり泣あり
り歌あり言あり吳笑あり談りと席を共にするやも知らぬ
も中國其人四圍の客は白人より相交り互に淫し互に興
しからん此を以て直に日の傍るを忘れぬむも一節耳
此よりテーカーをしてけ何に在らぬむせ此の厚薄人心の愛
易等と此を親するに及ばずしてその材をも偏らむは等
の人を見れば白人をすき此天然の良材に以てするの得意あり
あつたり一疫ある者此沙を取て痛處に上げ局部を蒸し而
肉を軟し力体此不随年三の治及を愈し体すむに汗流

に三つは起て河を以し冷るれと又以す砂湯を出水
壺湯に浴して砂を落し身を滌け浴を出水浴して後神元
も杜快血行迅速を欲せ増進するに豫想の外にあり此
れも湯に浴して地に卓弛するを其の位置海面を去るも
高からざる故に朝夕潮水に遊するの事にして浴に浴し
て数分時分まで敷百に浴客敷くぬきし浴場は乃や度
て三事画す一大地とあり潮の深さ二人に達して浴せし
るも能はざる位にふるわめこの地に遊ぶ人必らず先づ潮
水の進たに覺かすべからず然れども潮のたいきれを浴槽に
中をく新しけ垢膏賦も潮と共に去りて海に壺湯

沙湯海潮を汲み出せ一故に新泉も出水して浴せし
須臾にして清浄にせし浴湯をせし室に天然に浴せし
且やこれに鑛泉に兼ぬるに海水浴を以し皮膚の
強硬を来たす故なり此の地にはまた上等浴室あり其
の効驗を室に記し浴場にありとす
川府と浴協をききしに故に数町人家相連り強ん同市也
るにかく市街は繁榮人の鏡も其の地比するに之も此の
くは港ありて流のまじりに四五枚に下らず此の東岸四
國の西濱より大阪長崎といふも此の港を經由せざるは
まゝとに樞要な港なり温泉も敷かたよく海水に浴せし

りつゝもまた溶脇がぐ大なる地はく砂湯地はひたひた
たし地は年を起し溶脇を凌駕する底の大浴場を仰せ
としてまた成りずらくは必ずや溶脇を壓倒して諸温泉中
の霸王たるを得むと此地海岸に於て温泉地涌出するも地
方く近潮の故と云ふと砂を穿ち年々を醫して海濱に横臥
する人ありを見む風靜かりて浪濤かきの朝かゝり如し以
し往に白帆來往するを眺望するも快楽に言法の外出
つといふべからむ

鐵輪は即ち地獄のありと云ふ溶脇を去るこも二里地熱や言
として西に丘陵を帯び南は鶴見山麓に接して此地は海に
面する家百餘街道を折れてこの地に本々人必らず先づ一種地
氣臭を感し以て此傍に於て沸し聲を起し蒸氣盛
に噴出する所謂地獄の地を見む其の故浴場に上つては
てもすくもく或は軒下に或は岸たけに或は家の中に入れて
又もすたりも出たす氣た熱か故に人家に接してたが地
以て天竺の蒸氣と云ふ物を煮炊す浴場二所浴の湯と云ふ熱
の湯と云ふ者は白濁後者は治地にもた蒸湯あり四方を
石を以て包圍し上部また覆ふた土を以てして僅に一口を開
きて人をまきしむ室内地獄の故もくを其土に置ける石當を
その間に敷き人はその上に臥す鐘氣石當を道一二人方に達

か花山青いふ村に泊らぬ宿をむきかすして大に心地よし
雨返して幸一夜涼水の如し

二十四日 朝来大霧遠山は水もあふむが等し里の野道一
はしりに弛せて十時ころ宇佐に着ぬみの間は峡谷の如に
しざしたる眺もあつり古松軒の記に「この邊の道山々にあたしま
りしとせり且らん道も平地から西の方を大山がうへへ通るに道
泉ありて田の中一溝のうちにも湯のわくところありて湯氣のう
地ぬしとあふがこの邊の事を記せしむが頗る中らぬやうに覺
えぬ温泉とくはの道より此の如くたたる觀海されどもにほも

いひたりにやせほ考ふべし

宇佐八幡は女帯大社にして九州有数の古刹也氣法唐花
七宣をこししむのこをありて世人知らぬもの地なり此
域廣大老樹林としてありてすべて素然とす朝宮のやま
からかみまつたかちうたれどもリほゆ成の儀たるを覺えて
頭は自ら地上に落ちぬたし社方の石浜に眞字は隠るいふに
序はれぬ又古松軒の記文を引きてむかきまをよきまて異
りぬことを證せむか何の西遊雜記に曰く扱て宇佐八幡を世
に知る舊地定めてあらうと云ふなりと云ふ思ひしにけ地は
案外の僻地に於けりあり古地は遠きところ我地にて風景を

なく面白かぬところなり御社等は大概より御普法にて何れ
御神くとて小社や電敷方にて境内ひろくとせしこと
ぢからん哉とふところとは見えぬ寺社は山より海邊まで
ては神まい年をゆるしやうとせしことなりの祭神に
いかにしと所家もあれも城の在所にて茅屋のみなり其
こけ邊に風俗百姓外に何を業とせしやうもなり邊鄙故に
伊勢の山田のやうに彦治村人をとりひろく此處をい
ふてたましむるも錢をほかる風俗にして今も氣象よろ
しからぬところなりと云ふに余算るところは敢て彦治村
言ふまゝあらざるなり

これより町を北に折れて長河におおむ田舎道のゆる道にて
眺む折やと真書ありてに以て困難を覚えり宇
佐名物と宗飯を買ひて此の口に頬張りてかく味覺も
甘かき果はいやに甘くて勿体なきことには知らず其れも棄てて
一里歩はかりにして驛彼川の河口なる長河にすべし橋を渡
りかすに一して停車場にいたる
待つと時間ありて一して汽車は出てぬ小倉舊藩表
若殿公自宇佐に参詣しよる汽車にてかゝるよし誰
をりて言ひ傳へてみたり車窓の外に首をさし延ばして見る
鳴守王侯将相豈に権あらおやえれを時形のくせも此

か何のやうに眺むる流石に田舎も此より合がかりに彼方
もかゝる環状の中にあるとは多分の面はやくぞ覚すむいたま
しや

車行を長時間に亘りつゝ倉にいらしむに環状
の道一々山色濃翠洗はれつたに唇も爽やか
流車をとりつゝ先づ旅衣に投す垢すたる衣に破れ
草鞋の御足跡も傾くも平の粘油を衝いて
ぬ車行の流石はまぬすめ帳といふにありく打つる酒
したかに傾けつ隙の空は炭坑のくに關係するは是
いとも鄙しきこといふのりたるをすまつとばしは肺を枕に

一てまどらむ

合やれと九かの地を去るもすやれとこに筆の序を以て
九か風物の延評をかき見むか抑も九かの地たるや阿蘇深
島西火山の構成すところに依りその派終複雑にして
徒に窮乏な溪谷もや、遠曠らしまる西筑一帶の地この處の
み地味膏腴なり而してこれを全体より見れば九かの地は農
産に富むといふがすその百は實に又炭にあたり今夫れ九
かの山は平瓦植まぬにせに阿蘇ほど深閑し山は山は
噴火のあつたにまだしもそれといふ幸の如く團子の如きも
らす何の奇偉りあるまがに阿蘇島山軍の最高點なる高嶺

の峰のみは家に通へしとあり、如く斬然峭と以てたけの山を流
せしむ他をわかれ、やにさす海江の風物を求むるに徑に切岸
鴉土あるのみ西部の海岸緑地、複雑を極め、大牙出するも
陸中の東部に比するを得ず、幸からむのみ之を要するにたけの風
物は平化といひてまづ不可なり、かゝり初め舟舟普賢洋を航し
早稲林海峡に入り、こゝ文字用時、山を仰けし時、瀬戸海中の
赤光山島を看慣れ、も眼を一新し、こゝの寺跡、鏡一、海を
を想像したりしが、今はこゝに想像の境にして見おし例し、
自覚したるなり。

夜は初更なり、し吹や舟を俄ふて、かゝる流氷に上りぬ、現海に

臨みて相對せし馬関と、同じに横関を居、舟火官低たら、夜色を
見た、何とぞ、か、し一湾の波、弘波たし、静か、せ、れ、も、た、は、昏
潮の星を碎り、あり、遠慮海、影、茫、茫、として、夢の如し。

船底、下等室、乗、定、乗、十、人、宣、言、語、を、な、し、木、枕、に、頭、を、た、め、
も、波、れ、し、と、舟、の、蓋、は、結、留、れ、け、か、う、と、舟、の、周、防、徳、島、に、し、は、
午、方、三、時、上、陸、して、旅、店、に、投、す、あ、い、ま、も、な、れ、て、眠、る、
四、時、半、ころ、朝、倉、に、就、き、五、時、差、の、流、車、に、乗、り、ぬ、れ、る、煮、
島、に、いた、ま、ま、の、地、わ、か、曾、遊、の、と、ころ、車、窓、外、の、面、白、き、眺、め、は、
渦、巻、く、流、の、大、量、の、瀬、戸、と、吹、浪、潮、の、上、に、島、光、の、浮、ぶ、最、島、と、な、り、し、

十二 廣島より奥切

二十日 夜より濃霧と濃霧とに揺られて流石に十人
の安睡をせし得ずしてまに申しは朝八時のころなり 凍む
霧ありければ市中すか まであきり やるやりに隣り得
十時をいかにきてまぬ

今日は曇れとせむに十里本城といふところにつきて油のむか
もふ心は霧に似たる直なる道をたどりぬ太田川に流るるも
まの景色もたかく目に入るとは向の赤土売の山天の如く
かたがたの少くは屏易の氣味ありしものから頑な男の
中逢に挫折すまされとも折れよと汗をふまついたすに
まぬ

この山は可部峠といふありにこれを前面に突元たる
山を仰ぎしるは次には世にもまれなる活水のありとこれ
一汗がわいて越すものなとふいさみつすむにかたし
山下の驛をまけて道はいつかたに折れて峠にはからす
べつと里に 飯室といふたのきぬ地圖ひろけて足るま
路を反ちかたなりとらめやこものもは向の此端にた
新らも石標に左澤田とありしか故なり

この道の道は平かなるもから舊道に比して二里の
道の如く 尤も
この道の山にさるるの所なる地圖といふ村よりなりて
これにかた

おろしおかしよし今は悔をなす事かてもおほいさした
るかしよと漸くに本地には着しつむさうしき家にあき
の汁留のほろりほろりさびさびさびさびの暖にわつらん腹
ふくらふておむらぬ

二十日 朝いとも早く曉の星の残れるころに差す大雨路
を埋めて四顧一帯はし四里にて中山につく村村やうや見
えおめて地勢や、僻出とせりしれよりたに折れて礎石
の小徑を歩し道一つ越えて午の吹電をいふにつむらひは
つにス何の地なり先づ目にかりしは草村藪谷とせし景色

流れむばりの山、山陽の風物とは全く打ちかへりしをまが
りしは山陰の地を踏破せむとて、廣島を去り出にしりきるを
ス何の都ともいふたる流田に白ぼして一人の知らぬ僻地に
入りしは心ありんことを今更いふまでもなしやきすところは新
谷にあれはり

江川といふは山陰界の大川にてス何の中央を貫流するは
河より潮ること凡そ八里左岸に因原と名つくる村あり、矢上
川に江川に注ぐは、矢上川を潮ること十町のところ、溪山
頗る奇景に海あり、一區あり、新谷溪と名づく、この川の源は二
つあり、一は矢上の奥なる原山より出て、一は新谷よりす井五に

たり合しとせり。さほ冠山よりす。小流を併す。亀谷は
鐸洲の南里にあり。中に一嶺をたつれは。今よりこの嶺を越
えて鐸洲に出で。れち河に流し。井原に至らむ。嗚呼。水
すひに西海より。の靉旅に。つれぬ。かま。は。餘。空。を。ふ。ふ。
嶺。畏。せ。骨。す。を。辭。す。こ。こ。の。地。に。た。り。し。も。は。ま。に。この。新。奥
溪。と。三。瓶。の。炮。火。山。と。あ。れ。ば。な。り。け。り。

新奥溪の跡。名。未。だ。太。た。新。者。が。り。す。も。も。と。も。り。少。し。祝
し。日。友。の。お。里。と。へ。る。四。年。前。の。夏。こ。に。一。泊。し。歸。來。せ。り。後
傳。り。す。が。せ。り。に。因。り。こ。の。れ。き。こ。の。あ。り。を。知。れ。り。け。り。故。は。い。ぬ。
この溪山の音。頗。り。見。る。に。地。方。さ。も。あ。る。か。よ。に。一。人。の。名。の。盛。に

こ。を。世。に。次。張。せ。む。と。す。る。も。あ。り。井。原。地。人。姓。は。野。田。又。は。榎。と
い。ふ。新。奥。溪。に。上。り。け。れ。も。巖。嶽。と。して。マ。は。杜。夫。の。如。く。嶺。山。峻
阪。を。く。こ。と。平。地。に。異。が。ら。ず。關。出。の。為。に。と。東。奔。西。走。こ。に。二
十。年。風。懷。の。高。さ。と。は。け。人。の。こ。こ。か。と。あ。ら。は。り。あ。け。水。君。他
日。必。す。こ。の。地。に。游。び。あ。ぬ。と。見。乾。山。榎。水。の。仙。筆。を。ふ。ふ。て
奇。景。を。う。つ。し。わ。わ。て。奇。石。を。以。代。に。傳。々。を。如。世。よ。と。わ。が
今。こ。の。溪。山。に。游。ば。む。と。す。は。お。里。に。對。す。る。初。昔。地。然。後。果
を。む。た。め。に。こ。を。あ。れ

亀谷より一嶺を越えて鐸洲の村に下る。麓にす。水。聲。聲。地。音
き。き。き。つ。す。は。や。の。見。え。り。か。と。い。え。く。折。り。も。嵐。林。村。を。據

かし涼簾絶えず耳にありえんや井車にいたるまで二里也は
山峽の間にありて自ら雲烟に霞みえんをよきとす程のまほは
けれど流石にせのつねならず葉をかたきとこらもありけり
程なく井車につきて先づ野田の宅を向ふれよりは本里は
かりたにありとす又いづくこあたりの路は近頃つくりたしと
覚ゆかきつめし砂利もまだふみこまれず道の旁には家
をにまらけり

川の西岸に開けし田圃今はたけりて溪山再び追合むとす
こゝろしんたる鉾松の立木の森ありに侍りて人家あり
散在す竹抽たりと裳短きを着たる老嫗二人たまに田圃
に腰をかちて草をぬきおろし呼いとめては野田の宅を
れ名と同じふ家の家はこゝろしん三所流下の方にありたし
今るは溪篠を本宅の方に所用ありて赴かれればたれ
の時ちてはかきり玉はぬきおろしとたふ時は二時ころなり
よりゆきてはほと四里は歩み得しとはかきりも訪はむに
ちがいし人を見すしてすは何となく物さぬとこらあり
とまれからまらぬの同きまらぬ見むとてせほすみやく路
の右手に老木の松の老い年とてこら一畝の田地にこのあたり
に特有なる赤尾しきながらたる菴めきたる小家ありこれ
むははてもこらまらぬ家の家けりける門局かたし鎖したるは

人かたより来ぬあまう玉目教もなれと女とて路田の
来玉ぬふ翁はわれを見ていたく喜びを述べられ今日
これこれと目を見案内しけらむよひはわが渡上るに
まぬらきくちもとわれは可なり深後まであるがれ
とに供はずといふわれもまたま里かの村あるところまで
このころよくあまひけれこの家に泊らむとあるしになむ
あはれ見玉ふかくはうたしはりのあつらふかこ二階に
ともいまは思直がずいふからむともまたたきもすから不破
関尾の板びきし軒も雨に〜とねぬらすほどのことと
ふへした田舎のつねのまれまぬらすなれむを不承し玉

ふとぞは遠慮なくとまう玉はこいこい〜と〜と〜と
鞋をとく翁はとれ時までありが朝はいと早く参り出
といひて提燈とほしてかへり

行水もかけつてやがて飯をしたむ醒睡に上るるは
導かれし室は産このをみて下は吉田つき河を止ければ
海風自在に吹きかゝりて世火もらるはあま〜河音
すみてさえけら〜あまの音か〜と〜と〜と〜と
に侍れば煙のけれ〜新百より〜海に出て〜新月の影細く
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

六畳のせ敷に蚊帳つ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

おぼし帳中にあり雜魚夜とふまてにはあき蒲團の上を
ゆたごきまづ 清らかなる方なりしが木枕のいこく
如くははらからず

二十三日 五時とふに起きぬま氣をまかして朝が直に
したむ分は明く吹より来むとわいけりしもからまて
―― 遂に来まはす朝霞のほるこころ年ばかりたし
漸くに来るしれを見てまつけしこころ昨夜家にかへ
しより俄に持柄の生を来て今に酒腹ともこころしきれと佳
客の約にむむつらもあらねど来りぬせしころのほら今あひ

らに感せられしれよりすにいとほしくあつて共に出づ
これより家の家まのころ昨日経過せしころなり 杉木まの
あきところより河水西北に轉し俄に極ゆるき 水中に
不いと多く水は浅くまかに袖まて水も相回りの音はきやく
かしく佩環玉水ははわして石と共に跳る之を踊庭といふ
右手は直にかと 新崖たし道はまのトに直せり左の
方は崖岸の勢やくやく迫るも手もかかしこすははあは
山に人多し思はずに池せり溪山の音は髪髻として
す心に眼前に幻出するを覚えぬ
これを通すて家の家にしたる分は先づを推しいらす中

入りし水も導き入る茶をすの菴中に病する種も木を
ふきく松風蕭颯として機端に吟り 鐵馬丁東としていま
自ら唐書に記しり 一あるところ因より 長安又利の境に
醉生夢死するも世を患すすところにあらざるなり
一これにあり

菴の西には一道の細流あり 一れ又源を冠山に發するも世に
て溪伴川といふ先にいふ一細流とはこれなり 一は溪谷は狭
けれとも自ら深遠山岳の趣ありす 凡の夏はつ飛びまき
菴大教寺點眼の美觀を極むとも冠山北に宝元として
河のほとりより見ゆる山一にふか 枕山といひ亂念より終洲

に越えし嶽の北に教里川牛の方までも走る山脈中の最上
峰なり 一の山ありは 冠山にすぎても又た一國の七寺教
枕の一なりや懐中抄にも

なへてふか 枕山にふかぬれからむおも 冠山は
とあり 枕山にふかぬれからむおも 冠山は
なむか 枕山にふかぬれからむおも 冠山は

翁はいつや御業内仕むとて日年を午に草復つかけ出て
たも多にやれもついで出づこは西奉すやに迫りて嶺の頂
き強んとす 崖腰の介波よりも げく大方を壁面接
かかちたるに時は膝つたかなとよのよた 這ひはびりて

さながら蒼龍水を得て天に登らむとするに似たり西岸を
に一連の巖峰・幽溪の底また連の大巖石にしてこの下
所に向くやうとせしむる道は遠時に青色を帯ぶる水紋
来激流の穿鑿するところ巨壑の雄力手つかしの土壌を
けこの巖峽を削りて成れるなり

河床の巖石時に凹みて缺處をよけたるやうとあり奔流
こたひりて一道の怒泉となり 勢として搗下し潭底の旋
流渦を生じせいは百雷の轟かかく飛沫風に散りて霧
に似たり之に臨むば滴力粟を生ず之を瓶か樽といふ傍に
一瀑あり緑樹のいたるやれも崖上より 瀑下し海として

一東の銀絲を垂るに似たりこの源は二度より来り崖を
腹に抱え合してとなり更に三段と下りて涼風四面より吹
き来り冷衣軽く颯りて毫も暑熱を知らず之を連理の瀑
といふは眺むべしなり

又た崖を上る今までは幅一回ばかりなり新道にたすて
より細道をたどりて 蝸曲蛇行し再び崖を下りて瓶か樽
の下と四所のところに出づは河水流奔激巖石頭石歩難
けれなりと下れば更に奇観あり河水また北轉し巖峽
の間一帯あり奇怪なる巖石は中央に裂罅をおいて幅僅
に三寸上流に流てさへ隙を没せむとせしむるに似たり

たかにありし河水の全量を擧げし。長き谷道ゆたきと
るを通過するがれど深き幾十仞なるや室に測り知る可はず
水勢矢より早く餘波常に岸に及ぶも理と覺之れ言地
北極光筆の以て書す人まにあらす

こけりあり上れと小石潭ありまたたた奇とせず長嶺石に
轉して直に崖壁を穿つ缺巖怒てと奇傲然として四方を
睥睨すさかから湯燻の水を飲まむとするがれし駒飲湯といふ
その間を流る水は激勢奔騰とれを瓶潭に比するに更なまを
れり河床の巖もまたみか攷理を存し甚だ平滑にして微に水
にいたさる大に起りしとせず

河水激してまた緩左轉して流るる一町ばかり長嶺更
に狭く相逼り今幅わかに二人渡飛し雲生し雷聲を前
す呼んて岩樋川といふここの丸木を束ねて丸の上に乗道山橋
と稱すむにりて裂罅全ら閉ぢ水は清浅となりいらく巖
の上たしきをかたの蛇手に流れゆる之を女疊殿といふ布を
きりおかく珠を散すかかく之を流れて冬雪をふむ地
想ありかこの如きも地敷百歩

跡をまよめて右岸の崖下をゆるる河亦ゆるり傾斜をせし波流直
に人脚を拂ふ崖上に杭を植えて危難を避くるに便す之を
巖越といふ仰見れえ今までつきたる巖峰一に斬然

石河力怪不怪不疊層巖地險國如蜀泉甘谷似盤
深懸負路樹瘠鳥聲寒披畫望天此名區欲訪難
分德を継て曰く此地すべし部遠峰巖環繞産物亦少くか
ゆるに道途絶峻なり一里あり此して因原に達する一里有安
間の矢立を徒渉すること七回深き股に及ぶ然れども地圖
を按し具實際踏査するに新道を造り溪に沿ひ此道
貫せざる不執の三河ヲ比鄰の如くせむべし也他は
石を鍾の成れるもの溪山の奇景を採集することなくして之を
鑿せむことを計畫し以て八年以降専ら此事に盡瘁
し之を地層に洩り之を其事に記し之に有志の協賛を求め

たりしからして産を治むるに暇あり時に村民の嘲笑を捉せ
或と呼ぶ溪狂とせし蓋せざるも此きあるに似たりたは強
硬の性撓挫を經て柔志いよかく遂に之を同輩するに
しるし今あますところは溪上一二里の所のみを路するは今
歲の中にあつて旅客の道をすくも此を輕車に乗したやすく
廣島にあつてを得へからむかししてわが志は略ぼ遂げしと雖も
かほ高きことからしむるにあり即ち風景保護のためは溪上の
山林を買ひ又た溪中に遊覧者の徑す徑路を拓きしなり
これ易事たり如くといへしこれにはや資産のなせしを
わがならずまたたに計策を講せざるべからざるなり

こたして終らむか死すも亦た餘憾なし而して又特に子に
爲すものはもして少く見ると之の地とせば之を江
湖に比ふすも夢を亦かむかといふたあり唯た歎くは
ちからむを

わいひをたかへらく翁かや地にて耶馬溪と比較したは
少くも不常なるかやと蓋し規模の大小因より同身の狭
にあらざるなり然れども山陰に於て溪山の脈を見り
唯か地たるに比して敢て異後あるもあらずしよ溪山
の絶観を杜時にありけらしよ又此林溪水縮むるも崖
面はれ岩不出づ崖たは龍田岬の嶽りたるに系

牛幅中錦を夕陽にさらし艶艶美絶もの比す可も其かへ
し山陰に遊はむかたえあ松白沙の天橋の外に流水時差
の新魚あるを遺るべからず

嗚呼今勝を彰著せらるゝ人をも不朽ならしむすを以て
月子有きの柳河に於ける長江の盧同に於けるみや彼このことな
り也には耶馬溪の山陽を将月瀬の柳堂を待ち飛河の常
我耐軒に依り天地の阪谷胡盧に於りたる知るべし山水み
世詞人に付つあるをしよ筆力雄健のものにあらずむは石の
なり又たすくむかし鄒魯の大匡史にその名を傳へるも其
り而して黄四娘いそり後代に名を傳へたるか陵の詩筆に介

たれもやりと風懐の首をもとより 女子の世にあらずもわれの徳を
賦する討野の十のを望む徳はさるまじかたわれはいますを
のつれに放てもまた煩る到らず一人の力この勝を顕著せりとの
の翁を不朽せりしむ徳はず遂にまた良朋昔身の徳を果すに
由なきを悲しむ

こにまた敢て翁のつふ事あり 人或は翁を侮蔑して彼狂
の名を負せしや而してこれむる甘受すすものやか
し荒手狂歌のわが 人誰れの狂ぢらざるものぞしか世
を擧げて混濁黄白に眩し名利に狂すた翁とわれは實
に山水の狂ぢり 所傳烟霞病癖泉石膏肓をもれ人百せ
にこの狂風ありや

さはいふや情に風流淡として見よものにあらず益し仁
人とはましくみ毀譽廢庭の瑣細なるも我翁に於て何の刺す
るところもなし翁を以て女を好むものなきむその人はこの指看
の岳松風に耳を流すをを垂ぬれものなきしわが汲し
乎として翁の名を傳へむとするはいさか翁の心にそむくの嫌あ
らむ然れども豊れちに故あり 試にかも今日耶馬溪をすま
で春海道人の名を憶ふもれかく昇仙峽にあえびて園右衛門
の古碑をみるもれあきを翁のこの溪に植ふるまた煩る二翁
翁せしところに似たるもれあり 冷刻の世はつねによく伝

を忘るべきは世の後の事をすくも其の賜をうけつ
その名すら記せらむを而して好奇の士聞出顯微を以て
新に爲る事と傳へしるの資材を披索して其の事
これなしなど折あらむにはその責を誰にか歸すべし
わつらに後に遊んでこの名を見たものまたその責を
たさむを得ずこれかこに爲る事跡についてたゞし
事年を地せし所以なりしやこれ以て程は満之せず
也日この翁の傳を草するを得む

よそのことは姑く之を措きわかれはたゞ之を
當代に表彰するに於て勉めすむはあらず
今及同好の士を會し烟霞を談し求
むる折あるは言の葉は下の如くにして
あらむか一嗟乎自あるも其
大辨鑄も聴け石可牙の
吟吟も新魚溪
とよ溪山の保護者大仁たる
風懷の古士新魚溪
推野田瘦君と其名を……と

附記、溪中二十四脈区あり、
みは翁の撰定に係り、
かつて該象の寄歌をもとの之を
編纂して未竟し、
断角溪歌詠集中に
具すいま重複の嫌
あれども更に左に
列擧せむ

- 踊庭
- 深篠川
- 瓶潭
- 一夜橋
- 連理瀑
- 駒歌湯

小石潭 (小石潭)
 千席洞 (千席洞)
 縮着岡
 馬脊山
 小春岳
 獅子嶽
 石渠湯 (石渠湯)
 箕腰
 楠巖 (たから)
 夕橋
 焚火山
 堰山 (あき)
 通仙橋
 臥龍山
 神樂洲
 觀月岡
 鬼面山
 明神洲 (あき)
 翁と川北とを折しも若き商人のすくもものあり翁はこれに得て
 わか家に出入する肉賣りかれも因形にかゝるされむ日行し玉とて呼
 びとめたつた借に翁は再び許りかれは泥に借りぬ

十三 三瓶より松江

因形に寄つて商人の別れより東北向して川岸にむか
 ぬと直に江川に流るる川は流波川に似て舟楫の便あ
 り大方は思はずみ洲までにて絶えて激湍をえ險し
 崖寺跡木がすししく時に清水なり日午のあやまた日
 暮を過えすと三瓶山ややく懸髪を途空にもたれ来
 り水
 川本はや所らしむ村なりこれより南は江川の南岸に流ひ
 けた高低ある道を三重乙原築物明塚といふ村を徑り
 川といふたは〜河を渡り舟をこきしむるに三瓶男子なり

渡後を拂はむとて財布を捨すたに少錢はし廿錢の銀貨を出
して尻を代へ来れと云に村中にはあるまじといふしかは河
にすまかといへば小供からも存外に分りは早くは方々此を
わらしの扱にまじしといふいぢらしきや

かて河を渡りては山脈をゆくこと百里粕洲といふにた
るた小糸といふと瓶山のふもをなり江のこにひきいて南向
すこれよりえの支流なる一小溪を將て溯ること一里ばかり次
にのぼり道なき一たなれのとろ志学の温泉場にまぬ
泉質清激温皮餅にかまふ一瀑こた映夜檻に倚りて
望まば三瓶の二峰也眉睫の間にあり思影團一夜守
の星を枕敷たかやまて明日の晴を卜すべし

二十四 朝七時迄導者をやとめて出づ西にすむと敷河に
むかし温泉場ありと伝あり一丘を攀りて急傾斜の池を
上ること半里も同かやのみゆあひて灌莽はしその池に
のぼりてば身は大い障壁の上にあり左は雌三瓶にて
正面には大と瓶巍然として巨人の如くすまをえれり左に
つまはてはあまの滝下す大谷犬吠をそは風穴丁子山に雲
を渡るわん等のなまありは平地にして太栗と呼ぶと云は
更に坑内を見れば東南麓すみに一湖ありたとば東

銚子みに一極約の水を汲せりおかし坑内はちと早飛に生
へられも大谷のあたるに樹木〜〜 本邦の地想火山か
からすといへともかゝるも大谷の完全に残るはまれなりこのあた
りまで里人は白く草を刈りに来り又た馬を牧す
えよりりて大坑の内に入る但存室の内と稱すたりてして
草間をたにやくこと數十歩鳥地獄といふあり 巖石の隙を
地上に抜くも此こそを隙際なりして何れ毒氣を吹き出す
と見えて細蛇の死し殺れたるも此美をみたせり 蜘蛛が
ぬむしを初め野鼠蛇、蜥蜴、蛙なり 那辺の殺を石はわれ
来た見ねば知らず右方は標のものなるべしとてさぶさぬ

坑中を横絶すること十数町西と瓶の間を山地櫻島といふに
いたるはたかしたに古屋敷といふところあり くにむかひはすあ
りしやしゝる山に上りあたるの村の心要りし若老か目盲いた
る翁を誘ひ出してここに棄てりやむ故の姨捨山のおかしに
にびてしかもは徳の念はゆる物語を導者の口より言ひつ
柳谷といふところより大瓶の隙りおむしは雑木をい茂
り之を推しおせぬげ倒しつゝの音も苦艱や、まぬぬれ
とも丹陽は長かす二十餘町にして絶頂を得たりしをい
し〜
絶頂は數百歩の平地にして一望曠濶淵絶えり樹木も

細花山草 曉初花と受けて地土に咲きみち錦のむら
しきぬえの種類はまぬ花(草花) かぶ花(馬糞花)(兜菊)
ほうこう、ぢふし花、粟花(草花)とさぎ、其、萩、あざみ、
だいてすきは一面に生ひ今も獨色の穂を抜きしは
りのところ跳しをわーおん擧げると久はみだり導志に同じ
しも地にてこの地方の方言なり

測量標のとてきるあたり 眺望最もあり 前には日本海
あり背には世敷の山岳を見る 雪石二枚の土壌脚にあり
毫も遊蕩するを許す 林身埋蔵星散點在し丹波
嶽映江山一幅の活畫圖を呈す 此眺多時にて去る餘
はす末にいつて流泉珍産にて一屬なり にてりていふ

測量標のあかー下の崖ありたるところに活泉あり 混じり
て湧出す一物にて湯を醫すと其味の美なる言ふべからん
凡より湯を東側にもしめてきたに雑樹繁としてつがまり
跳りたる一里半ばかりにて平地に出で根あり丸松と云
ふところにていふとに不念あり 如何なる神をまつればとや
とてに靈験あらたかきよしにて地師の人の言に冬寒す
るところをよしにて導志と云ふ彼をいしより之瓶の赤
掛布をめぐり 舟井を経て志学にもどるなりとを 往復の
道凡そ舟賃金を二枚と云やすはよしなり

流り下りて山にいたるより清流あり、みち揃すべ
しに年々れきひきけりたむ可家たにほしなほ北にす
みと神川の取も、伊佐所に沿て特道を取、伊津
目を經て一窪田といふ道に二分し大なる方を取
りて北にむかふ

及にてすしとて、窪田より何に沿て北に下ること
之里とて、村に比し小とて久遠といふ所の景ありし、兩岸
峭壁たして河水奔馳、樹木青深として、幽邃の趣に、
麗し

毛津を舟よりゆりて、やうと、少許一宿、北に比し、神那地

遠く開き、日本海の碧波、沙溝より、神西の市山下に見えて
その東に、おかしき名、北湖水あり、一碧、泓泓、鏡を磨し、日光
に映して、皎々として、山をありて、神西の市に、入り、国道を横
りて、細徑を直北に向、梓葉に、むかふと、北邊すべし、沙地に
して、多く、柳を植、やうれ、時より、なれ、を、男も、女も、みな、畑に
あり、井水を、汲て、畦に、灌ぐ、また、以て、田園、風物、一奇と、して
見ると、是

神西湖岸を、すし、入目を受、けて、おか、れる、三瓶の山を、天志に
かへ、見つ、すむ、た、覚、束、な、り、細徑の、時、に、迷、惑、す、む、む、と
あり、か、幸に、も、候、ら、ず、神、西、川を、凌、渉、し、し、は、は、堤、埧

をみ折しも夕暉は西の海のはらに沈み爛銅の光を放ち天
地は紅殺せられ北方の山脈は峰々澄け暮の禱中
に薄くうらなりてと瓶の山はまやに見えすなりぬ

かて七時半ころ梓染の所に分り大社に地きあたりの旅者に
投ぬま急とは離れてたれいゝる小奇祇園なる室中に尋
びおれしころいかりしが腰を挿けておてし其の何となく
にら最顔つりたるにふか快からし夜空風たして悲しめ
つく明日は雨にもやとあもふに傘もたぬ身のかゝる一
をきざしぬ

乙未年 病を患え大社に詣つ名たる古社せれはも大方
ら荒れて社殿の扉も朽ちあはれにもまたや、物造りぬ地
のせしはすべのありきま宇佐の八幡とあしほどのものなり
されど縁をむすぶの神とすけは闇中に泣いて余釵を擲ち
ぬか婦期をトして待ちつあむす可愛きも我未だもたき
この身にあはれ遠らぬ一兩年か回に家食かれはつたに
かまらざる賢妻を得せしめ玉へ人にすかれてはや耻ま
歎のほどを木綿たすきつねには似ず賽銭ばら〜と御
おに投が〜はしぬかすてをち去りぬ
これより追道を行き社前東に入る凡そと社神門郡に入り

て最初に目に付くは松の本の風まげなり。是は地皮の大木に
より十数本乃至数十本を一寸ごとに植ええの枝をほきみりて
屏風の如くつらつらなり。故に遠方よりして村前を望めば長
方形の縁なども此幾個となく田畠の間にまじりてあり。これ
他處に類するも此といふべし次に目に付くは井戸がはにり
直径四五人にして高さ三四尺のまじりて一個の石をくく枝
二つあり如何なる貧家にも大小の差こそあれその構造は
一なりあまりに見事なりけれとも此石いづこより産するやと
問ひしに兵道の田舎なる東海と云ふ村より出づる石なりとい
ふたぬ他國にも石は九井戸なきにあらざれども方々は此石

石をくくあはせて作れり又は賤しき人造石のみかゝるも此をある
まゝく覺えぬ

四里にして平田といふ町につく果然大雨降り来りていやは
むべしとも見えぬにぬれ嵐もあまりに見事なりぬこよよとて
取あずごぞ一枝を束ぬれ何にて年をまよしもう十数回ぬ
ば感心にあはらうや。けり。こより。松江にむかふ流松
あれども来らず雨もやまはまりしきりしけれも大に執
を得てすむ

小境にひりておめて兵道の湖畔に出づ暝雲雨を挟み湖
を陸し波光がほ踏渡り。この國に名たる一畑の茶師と

いふはいらあうまう此の山崎に入ることなるが今日は是れ松
にまてかおしなれと指さずやう路すから淋しき寒村の野
きしたることちくわつたに湖山のけしきに不平をなくさむ
秋鹿をすくる折も天色をちあくかりあり大雨はかか
来りぬむ大にききしむ此外に何方をいへたいたすた
いそぐかくて松江に分りしはあつらなりかれよこれやせむ
撰不資格なき旅安のやれぬぬききし指さのあつたに
み許をいへまうれくく草鞋をぬぐ折田のこぎは雨に
くれて重なり濕は袷衣にも透りて骨をばかになれり

二十一日よしの雨多残ち晴れて朝日ひそきはちやかに障子
に射かりしに好むいそぎ起す朝めしを畢(支度してと
ちまづもこのいそぎは神代のむかし未蓋雄神
が大坂を斬り八重垣の歌に鹽土の翁か娘かたらしあ土を徑
禁されにはまゝ建武のときは天馬を進献せしとき
り戦ふのときはは危子氏が官田の城に據りて威武をふる
しなむのこともあり歴史上の故蹟かからんとすけどわれ等
にはまゝのこともなかりし人の知らぬよ北岸の奇
跡をば探らむとすなりけり
島根郡の北方の海江長き凡八里かからうか加賀浦より美保間に

いた子の間と新産絶壁、海渚断続、屈曲出入あり、穴を
たどれば中絶はみたる紙、わし海の深く陸にふりて湾
を穿るところには必ず數十戸の山村あり、漢書をまじりて生
活す民情、噴朴にて太古の風あり、出雲風土記を案ずると
鴻荒の母神のわかれすみまひし地なりと云

加加者佐太大神所坐也、御祖神魂命、御子支佐加比賣命
關岩屋哉、詔金弓以射時光、加加明也、故云加加
國、忍別命、詔吾敷坐地者、國形宜者、故云方結
伊佐奈松命、御子都久豆美命、此處坐、故略云方酌
御穗須須美命、是神坐矣、故云美保

松江城址の下より、小徑を直北に取、峠のきたるところに、
路頭、覚來りて、迷惑せしところ、かからず、大層盛まると、里の餘の
ところ、峠とあり、かむしし、すりは、ある時を、費して、すむに、午に
ゆき、ころなり、こは、すむに、海江の地、小阪と、哉、わい、わ、加加、浦之
灣、口には、二つ、岩、黒島、桂島、古島、馬島、あり、て、けし、さ、え、す
い、は、す

灣の東北角は、くせと、鼻と、ふ、断、甲、なり、こ、た、か、た、し、名、の、洞、あり
と、字、は、久、計、洞、も、こ、は、潜、り、か、こ、れ、も、神、代、古、蹟、也、一、可、り
懷、橋、談、に、い、ふ、伊、特、尊、尊、す、ま、お、ひ、天、照、太、神、を、ま、ま、む、お、坂
に、乳、分、の、形、若、と、なり、て、る、の、お、滴、危、え、す、海、中、の、ら、き、こ、托、乳

味を受くるにすぎぬ味絶なり。又たは浦の女必ず左の乳大
きくはと佐渡の乳をたのか大甘き故なり。又た佐陀山縁記
には女のお玉風土記の従ふ無き一係は神佛共の洞と開
聯したるを載せといはく。さうと云ふか加と云ふことを伊井
冊尊潜門たすきてお玉はへ天下暗くなりぬきて替門を出
てたもさるや天下明なり。さうと云ふ伊井誤尊鳥呼赫栗と
のたまふし故にもかまひしなりといふれ。さうと云ふか加と
奇しく怪しき話と云ふた。さうと云ふか加と云ふは鳥呼のわざ
がれどもれも後目のたれと云えし。かまわれはさの洞を探らむと
せむれが舟を得きりけりか加と云ふ。

いなり野波にむかふ途に瓜坂峠といふあり。海より直に隆起
して高き強人と云ふ最大傾斜をなし決して瓜先あり。此
たら。坂にあらず折しも日は時すき此らなりて直に頭
上に射かり。洒山樹木風死してさよの吹く音もすえぬに
流る。汗は流のぬきなり。衣裳こしく。泣濡。さうと云ふ
さうと云ふと更に一層の困難をかへぬ
かして峠を降りて野波に出で又山路にかり。か加浦よりはず
べして三里餘なり。さうと云ふは風物の最も明媚なると
ころなり。眺むれば巨岩怪礁海中に散點。そのあつと
百を以て計るべくその状先にて赭色のいかめしきあり。上

に村木をつけて登りてありとりに趣を欠かずかぶるに海
潮活洲にこそ水の如く水底の石を吐く見え遠きなり山輝
水映の観世に匹俦を見ずともいいたけにこそ文に皆を決して
眼を放せば柔里の征帆探幽たる烟霞の中に隠岐の島に
鬢髪をもたぐるを望むらんを一言すれと下手せ松島は
はるかに立ちまをゆるを覚えぬ

なほ海に泳いで北浦菱浦を徑て片江にいたる今日七類の泊
るも一ちりかかこは高時赤痢病流行一ちまに箱
舟らさとも枕もなく風景もさまやならすと云まはれむ初志
を翻し同行者のありしを幸に南なる山路にかり森山に

むかふ同行の男は是早にしていつか見えすなりぬ峠を越ゆる
こと二つこの夜のも枕も嶺頂のなかのまにすれなり一六道湖
の水夕暉を浮かして錦繡の波を鋪く大根の二島の上に
漂ぶかく中江の瀬戸をへだて外江の市の屋瓦楯比以磐の
如きを望む

来からし三十ばかり杖やをしき都共草刈女と伴ひつとて
捷路を取し山が杖清水に湯を醫し峠をとりつとて
敷の有家ある村に出でここのかの女と別れをなすみきたれ
かしのいそ森山にこそぬ見ればおもしろはるかに若れり
小村にこそ宿危らしきものもなく對岸は境の港にこそ渡

此とすたに女を見せきず美保はれり三里とすきても
かゝるたどりつかむと心に決りつ

わくことか許にりて路は海江に生えり日ほすむにれは
半輪の初夜の月はきいげにと磯別木の片枝の上か
りぬ折しも華鯨の乳も音遠く揺手出てにかり見
すれむ谷がげに森のこんもりと思ゆる寺えかこほ
れぬ美次の海の上には金波銀波を疊みて東の方に向
て見えり伯耆富士の次にむすけも残りし一林のつゆ
たぢいぞりて空をさほり葉の名残をとめてすこしく卯道を
帯ひり

路の傍には電柱も有り純然とる道なれども今は美保と
境と其間に流氷の便あり人の道もたれにりこの故す
べと鞠して浅草となりつよもまたたかすは人を没せむば
かりにて車轍馬蹄のあやを見ず時には鹽木を入れから
む心なを甲括ちく道のた中にとてられしあるは
路窮りて人家の中一の庭のまるところを通ることもあり
たことまでも海江の路はれは清はつねに磯にたかく潮氣
に私に吹きたる長風は岸頭松村をも撼りて護の音を
なし清の音の絶るにやゆるわかむ草むらの中れは
殊に林氣をそへて冷かたり

福浦といふ事や中て岬角いづかめり夜は九時すぎしころ
やうやくに美保園にすぬ名たる美保神社の境内をぬ
けて不規律なる上た狭き町のすみまぐもめりて宿
を求むるに早く寝ふならしむるよしにて大方はを鎖しつ
たけともちたきも起るれこそあらはまた俗のあやしき世
の人旅と見て辭を巧にして耐絶すせむかたつきたる折れ
窮策は俗の道にて終果分署に留まり査公にことよし
せはなしけるに小使をしてわれを伴ひさる(き)宿屋に業内
せしめぬことむきまには最も世を愛相に遊どれ蚊帳の中に
横にすたりたるまゝわれを拒み一家なりけりたゞしわれも

今はぬる霖の功力を得て大威張にて奔り込みしことなんむ
とれもしばはあまははておの過失をわびぬるもなかや
こゝ美保の園むかへ名たる船つきの港なりしが近來境港
の好ぶ榮につれてさびれやよしなり今ま實際なる地を見
渡はわにいて浅く風波を避くるたよりなく巨船を定々に
送らすたゞし風景はやまやれんを海水浴場ありこと
に美保神社は冬寒者の絶えきるところなりむまづくた
ほ舊敵のゑのを刺し留めけるもかほし
神代むかへ御徳徳と美命のかはせしところなることは前に
引ける生衣を風上に見えつまた大に貴命の御子たる事代

ある神遊行してこの地に来むい魚を釣り島遊びをして
樂みたまひしよし八雲御抄に見えり 隠岐の島は波
の上と十六里をへたさう 波島のお天皇の地に流きんむい
し折さうにぬおしたまひしほしそのまに御歌なりと傳
ふる

弓の濱と保の閑庭よりわけて心ますまいたさこゝろや
鳴呼系衆の天子御舟にのせられ波はけりけりも流きん
むいけるよ身は今御樓にあり往を憶(ば)暗波自ら流す
枕もつかむとすしかも夜を驚かむ潮聲のたぐに眠をもたさ

十四 美保より大山

二十七日 朝八時流船に乘りて境にむかふ舟中昨夜世法に
かりしかの木立にあり鳥のやとす船楫に倚りて見れば
大山の姿を瀟然としてわれをむかふ熟視すれが整然とる金字
形に二伯耆守の名もことありとうたわれぬ今日は是れ
に出にいり 朝はかの峰巖に衣を拂い天風に御世
とちもへば心大にいそむ

舟は兵道の湖口なる中江の瀬凡に介程なく境につきぬ時
に八時半にあり南に國道をとり 米子にむかふの百回里
古村を相連れり 大方は砂地なるに日光きらめて眼を射り

清泉を求めむに多く生ぬる井水を呑みしこと数たりは
米子は伯耆の都會なりわきて今日は五箇盆杖前の市目と
てその賑常にままりなり伯耆の賑撃汗をふきは雨ともたむ
ばかりなりあやうき家にてまばこを椀をうたぬ晝飯にて
こどもちあて國道を東へ一里日野川を沿り小路を尋りて
尾高にむかふの宿又た一里

こはすむに大山のふもとをり脚走やうやく仰ぎて坂路をのほ
ることま里一々曠野に出づこは大山原といふところ頗る緩慢な
る傾斜をたし徐にのほりゆく原上には牛馬放たれて老波
の群をたしてかたにたをわけめりかへりて此を望めば

来り方我路眼下にあり陸岐の島を見渡さる尾高より凡
そ三里にりて大山の村にたすぬこまどのところにここの茶亭
と跡り及我石佛またありしのみこは海面を抜る数丈八
のこゝろ氣候涼しして泉水清しとまりし家は狭きま
からきたががずるこゝろをと取りまかたふ十九ばかりの娘人
柄よくつれしこよひは月夜にして大山の峰嶽にかけり
夜故かし

二十八日 朝起きて見れば天氣たとやうなすまじうは
いそぎ案内者を命し合は直にあり山次におかふ案内

の足は少くとも一歩一歩と我若者にしてよれいさ其村衣
を着て出さければわれも見えぬにいはれ定顔倒
せしやまなり

宿元の縁に立ち眺む大山絶頂いとも遠くわつた一
眺の間のみかも北側へ火の障壁の破碎せよころ到底をり
北からきれむ大山神社の前の鐵葺表のあらより 右に折
て行かぬ其街道をすまほい山樹林をめぐりてそれを見
あがる見上りれを傾斜の角度は三十度以上もあり 強んじ屏風
の如く屹として悉く樹木なく 草のみまいたり 登跡凡そ四
十町一回休憩せしみたての絶頂を極むを得たり

絶頂數十歩のひろきは眺ほ平地にして小池五つありとかの
木河柳など繁茂せしこまきまで障壁の爲脊に似せし
ころを行くと数百歩測量標のあるところにいり 絶頂より
長きして眺款をすまづる見おるところは北に障壁
列島の日本海上に浮あすあり 西に出る石見の境上なる
の三瓶山の圓錐頂を見東には三國山及び但馬丹波の連山
を望南に佐伯の山を看す也 朝は九時すしあせを
太陽のほることこまきばかり 遠所の烟霏もやくやく消え
て景物に現れ見すかきなり 然れどもたは凝雲の天に
に滞定するも其ありみせ日光に映染して瑤然たる五彩

るをせしむる雲の上に抜き出せる山頂の或は峰者前
或は教峰の峙するをどまり或方の村原は脚下に散
點して星の如く影影帯として互に隱約の間に入り天地
恰も瑤壺の如く身は兜率宮裡の仙に似り一に
朝風徐ろに面を拂い雪も亦た之に付あて層々浮動す
そのやまた靄霧を漲り羅裳を流る如く来はまた速
或は閑き或は遠つ下界の風物随て幻轉し柔子の氣象
瞬時に交代し端倪を得ず舊接に違はず須臾に
た盡く消え去り秋天の螢家の如しわれをた山の上の
大観を極めて伸氣の爽快なることいふからず一年中にか

天氣は希にて候といふし業内者のことばもまことにこゝろ
てつかぬぬをききし天下の名山の數幾十あるか
ずしかも今日の眺観にららふはほとのもたて波のと山を
寒の折のことたゞのみきれもここに留滞することゝ春
戀して去るに忍びやう

漸くにしてつね眺をあとにして歸路につくまづかの池ある
ところにして用意の樽飯をいたむこの池といふは方
一回ばかり炊く浅し底は赤土にして雨のたまりたるも
とがぼしたし高山の頂に有機物の害毒をなすも
なも念をよこして安心して捕す甘冽いはむ方なした

西には知人ありて一西日は滞留すも今暮したりとも
昨日よりやはつがたく明朝はやく暮すもあはしことな
れば今日もまた高山のすゝしところになむらむとい
に滞留に決しぬ

時は十時すぎたばかりなり夏の長き日をくくるまで
待つ退居たふらにものなく物の本にもあらばと、かゝる
もはちやく二時間ばせむかたちさま、我書置寝を、むまほり
日や、飲きて穀の地に、きみちたる折散あかたらち出
て、大山神社に暮しぬ社後も宏社たる上、所か所りん
か、ききたうとぎたふら、このまじ寺分敷十はほみ

みせ拾掇の清境なり、と我夜は、たかに、き酌みてえい
例れぬ

二十九日 早蕨大山の峰頂には薄雲かりて隘然として見
らるるを惜しむるにか、わが格、かもしなしにやゑ、す、
の鐵葦表のところに、たに折れ、のほること、二町あとはす
べてり、路、到ると、る、野草、露は衣袂をぬらして
虫聲水の如し、溪聲一つ、越せば又た曠野に出づ、右には山
支脈の此に、すて、石に木の生いたる、峰あり、い、む、
長年か勤王の大義を唱へ、を起して、こも、
折上

山^まぢりけるそのふとは弘上原なり一れとすくれば長野原
にして陸軍の馬の牧場あり一俣称たゞ軍馬といふま
て四里ばかりにして全く山をりつゝし國道の一驛なる赤
崎といふに出でしり

時に十時ハも東行すること八里由長瀬橋津を過ぎ
ぐと時ハ雨すこしく来りしがきしたることもなく坦々
る大道のきしたるがわたりにも飽きずたいえきにいそいで黄昏
名も泊といふ驛につく一井ありには有名なよしの東郷
の池の鯉を味を侍をりしかども今を如節として盛に網に
入る紅鬚の小鯛の鮮味に酒もうまくして舌鼓鳴らしつ
けたるをすきつゝぬむらぬ

二十日、六時迄一甲ばかりあ谷をすぐる路伴とちり人を
得て流つゝいざぬ海に流し又た離る時に高低あり然
ともすくて車を通すき大達なり一濱には温泉あり九次
の寶木の驛は清泉を以て知らる行くと少許にして水汲池
りこれより捷徑をいとして舊道にかる伏野といふまは海
江の沙路にしていづれから日午のころしや更たまさを定む

つゝは林中に入りやがて湖山池の畔にあつ池は周回二里にあ
まり山の環繞するものぢけんどきすかに老翁の趣もあり
やうせり月が賀露川を流りて道伴と川に半日の行程凡そ
八里に上りて鳥取の市につく時ふに一時

ひな歌に乞ふる、鹿野街道を積きり東町といふをたつて
城址の傍久松山下なる坂本四太氏を訪ふわ奇しき服装
とあぶれのはぢのつぎこよりと目をはたぬに付て来しわが行程
の迅速とに驚きたる彼れに引入れられ草鞋を解くや
がて茶を捧げて来られし若き婦人を彼にこれと妻なりと
紹介せられが此差の洞なるにあはるし心せらるも礼を失し

ねえべりしまにすませし吾こそは世才者なりて礼容を缺け
毎に秀才なる都人士の冷笑を免れざる天成の粗野武骨せ
ふかたき草履にてあるはれ

浴江坊僧酒を酌み談笑頗る樂むにまた彼の嚴君
たる老翁老人と晤し興至にけむ四方太兄俳句をいなり
出してふさる

秋風の何處杖必から君来たか
踏破し里君が草履に夏のこも
椽先の小萩が本にわらじとけ
松江の鱧くらふて来しやきみ

硯洗ふて庵に一詩を歌へてよ

園の名は清華といふよし 翠洞老人 倉城徳賢 此の歌は
をわけてふされまた寄歌をもとらう われも酔後の執に
まかして 五音こゝろ 次韻し 雲時に 成りぬと 此夜
た 何とぞ 暑き月 草を 遺憾とし たりや

二十日 疲れ 休もやすらに 昨夜の夢は快く 今朝は
遅く 起る秋は 暑うすものにとちて 朝氣冷かに 水のみし
くもり 空の色は ほほれ やらす 雨の来り

いで 田舎の市を 案内せむと 小波に 流はれて 立ち出でぬ

市東の 榎濱神社に 泊つ 招魂標も あり 公園の きたると ころか
く 出達の ちも なまに あり 茶亭に いふこと 少時 又きりて 市
中を 漫歩し 市南の 旗亭に 上り 南むきの 窓幅は 広く した
かく 見渡す さまじく 此は 田一面 真に 畫の 如く 見ゆ 名物の 蒲
焼に 腹を くらし 一酔して かく 年も あり すすし ころなり 且
雨は 降したること もなく 敢て くれを かけ せりや

け 新字を 関して 初めて 恩師 島田管村 翁か 白玉樓 中の
仙と せられ 訃言も 知りぬ 鳴呼 先生の 學術 道徳 真に
代の 儒宗 たり 惜むべし 天年を 假さず 未だ 耳聾に 及ばずと
溘然として 鉞舎に 捐す 伊人の 清容 また 見ふ ならず 晩学

髯蘇もかや今縁は慙たして聲咳に接するを得ずも
し他日相見るとあらむか小子敢て弟子の禮を執らむ
聖洞老人また一首を錢せり

孤杖飄然數月程疎遠到處寄吟情之冊佳景不為少
烟水雪山幾送迎

諸士みな吟あり少人以此答をもふかたに變調の律も得
酒醒聽到す宵鐘一劍風雲憐個儂十幾年天空海闊
之十里水復山重候急急恙ふ小澹夜月來催離恨濃
聲筑悲歎定應待秋風燕市約相逢

十五鳥取より生野

九月日 今日は農家の厄日とて二百十日なり 朝來飛雨濛々
四方大見いたをわんげんは位天を亂何れ共といふを氣込に
て一酌りほごぎをわんげん執よく辭して去つ時は十時に過ぎり
なり 彌地山のふもとをわんげん 文字坂を越る道はまろやすと
すき榎峠の方にかきふ市を東に出してころより雨はしきり
まきりぬと禁のあゝあゝたて道を強り 雨濺の方一里ほど
もたゞらぬと追まきしり大失策なり またかぢしとこらまで
もとより東此の方にむかひつゝに榎峠にかきぬ
折しも雨は篠つくかく疾風颯として勢を鼓すれごぎ

は衣袂ととも鴈舞しむる邪魔とちよみ雨ふせく便と
ぢらすいたぬれにかりて大谷につき午過ぎしたむ
かゝる浦面につきしも午後三時ころなりこの同程ゆつかに置
雨あまりにあゆべれむつりに泊りぬこの位ならば大谷より新
道を東南に一里半岩井といふ温泉場にももともあるかりしを
と今更悔めとも及はず泊りし家はむきむきしき上に故いれ
く書も出づほひなり夕暮を畢へる後を午に過ぎてふ
戒をも忘れ故帳つきてたてこもりぬ

乙日 みかきとともやうなる朝空に日の光いとも花かたり

あまりにゆれすきいれはと又た書すきてほどは危きれぬ
一里ばかりして小羽尾にいらし海汀にまづ菜種島大島を
ありやとやすきいれりこの山嶺の山路にかゝるか阿久根
の追傍と類ひて脚下にわたつみの浦浦すをみる北決の景
なり

乙里半にいで越えかけり此組にいらし大振島小振島あり小や
峠一つ越せぬまた海汀に下る左方の海には赤島白島をほし
ぬ大小の巖礁甚敷きなりぬほとあり十丈の銀涛奔馬の如き
て掃蕩し破砕して雪窟を潭河にゆく右方は鉄崖百
丈峰に崩れむといふ覚えず心かゝる乙里半を過ぎて岩坂

にいたるや、峻き華なる小市街なり。流まゐるところ大方むげに
いやし、浮村にして今を期即ち鳥賊をひらき板に張り
つけて乾かす腥臭たふふたむけなり。

時を午、遊や、南に折れてやがて仰らば、山の峠に降りぬむ
氷傾下土、幾十回をうらみ、天をい、アからむり、来り、雨時に
帽を撲つと、里に、一、餘部に、い、又峠あり、此峠は、樹
木鬱蒼として、溪聲の奇状を、し、飛泉あり、奔流あり、い、も
を、か、き、け、ま、ぢ、れ、も、宿を、い、む、旅人の、目には、大、く、一、里に
一、して、下、瀆に、い、たり、海、濤の、聲、こ、も、を、ま、つ、矢、田、川、を、渡、り、昔
は、の、村、に、入、り、こ、と、ま、る、夜、に、入、り、こ、大、雨、け、地、また、坂、あり、

と日 雨は晴れ、水村此を浸、り、とて、猶、村人、聲
を、ま、つ、朝、め、し、を、終、(南)に、ま、里、森、とい、ふ、村、に、い、り、大、衆、に
信、づ、名、た、る、事、画、子、の、圖、山、を、舉、げ、い、と、せ、但、が、城、崎、の、温、泉、に、入、添
の、折、こ、の、さ、る、住、職、に、か、の、未、合、せ、し、に、世、法、に、せ、り、し、は、し、に、こ、の
経、徳、と、して、數、百、枚、の、書、を、贈、り、た、り、か、今、に、さ、の、ふ、す、ま、大、方
應、舉、の、筆、なり、伊、谷、因、て、應、舉、と、稱、す、山、門、より、は、の、堂
に、分、り、あり、ま、ま、雅、潔、に、一、と、趣、あり、僧、に、乞、ひ、寺、堂、の、中、を
見、了、け、り、て、僧、を、送、す、と、か、時、辭、して、出、つ、ま、た、青、住、に、か、り
を、ま、た、東、向、す

宿舎に泊れたまつ入浴券といふあり十枚ばかりも来る一枚つ
ちちてやうなり共同浴場狭まにあらわぬ百人以上と見ると敷
の人の掻浴するをいれたまふの道無難帯たたまふにものほし
湯質また活汎ならず

病の若者の強さをアソビで出で同へ此通路出水のため通行出来
がたく明朝こを敷せし馬車も今に尻あといふに心細くあひ
ぬたし何となくつまらざる者住たに逗留すかりしやも知ぬに
こはまだものごとかりなり折れども貸本心車アソビを存外は
新利物のわがし持ちたると湯者の水に酔けさかやく十部は
の難ちやうこみ夜は酔後蚊帳の中一時すくころまで

折れちいさうやうに運びく雨の音をアソビの書見ぬ
こにまたいとも可笑もこのあれ便所の揚ふにや便あだにす
事かたぐおすアソビとちりこをいれりあたに此アソビ下し持
てぬいふからすと罪もさう勝つちつ独り笑電車入りぬ

四日 けおは淹留のつもうなりしが九時ころなり天色金時わ
らりし上十時ころ奥の岡も来りし人のありしをアソビ心動として
林をすいりし早ものしてつらにとち出づ奥の岡まで三里の
路思ふは水漬をかし深き脚を浸す奥の岡前に流いてあま
りちからわたりその中程の赤石といふにいとれむ對岸に有ぬ

たゞ武洞を望むと分相つらぬれり。かを束むるにせしむ
遺憾窮りなく躊躇して去らず村老ありゆれを戒めていふに
川たけを波は易し然れどもかの洞ある山の下には田墾あり溝渠
縦横つゝに達するがきふしといふに詮方なく。此後おれ等
屋のに差しかしあむやとあかしの中に俗の要口をたぎら
あゝかといひさうしてつゝに去りぬ

此の園よりまは依如川に流るる高き堤の上なり。土砂は魚
洗はれて乾きぬ路塵を揚がず足をほごふにいとも快く歩
調自ら増しぬ左右には翠を流れむばやもる山の如く印の如く
つらぬれを望みつゝ時には河中のをわき風景に目をたぎらぬ

鶴岡南を經中甲にて一鹿にいとも時々に日暮一夜此
宿を束むるに又いとも大方は拒絶して流れ是に於て又た電
車をあしむ父市場といふにすて泊る今宵も終りた
ぬ旅の宿がれむ一醉して快くぬむりぬ

五日 五時少し前に去つ暗き山を蔽ふて 缺月鬼の如く
初山といふといふ。夜明けつゝ飛雨時に来りしが喜
時にて歇み朝日子山の端に紅の霞を染めり。此れを
ねに川の西岸に流るしが今はいとも狭きと歸らむと云
て渡りぬ七甲の道一回も休憩なく一走りた飛して生歸に

つきたるは十時やのころなり

銀山は西の東七町とろにあり又西にと申神子取の支坑あり
その間輕便鐵道を架しよりゆれば銀山は本田金山は佐渡
銅山は之尾のこたを見せしははるかをりき坑内や等はは
機械等を見たるもなげんも敢て觀覽せず平野國臣
の兵を擧げし故蹟とてそのあとの夕張と南八郎の墓を此中
のところにありとすはしが何とすも氣のすくまぬわきくも
も見ず停車場に地せて付ちしを凡そ一時はあり十二時
の隙車に乗り南向すすはと我鐵道城崎の先を津井山まで
延長すすけ出もありこれの完成たらむには今まで最も僻
遠の境らし山陰共二道も大に便益を受くことなむべし

十、姫路より東京

車行十数里姫路の市東を流る市川に流いて上流より下り窓
外の風物見せすも甚だしとにもあらず此の停車場を以て
仁壽野のあまうにいんが西に書寫廣峰の徳山ありそこに
法華山ありみぢわが曾遊のところに宛ら故人と相見ふかゞ場
笑してわれと巡ふ白鷺の城樓林村の間に立ち見え初
つ姫路の停車場につきて車をとりして午後二時のころなり場
内のとれに婦名をみるたるを見たりといふいふあぢの二相

からむことごとく、たゞ可哀なるものいふかのつに定めしほし、
然れども田字の法を亂せざる旨いさし、以て然むをに非ず
姫路郵便局長田中英氏より、が従姉の夫より、二年おれ
夏一を討つせしま、されは皇親とも又たたつねむとて、あやしの
状に、お目かたに、著しとるなり、かゝるを、いさしとるに、いさしとるの家
を、披け、けるに、あらぬ、おれ、のかり、おつ、つ、に、え、事、ら、ず、せ、む、か、た、な
り、れ、お、郵、便、局、に、い、さ、し、と、る、旨、に、お、目、憤、り、高、松、に、轉、任、せ、り、
れ、さ、し、と、る、一、方、さ、ら、ず、高、松、に、い、れ、ど、今、又、す、べ、し、
又た停車場に、い、さ、し、中、時、百、付、ち、合、せ、て、湯、車、に、乗、り、お、れ、に、
む、か、ふ、車、中、は、頗、る、雅、俗、一、て、身、動、も、と、来、す、炎、熱、限、せ、

く、其、し、か、吉、川、に、い、さ、し、頃、より、飛、雨、吼、然、亂、松、の、向、を、斜、に、し、
し、か、お、る、城、下、に、い、さ、し、折、に、は、お、れ、て、彩、如、一、條、赤、天、に、高、か、
り、舞、子、の、演、次、勢、北、浦、田、日、遊、の、跡、を、宴、外、に、た、め、つ、四、時、
の、神、に、い、さ、し、往、き、お、れ、に、い、さ、し、瘦、れ、の、宮、に、い、さ、し、お、れ、
披、れ、外、に、丸、尾、籠、漱、を、い、さ、し、面、い、か、へ、り、み、せ、お、る、城、の、か、せ、し、校、舎、
に、お、り、し、人、さ、ら、か、今、は、工、科、大、學、に、入、り、て、実、地、演、習、の、為、め、に、お、
あ、ら、う、に、来、り、滞、留、す、る、も、お、れ、なり、其、旨、飯、を、終、へ、て、飯、付、山、地、
温泉、に、浴、す、今、日、は、再、度、山、地、祭、日、な、る、ゆ、え、に、て、夜、を、り、が、ら、
は、し、の、提、燈、を、持、ち、草、履、は、き、に、て、わ、く、人、多、き、を、忍、め、ぬ、
わ、れ、を、お、し、せ、む、と、い、ふ、お、れ、に、三、子、に、導、り、お、れ、て、市、中、を、行、步、し、

こゝからむかしあし、さびひてながしに決すしんかといふす
りまわすに腹の中にて大利害を両言にりて決せむのみと
へかこらるゝしんは口出さず権利のなきわいしき又もや
福原花街の中こゝなもめりり暇ほかり道に子てお
に疲れしと酌みさるる彼の酒樓に上りぬ
われすむに西海山陰の長旅を終へ志を遂げ得てこの佳會に
拵えられさるることせんとる氣軒印香壺を撃ちて放歌すあ
しはれ出てしは今晩はの聲もやさしきしんも一個共舞小
つらも籠も黙の打ちとらめもも無きにはまもるゝ彈絲と
唱歌とにいよゝうかれてこゝに目あたも神楽一夜の杖

を辭殺しころけ
雨殺しころけ

いかして疲れか寓たにかまこまれ一か伯のこととて知らず
酔半の藝者はいふ一昂りて根も毛もなきことに就きては由
地味を飛ばし一馬倒一きりさるゝ跡からかいて足れを頭かく
へか決すなりさるるぞうたてし

し目こに旅装を解け平然さるる姿とせり一こぎをも置上
産とし法人にけして衰す疲れいさるゝわれを送りて
と、官共停車場まで来りこゝにて身を別ちしんはは氣運
大阪東郷を徑一時ころ綿帯にけりて車を下るたあかし

友を巨椀に湖上た訪むしとてなり

深草此里をすし折しも空にはかたかた雨は蕭しく
とこころありぬ今朝のぞきを置き棄てにせしとあつとも
及ばやがて伏見戎市に下りしが路を信じて裏町にかりし
が車をも見出し怪す三里ばかりぬれにぬれてやがて淀川
の観月橋を渡り坡の上にかりぬるとちまち降ります大馬
ちあはすとある家此軒下にかげこみはしはしいつともかじ
の家なる人年まゆほして呼ぶに何事にやといふ見れむ言
もしとやかたあまりに淋難流と見まぬ守れむと此傘進む
といふ鼻紙一枚もたにてはせかくしぬれぬ今世に古きいと

し仁人の恵ともうれしく常に似て頭自ら低ぬ美手わ
れや驚鈍為すせしとへとも亦た丈夫なり好し期せむか終
は大なりとも忘れ思はふなりとも忘れさむを

訪し友は仲掠湖といひ今は法科大學にありたり二年
前木藤岐山に伝せられてさひ訪ひて文をいすしやめなり
は家人がほか度の劉印を知りて歡待備きにいそぬ
こ此日は雨ありついで夜にかりともやまず湖上た舟を浮べ
て月を捉へむと豫期せし興もよしてたゞ酒のみ付を吟して
一夕をすこゝぬ夜半風かけりて雨更に暴庭木吹折ら

八日はありやう

七日 雨風跡もせき天を転うらかり朝八時ころ辭して出づ
掠湖も多都に町ありとも世むいふに桃山の停車場に
こゝに汽車に乗り慈姑畑のあたりに東古の塔を望みつゝ東都
に入る掠湖辭してありぬ

待つこと数十分の時ころ汽車にのり東行す車中大方い
ぬして窓外の風物はいつたひかちゆも世今更見すとも世
ことちうとも富をくくり夢中に餘錢もまゝに煩る安心し
仍て伴の如くたまりし時久大急に下車をとり歩て久急

町といふにさう小野氏弟暢世家を訪ふ相見えたること一年
小野氏とてしらす

八日 東海道鐵道興津山此も三度之破損あり東の岡通草
とすけ今日は逗留す午以弟に導かれ大沙世觀音に詣
て又た熱田神宮に賽ぬ初めて泳ぐことすし遊んて兄弟
の里をれともた泳ぎてよとたのむてすき入れぬに後方かく沈
海の中に十分ばかり泳ぎてやがて出づるの心持ありはこと言は
道断ちうかしてたをかしのさし矢りぬ

九日 午後新車を買い換へる汽車 大方岡通せしよしをきり夜
の八時何分の汽車に乗る小舟送りて停車場まで来りぬ車
は少く酔友も載せて車に地すも敷十里夜は十二時過ぎ
濱松に寄こにて汽車を止むる故障りて下りぬといふ少
しくあてか外れぬが仕方なく停車場前の宿屋にとまる

十日 八時迄の汽車に乗る海風客に次ぎ来り秋は冷骨に
送るより 鐵路にやういふ街道の並木や松や電柱も成
とろくに倒れぬを見るべからば百十日のあいのなるなりとぞ
静岡にすつ興津のときろすむに修徳がけりといふに車は

いたすに地清見の風光いともりかきかき 富士の高
根をまの上のゆまのつらふもとをめぐり 御坂場を徑て小山に
心より車は止まり幾許人の乗客悉く降りてみな山は方
にむかふなり

から時に柵から牡丹餅のたまはけぬもけをなすに地あるは幾
民なりけらし 駕籠を昇るあり 旅客の荷物をつづもあり
山はにむらりて菓子くだれを賣るもあり 需要供
給てふ經濟学は大法則に従ひてつねに教信にはたまつて
成るもなきなり かつたるものわは荷物も持てる脚も強は
むこの山に一文の錢だにまかずいれ程の山路は朝飯前のこと、

大成体にてあらはれし福も常まつ陸續するを睥睨して
打ちすまぬ

あけはれは年十九なる花娘はほろけにやたひとりにて
の袂をながげかきししき岩の根に脚をためつわれし白く
あまりに駕籠は見え候はずやと問ひぬ今少し品かたく情
ある目まの可愛らしき女からむにはわれもどかに夜をいさ
かれを脊に負ひてもこれ山路を越せむとかもへばかきん
る衣袋のみはうさへも顔かみて且つはわれにいひ言
葉ははしく耳に障りけれと無しと喝聲あどかす
さぬ跡からちへむかへく罪なき事なり

小山と山北と花百程と里山らしきも花二つあり九の中程のとき
にて河内此より奉り酒匂川に入る涇は滑きてもさほ濁ぬ
これあまの山水頗り幽邃奇に絶し險を数えてはるか花村
若見もあるべし他日暇あるはわれ先づ謝谷杖杖を着せむ
いたれば見むとちもひてもと福志を遂げむと蛇水藏は山北
停車場より西南に栗松の渡を越えて七八町あり今日は波守
の所も若捲に生るうらと、おをさすやまも海にたはぬむらぬ
かいやむと且つは菱車花時刻の通りしむとの故を以て羅の
推考するにからくも切符を買い又た急車に乗り平塚に
る

馬入川の鐵橋破損して此を以て流車はこれよりすまぬ乗客ま
た車を傾けてよりぬ東に敷所にして河原にいづ群衆先を導
ひ渡舟に上らむ事ありて舟はわたる中にて吸とりや切
れず大方は衣を掲げて股の深きところまで水に入り舟乗れば
乗らざる混雑筆紙の多く寫す所はところにあらずこにても身が
るわれと敏治にまぢまり最も舟に舟に乗りし
かたの岸につきて假此乗車場をくるところに待つこと一時百歩
流車来れば舞して茅か崎に立つこにまた乗客を下りし文に
改めし切符を買けしむ鐵道支那の乗客に石物切にして怪ら
に規制的を以てその一班をこぼし

あまりの雑沓にあきれてわれと茅ヶ崎の村に入りて海り明
朝車上することほぢぬ客余淋隘、喧嘩頗るありく下婢と
も此不愛相にりこつは食りかちざる言徳に絶えし増し

十一日 朝飯一ツ 催促してやらやらにたため食自ま也せ
て停車場にいそしむ時五十七分の流車に乗り八時ころ桂ヶ
谷に下りてぬれり歩して山王山にいそしむ小島島水を
訪ふ實は昨日来こつよりなりしを一日を以て付ちかぬるやま
ぢり馳走せん酒に酔ひたに天下の山水を論しむとて本日
をくらし

わんがつてかれとゆへに遊ぶ我約ありしを遷延して未だ決
行せずこにかが即席の古籍の十七文字

紅葉狩此日を始す十月旬又い

此事は宜らぬ日もや、西に傾むとするころ辭して出で、湯車
に乗して新橋につぎともし、然る頃、大坂の唐土い入也
寓樓の榻敷のや、狭きところにかがりつゝぬ

嗚呼、わんがつて甚し長旅の最も長きものなり、日せ費
せしこと、十、行儀、舟車歩行を合せて、千の百中、旅資、旅人、五十
金にちがし、安中し、ば、素囊、かるるが、しが、人、存して、借

るを得るしは、幸なり、は、始すから、待、俳、の、か、随、か、あ、め、が
あり、が、大方は、わんが、今、文、遺、憾、とし、も、あ、は、ず、一、見、島、す
して、人、に、送、り、さ、消、息、の、は、に、か、つ、つ、一、句

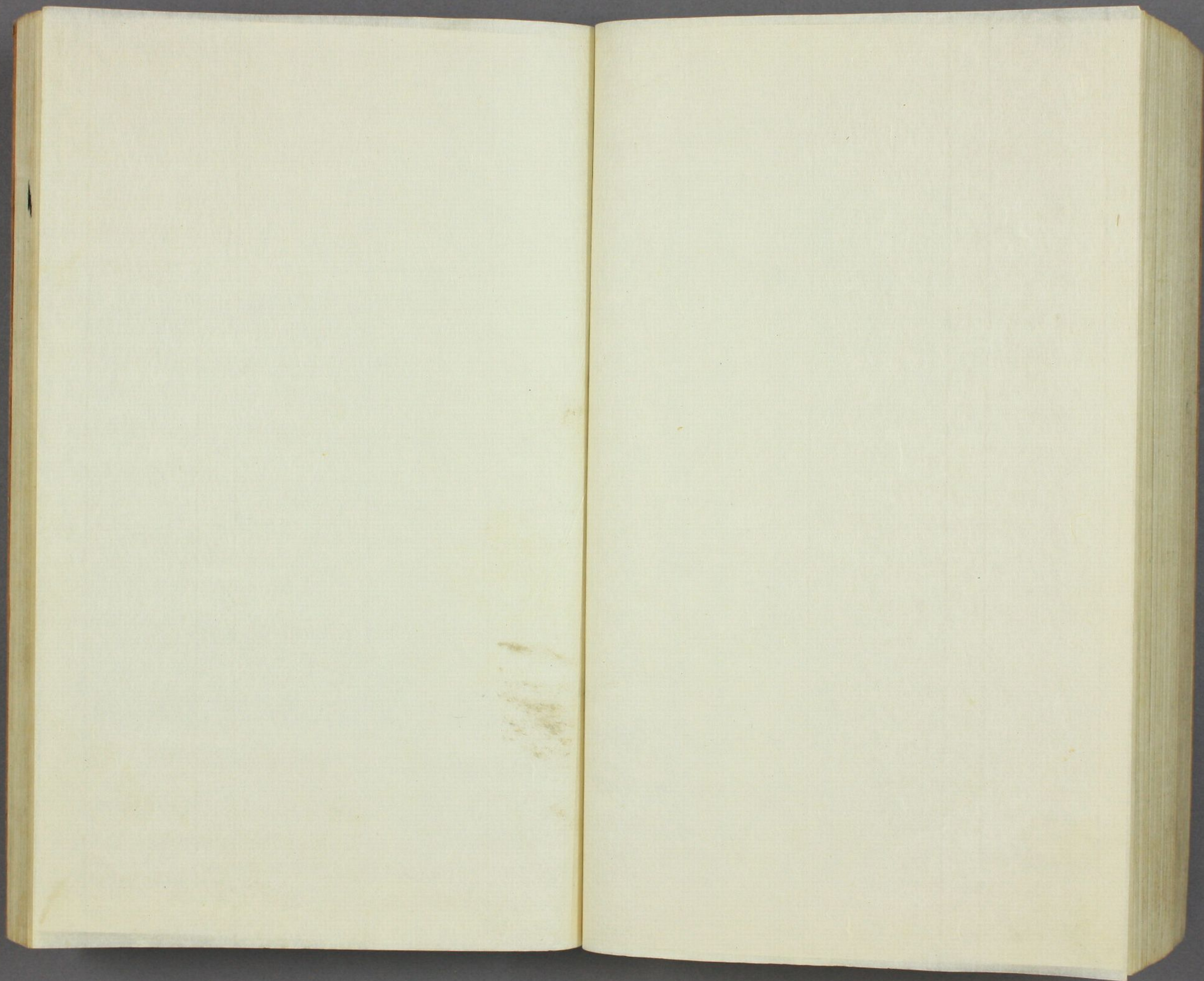
戀もなしわん旅にして夏瘦す

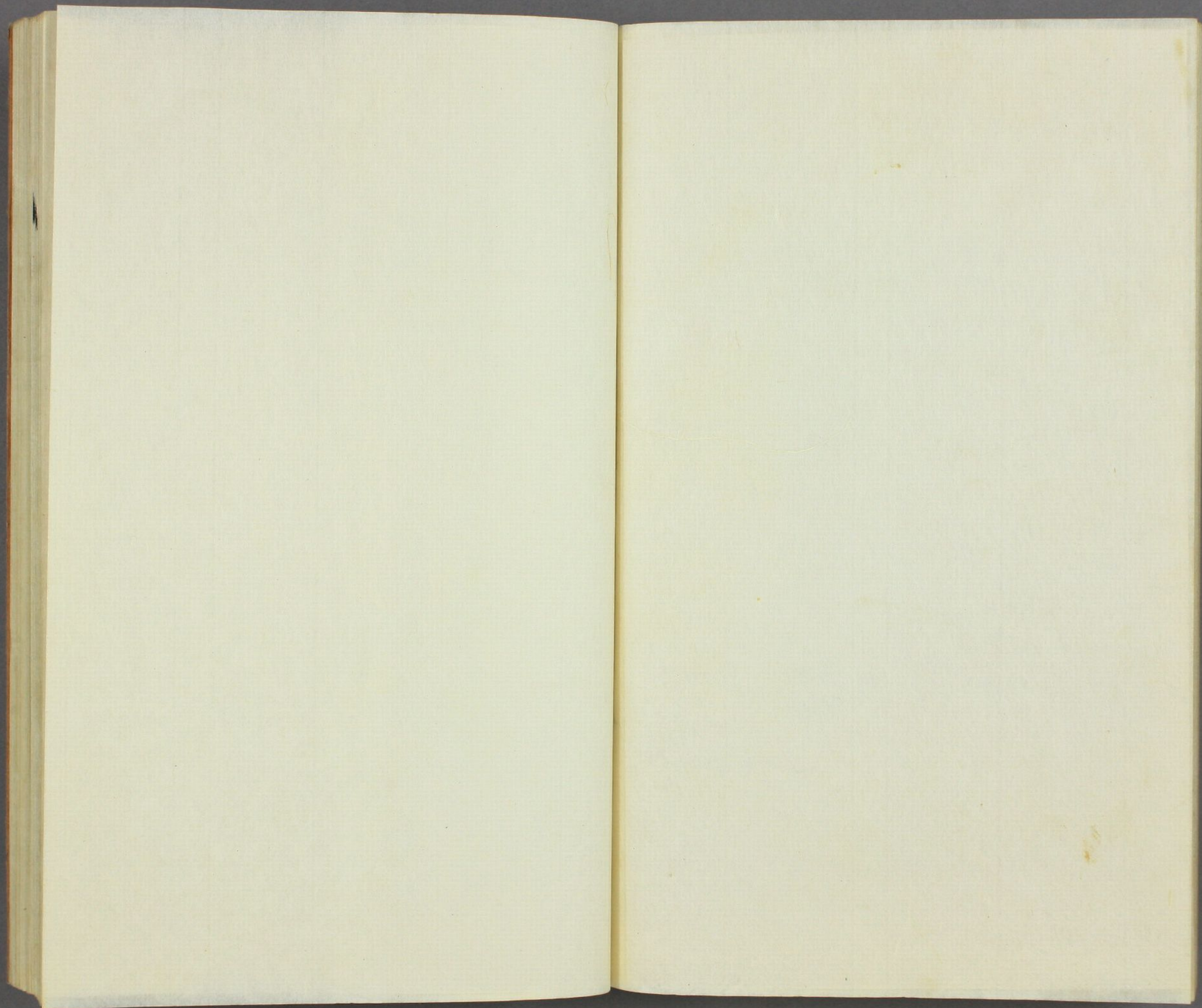
人に合かるとして、わんとは、い、は、ず、い、ね、り、こ、も、の、心、を、ふ、せ、と

旅千里財布もからにや、杖

あはれ、この、軀、は、瘦、振、う、ら、も、財、は、抛、盡、たり、と、も、わ、ん、は、江
山の、間に、英、氣、を、涵、養、す、を、得、し、れ、り、又、た、空、拳、を、ふ、ふ、て
披、の、冷、酷、此、世、を、闘、は、む、と、も、す、る、也

(完)





なりゆきの記

あやしき男の文から申すればかゝと硯の名にてもあふ
けふとを拵ひもろいし今の世界に現はしすきたる程
のほくぬんにて春されや風軟かた微紅を匂きて
柳さくらやこほりまきたる都の甲に叶りて綺羅の大地を
あそびするを見もろいしや情り歎けし切りて衣
かのあの旅はしや風流の女は空をまかせやうに
やらがむとて立ちあてしを殊勝なる

四月の朝早く旅立はつもの如くおつれたちて朱門地

東は畑つきたー青麦若生し朝嵐に霜を拂はして何
かく青しき爽氣人の心脾を清ふせりぬ常陸にて海を見茶もりも見方
は小山の間にたつてはたに切通りたるところあり絶えて曠
遠れぢめなし凡そ二つはめりたりして佐倉につく車を
りぬ

時午に迫れば停車坊前の飯石にたむけりといふふしため扱
てはよく御ひろひの旅となりぬ佐倉の町はちよひし
はまたたく通幅おほく家々お扱はずすじも繁華の
も有様を見ず今日は日曜の休日と太平の世の兵さはの余
りものよ十数人ついでとさり大道狭しと潤歩しつこ鳥道

大坂を扱すちかひによろけつわりやくは問はずと知りし御酒
召上りこのことあめさつちかひといひつりやくはいと苦しく
あしはつしが小坂たちまち左に折れて廓門の中に介は
頗るあやしく金もたすも色町の白粉もさる夜着に晝
ちから樂寝をせむとにやいやは見下け果てたる奴等のあ
りから兵士を以て赴く武丈が復田千城とか片腹いた事
あかしとあひつつけいんアか所を通り扱つて舊城の地將門
山がどついの方にあふも問はずしと遺憾なりし
大道垣ながらけに高低ありきたがる村余のぢらぶ外に
がめもぢらぶの句律の道をまぬの方のちおま酒を井を

過り中川にせりてた折し宗吾靈堂にむかふ敷州にて
印旛沢の上の塔に出づこの沈細長として烟波浩渺の如視が
けれ長河の上舟草漸くし碧水塘にはち魚躍聲
をたし野渡人なきとらん舟自ら揺るけし日は亦た以て一橋
の畫とすにらむ

柏木下岩橋を信て峽に入りやがて赤土の濱やすき一阪を
のぼる上すばりの車夫から車を挽き上すつ、流る汗拭
いもあへすといふ人の田舎者を相手に此に宗吾の再使の
物法をなすをすくもたし身修むは枯草是れ一部の義
傳を陪記したる也といひ日誌に年報月日より以下

瑣細の點にいたるまで一も浅きなく中々感服すきものなり
はの田舎人等が全くに歴代を以て謹聴せしむ理とら覺
えし

宗吾靈堂の在るところは公津村大字靈方より堂は花
を号授たりし赤脈寺といふに隸屬し七間四方銅瓦葺に
一つは石すまの村築とがや堂はに其の院あり中に石
塔を定る牛堂の如きには五重堂ありまた碑碣とあり是
實の老をいさもさらず招物を置りて此が傳記を以て
しつある商人の店を以て賑へし一寺前には敷すゑの
旅店あり其の故の遺澤に浴して生活するもの覺し

これより成田の方に出かふ合たる一隊 老若男女世慮
夏ばかり南サ大士遍也金剛の旗を真先に押し立て、
鐵錘を揺かし巨首を以て叫導して来る 嗟乎手民
的旅行のわれ等の奨励せむとする 志やしし 曾て教
的と我はして餘りに深からむる ちのれはか友として流
きて廻るぬ

中甲守からにて青松の更とせる大道にあつ 跡々守りて
の中の赤採やれふん食のや僧掩よりもうる 披篋必
ずしも度身者かたあらしと早んを忘れぬしといふ味を
とめてからは浮遊するからむさかむさかむさかむさか

は形のこまに對しては哀憫の情を記せとも然らざるも
のにはむらゝ一鞭の打撞をかへむとすらもふふ者なり
程ぢ成田につく所入らより坂もたつ所をのりて右に
折れる下つしたる所新跡すのにおがり 本坊をたに見て
仁王のすす石階を躋り 西側にとてる 石塔石碑の数をか
へつ 夜り畢れむ不動本堂あり 結構壯麗 彫飾精緻な
り 念中 丹先は金巻銀財に映し 法燈の中より湧れて
燦然として人の眼を射んとし 威徳凛然とす 仁王の前には
芝花ののり 吹より自ら垂れつ 傍の若者の生
と意氣らしきが 仁王の劍は天法なる 草薙のつるをさとし

者にて候やがらふしふとすま付ける事跡け出しておもふ存
分冠櫻の絶えかむばかりに笑うてくれぬ

再び石階をようて奥の院光のあたりに暮す寂堂たにありその
はははこも同しとこちかやさをかから浅草の中床のゆく
差指の客を自あてにとりくの小さを高床つらたれり射
的やらいふかごとをすこ床のまに十六七の女若きゆの同は
さまり橋ナに憚りけ小鏡を手にして想いつ撃つを見てど
うでもはしけたるものよとして心に瓜弾してすまぬこの中床の
くはははらるるあり田舎者かど定めてはははのことやふしか
（う道は火の邊の右も左も公苑といふを見てもうおの石階をり

と十六童子の銅像を見こし里塔鐘樓を比審し又た本堂
に詣でお尚の復聲とやらふもたなきなきをわらうて見
てすて可うあまうを費し扱てはよく下向の道にまは
りぬ

日はくんにちがく空はの森にかる鴉の聲がまよくいれま
また山寺の春の夕ぐれ折しも掃ききり入相の鐘に今を
さからのいおのせくらしづ心なく散り居つる雨と片いらり
く軽々舞ふを眺めたりたる心か一の年は盛したるこ我
程とも見むいといふ女おとめありけ

くれゆく春を送る風

花を散らすもいほしき

よみがもすそを吹きかす

あはれんの風ちかや

風に身をせむすもかな

輕羅の袖に吹きかす

にはふやは胸かきかす

君がころろにうはむかな

たぐたましくたぐらるも

相見たりもといふなれ

えにの奇しきながらせむ

一樹の影にに見せしや

君ほ、笑みつ花にはふ

あゝ花人にしやせり

人のいのちの朝ぼろけ

まだ物かまひ知らぬ頃よ

おとめはなよやかに

ふかきなまきも見えなけり

いつはらも人の世は

けがれを受けぬ尊きよ

名をたにすかぞれぬ

ふかきうらみを誰かえり

霊火はむねにもえをめて

われうつし世に望あり

いぞめりあふたのしをな

神にいのちを末かけて

香聞ふかくあたかに

わかしひ女か夜よの夢

夜半のこぼしり寝る

夢を泣く身は世のまじり

世を片恋に代ひ死に

おとこたのりあつた心

(花のトナリ)

門前の若松をいふに投す相宿のかとこすべと人々のいり
が王子といへるに討てられは奥の奥の平のち山
陰の道の若かりしはるむす日可笑きこらへて酒を酌み

飯後又た散歩す

わびしき者のつた敷へたまは合宿の軒ともしいたし王子
の房枕につくやいなや名にいひはかたあしあるは葉がしり
を交えわれ等はかかへにおむらねすもぬゆれは無暗
にた手起すわけにもわかず殿さま御通り 児文を痛
すれどしりしはく途がしりたまに疊をたうて起すむと
しりれはゆきかして目をさまやまずわれはどろやらから
しりて眠にふれしが氣の毒なるはお右にりておほ外に深
更敷の前の道はさかかきりておとこ

この日 朝起欄に倚れて曉霧赤く不動堂の杉林を
こつてけしきもえもいほけ疾く朝霧を終(き)てとちまつ道
を此方に可り昨日とあしき土倉一帯の跡をあやみ荒
海の村道まをらにてかしく長流の水先をササのつゝ、凡そと
甲にいて大畑かえりしにいたる

この村に穴太の蹟残りなるもたあはしきすまをんえたつね
村の東此まをらのおもとの甘慮敷十がむびつらやれりさ
いみせのまをらして且つ大かやうす破壊埋没したれむえんか
あらぬかきたたえりかたしるる米畑の傍にある一つはす月宮
ても奥を竈のなまをらとあはしき土人た岩危といひしは

人穴と栴す

このより十冊ばかりにて端の町より人家のまをらとこらまは
ぬいて停車場ありそのおに標木をとて、小御門神社道と
しるせり南朝名匠の遺蹟たつねてやまをて標に提て右折し
小川の頭をまをらまたあからずねまをらにまをらけむるをこら
折と踏らましやあを凌ぎつたり、凡そ十餘町にて
まをらにまをら社殿のまをらはよるづ折しく流らかに扱て自ら
尊代がー社殿にいらの岡地鐵柵にてか、いみせのまをら
村の邊葬と栴すまをらとこらにてこる、片の石碑は岡はま
しるせり、まをらにいら、月大御門のまをら

のぼやきまてあつかりー梅若丸の母にも似て字中の珠を碎
きたる流のかけし故が事のもとを起りたや

車行す時にしてこの鐵軌のぬりぬり佐原につくわれ朝のほげ
ら腹のいたむらしくなひる飯ももめさす町中をあざりて
葉をよめよあは快より香取の方にいそめ町の車にまた
るころより右折して眺む村田の時をよむ小丘にせりはし
めみゆると西向の瓦を三十二所にして上の傾めるところにいたる
こ香取の祠のたてたまふところの祠おには町家敷十廿スヘリや
ーらのまはまはしりや社殿のりり寺守の敷もをまてあか
うたに神杉木と一々として春雨の露を吹くやうな

ま減に公慶を起すところちばーか

祠のまくら馬場とよは公園のたるところにて花木活華
さうかに眺む晴閑大お根の西岸一帯の地を眼下に見るべ
したしおゆ露微の中をさるかの絶てなかりしが今日はいせ
津のまにゆきもつれあまの早きは妙なりすとて茶店に
いひしこと時百ばかり世間には神官らしむ方のまに人があし
まは顔生したるが顔ねせまで酔ひさしめれ可美まが
躍り込めしを潮にこそちきり山をまにらりやうのまを里
にて津の宮にこまの所にたご軒の宿屋とせりし村田
屋といふを尋ねて四時ころ投宿す満洒たる亭樓江に臨

て建てられ吳王の宮闕がらねども簾を捲かずして江水見
ふべし 晩に及んで寒雨暮潮を激して来り檻外の残梅香
溢るる前あつし春宵一眠衣を遠すを覚えり 河名物
とツル鯉の美に一睡村酒先づは微酔を買きて薄かぬ
夜被を推し萬事には氣がきたる宿せぬや枕詞酔は濁
にうきたる銀瓶の水 烟草盒とらびて絶えて不自由なく快
わむしものから仇夫せぬも怨は限なくかき妹子として
わむしからぬ置火燧柑子むく指夾のさむしをしほらし見
たしく酒弁たる醒めて梅しと夜すの夢をしも見らるる

四日 雨はやみらんも残雪は低くとちこのり 舟を休
うて息柁に航す回飲すへて濠川の西北に宛眺たる山
おぼろに暗く櫓のゆく舟のゆくえ覚束なくも知らずとや
江上た然きたる人家まひいげざるに河舟の堤花も柳もなく
寒さやままして春らしさ心はせず逢なき舟の中ふたりは
身ぶらひしてあつな勝にもたせうつらぬ折しも風は
通り中流ほとに激浪山のゆくがれむ北岸に寄りて櫓聲
伊軋として櫓とらぬ
舟行三里に―と忽ち開くところには名もあらざる浪津の
浦なり― 望み人際涯のまじく濁浪空を排して遠

とあたりは浪烟しんとして何となく物凄すやうに覺えぬ
に托湖を横をこす里にへて賀村を止る御むとら
より水幅甚く廣うて湖上の林樹風を遮きしれは波浪
の舟を揺らすものなりし鴨にやありむ水鳥のつらさを
浮むのともなひをまに行きつともしり打はくがしり鐵砲打
癖ある友は垂遊三人を鏡にも借りもて来つらむに
と今更つぶやくも可笑し

舟の息柁につきはしは十時ころなり河に詣て一拜し沙地の眺
や寒村の改を三町北にあはてゐるの吹屋島につく火
た二度目のことサハを友に案内して得をすの仕切らて

見しはもが少莊殿のやうに覺えしが今見れば境内の
造らにひろくして河原の規模の小ききに呆れむはからざる
わいしき

西の方へ三十分、鹿島城址の山を右に見て大仏津へにつき舟
を俦て潮来に航せむと友は談判の申位にあたりが
かちたの房、公等は何處に赴かるとや筑波の方と申すは
午切まで行きまはむ方々の都合よからるべしなむと又た
人の声いかにけし御方たちは潮来に今宵の御用あるが
むむいひみたる力を反らして笑ふにわれ等もだに氣持あしく
を覺えざるよし潮来は風月佳麗の區始末を以てある

地元のいそがしきな川に身をまかせしほろぬらんこころは冷たき
れたるには聊か平易の気味なき味は

一逢の飛雨を衝きて北浦を横きりやがて中津町をある
まじり狭き溝渠の中に入り凡そ二里を歩きたりしてその地に
つらつら朝涼風に乘る便をけりてわざと所に入らずして河
畔の涼亭破涼といふにいたる

橋端には世滴の聲あり春の雨晩に及んてもやまぬ見物
せき名たる十二枚橋は北利根の流をたてむかひなるが厩河に
ありとすなわそほまのこころなり 娼家は今は其数減りて大なる
家のみ五軒あるのみたゞけは白の袋を穿てし遊女の野

果にこそ女は世はいらし田舎の土がもたむがるも穴な
もれに對してこの路のなごいふにこそしこく若し旅
涼の宿の淋しくもはせばふ一つはからはかきり思ふ涼取
のそしやうむ夜まの夢はありきも眠にこそよこそと津面相
西王母の園の村ちにも似たる有難きかきも東京に
二年奉公したりしとがたてすれからの頬赤き少女の顔面も
やく轉り散まらばらむせむすも知らず酒一本を倒して
布圍を敷かせぬ

この地は古きむかへは野舎たてて殊に徳川の御世のおめは禁
たり候にはかへは衰へしとも仙臺をめぐりて来る者は

みず鉦子より利根を溯りて水にまてしと覺一くこは舟
人のうきをはりしに居る所とて賑ししがあし又た舟
凡物にみみ夏は夏旅の音として目もはるかに風流し
夕ぐれ瀟湘の中を漕ぎかゝる舟のひらきもはらきも
也に比類なき眺たして冬はまた暖きところなるは
幸は東流の水に歸して刀兵の劫を歴し秦淮の
佳景の風月わつかにるゆきとめてむかひも心あは
潮来をよむとれ誰か今昔の感を起さくも我を
常陸の潮来の里は東に五町街にあらしし都より朝
のち北入のねはらむとて世に花のあはたすのうら
い

島はふもきうらり 春の鹿島息梅の浦こまても
にかみふし波の西岸は西南にうらり 数千里の
景境よりしり次まで鉦子より親かひももらす
せしとわたり 遠度の城を設建つてはかみ潮の
も入るす海仙堂の河津のみなすまた西の入口に潮流
小阪ありしはしほのたにあらしに左はみつしとて
り遊舟まで十餘所なるは海下としてやちり
と我をらりしとて沖来は私の目あはれ森とて春は梅
のあはれ四季のなみとてあらしといはれより
島年にとりし

むかへ十景の腰纏鶴に騎りて揚がに下らむを欲しんや
ほくせんと人といふも同じいなるわれも人なりやたが黄泉のまは
故に天晴道徳空同の果々も持てたむかひでたしつらし

五日 五時といふに起きてかきかしたむかひは豫定よりや次
てら時せぬに来り直に飛ぶ朝日丸といふ船にていふ錢並
漢ほどの成程、わづかに五割増といふに上等と酒なれり潮来
の船家らしきが右に見えて十二橋下の水門を左にせらぬ北利根
の港を溯るこゝか停たして油たる霞が浦に出づ雨晴れは朝
比天色乍ら淡ふかかたにあらねど西には筑波の鯉又天降に停

えて片の新ねり。波にかりたる眺めいふ事とはよき事すしは
らして又たさう来り大河の上にかぶ旅舟のきしきしは
もかくてすまじう舟をとめしとまに崎半ば木立に上浦に
しほしは十時のいりさるる

颯然として斜にふりしきる雨を御すて筑波にむかふれを
一里半に上藤澤に上じ波には晴れつ暖日あふ林路に斜日
や春風微和をいひて汗をかかしく流れり小田に休絶
せしと今宵は筑波御泊とや美し人共にくま酒の酔
に春の夜の夢いかにいふ浦山しとむかひかきれて急すを
ちきり心の野に草わつかに抽はしとむかひ釣する人のあし

に又王とちりては龍の中なるをすてぶらあまの天氣
かりしも書里の道いつかあ井つして筑波山白井より國の境
名高き蚊梅のあのかき春の目や何かもふとせくえいほか道
逢す。ちらむ遊女こころに面鏡を伺ひ見しにあらはれか
み歌の血を顔に汗えぐり白粉をつけ紅袖をかきばうつしあま
夜の花は書見物にもあまかしこま切りぬけたまゆれ顔
る執りかりしものからある家の格子の中より遣子の姿も大
に守びとめられしにさすめた原保も大にあわて、歌かたは
ず赤らめ脱免の如く逃れ去りしが垢に冷滴の腋下になん
と笑はしむ笑止せ。

ノ聲の空に雲元たる筑波根のまにほふけしきえもはず
の日は山嶺に衣ふるはむとちよんて心大にいそむ

舟路ちたりに打渡る霞か浦の水青く、

あした花紅に雨晴れて西に見えり筑波山。

天際とほくかの山の心あらにむかふるこ、

絶えて久しき戀人たぬぐりあひたる心地せり。

舟しはつれど國の上歩みは長し路は道、

山は木がくは花かざにのりよ〜
山は木がくは花かざにのりよ〜

鉾杉の下に暮む〜
鉾杉の下に暮む〜

火が根に咲くあらば花の匂しをいれや
火が根に咲くあらば花の匂しをいれや

山下道といふごとくみかざる室に峰音あり
山下道といふごとくみかざる室に峰音あり

入目のみ残さるるはさくまのついでに
入目のみ残さるるはさくまのついでに

むらさきまこほら筑波山よらのぼらけはあすの目よ
むらさきまこほら筑波山よらのぼらけはあすの目よ

この世を脚の下に見てみふはむ天津風
この世を脚の下に見てみふはむ天津風

龍淵の折とまり家の結束といた投すこの家の娘にやまた
龍淵の折とまり家の結束といた投すこの家の娘にやまた

若手女の肩にほやかに面白くてもまで美しといはあらねど
若手女の肩にほやかに面白くてもまで美しといはあらねど

何となく涙〜
何となく涙〜

らたがして起る静か〜
らたがして起る静か〜

く流石のぼるぬんじんもこの時の月付か〜
く流石のぼるぬんじんもこの時の月付か〜

〜たししと眼のわかれのこゝと故確とは保証証をさす
〜たししと眼のわかれのこゝと故確とは保証証をさす

ふたりとまた念はけ按摩とらしてもますいづれも眼の見
ふたりとまた念はけ按摩とらしてもますいづれも眼の見

わらわに〜して星か〜して夜色くら〜たちこめたる山下二帯の平
わらわに〜して星か〜して夜色くら〜たちこめたる山下二帯の平

野に炬火燃きたるを指してあけられ沈黙の火の影しきよ
野に炬火燃きたるを指してあけられ沈黙の火の影しきよ

花珍らし〜眺知らせとてわさ〜
花珍らし〜眺知らせとてわさ〜

おより来る人もあは
おより来る人もあは

ば夜へ流波の好橋の酒に酔ひたりとて美しかりし夢を張
りつゝもかきし山中の夕陽は余旅の記文に具しんを
こに記るをす陰峰の影にのほりつば露雨木末も吹
きて足元は見えもこりなく寒骨を送りて又
しくみたる地えずつりて茶亭にこひ中氣やみらしき命
にぬちやつて見えてかりにまづさうなるもの栗園子歎
けりし石のよきたまたみに見る目もこりまししく程
ちとちきりて申の旅の一事にこひ田楽の豆付肉に
腹ふらしやがて陽峰の影に宿で加波之尾にのほら
むもの縁程を翻して新橋推先に下るに決す

山の脊の村木もこり北風はさきこ吹きやへて帽の底
ちむを防ぐ程もたに空さは知るべし五十町の道よりつせ
ば推尾のゆふゆふあり由余にためわらしはわ、お世教のそ
ま尊く拜まれぬ

堂右に齋場に奉納のらは合を見ること一時間あり百
姓ど我袂折目たゞしく古風の礼式をちすさま殿る殊勝
に昔後に矢をあつめて唐名陸國流波郡流波町何にか種平
先生ちやだいやど高らかによみあけしをさすはしがちやだ
とは何の事やらん以てんらす石階をとりて堂前の宿
処に入らひるげしたむ

かの青面獣先生も這て来られつゝの袂をすけば昨日見
す家にかゝつゝもれとこわ日進れんて今日も是れ
十二里の道を夜はしつゝかゝるをふかす但し君は頗る覺
束がしゑしわれと偕にせむ酒一升に肴代原を、かゝむと
いふ青面獣は彼とくはず玉子罷りつゝ、何もたれあきあり
る人はしかするかも知れずしかし大方はぬにとまらむとわ
れふといひいたく、聞れのすがた見ふからんと氣の毒なりわれ
は友にきやきつゝかの原のみならずわれの旅もこたむれは
真にたれあきなりし流子なりあきかゝゝんといふ旅行記
の又とすふきなりとわらふ

飯がけりしころ十三夜は女の群も来らうといふは遠くも
這路くて来しよと心に感して扱とち出づ申振にあつた
出でれ道を三里をたむかひ松原寺間を徑て下谷にわ
道すからかゝり見ると浪波の山はたえす雨心もよそ時に降り
来りつ

時ふに四時二時が待ては流車あれも夜遅く着きては炊
はして今夜はここに泊ると決し停車を坊前の藤原に
投すかゝつて次の日七日の一番流車に乗り都に下しは正
午雨の中に赤い花を賣し宿坊にかゝりて夜食の
際酒に酔ふまでをむらぬ

と我行わつたに日舟車を借りしと頗るあつた
敷は二十里ばかり一日に平均して四里に及ばず何はともあ
れ名たる旅行家のえのまは先決もあらず且つ道
中は温るの旅に日に光彩を添ふる味はずは向か
りぬ我旅のあつた敷をいしてわれには減るにあらざること
もあらざり

